

---

# IS&lt;インフィニット・ストラトス&gt; 月明の守護者

HAL-HAL

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS>インフィニット・ストラトス< 月明の守護者

### 【Nコード】

N3751R

### 【作者名】

HAL-HAL

### 【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった主人公は、『奈々瀬 ユウ』として転生する。オリジナルとは若干異なる、自分が創り出したISの世界で彼は何を想い、どんな物語を構築していくのか。

ガラスの平穏、捻じれ狂うセカイ、無限の欲望。  
望んだはずの世界は容易く反旗を翻し、容赦無く牙を剥く。

「……偽善だな。人は利害のみで結びつく生き物だ」

「奈々瀬ユウは、私の……敵」

心を侵食する現実、襲い来る絶望の刃。

それでも……護りたい物があつた。

「現実を知り、それでもなお幻想を抱くか！」

「それでも僕は、人を信じたい！」

人の心が闇に打ち克つ時、守護者に秘められし力が解放される。

これは、人の闇を知り、拒絶され、それでも人を護り続けた、一人の少年の物語……

あなたには、自分の命を懸けてまで護りたいものがありますか？

外伝始めました。こちらからどうぞ。

<http://ncode.syosetu.com/n2667w/>

## Shift 0-1 「Prologue」(前書き)

初めまして、HAL-HALです。

今更ですが、最近のIS人気にあやかり連載を立ち上げました。  
今までちゃんとした作品を作る機会が無かったので色々と至らない  
部分があると思いますが、どうか生温かい目で見守ってください。

CAUTION!!

本作品はチート成分満載、及び原作崩壊が著しく、

一部のキャラクターの設定が原作と全く異なる場合があります。

また、作者は素人なので更新が不安定かつ遅いです。

「こんなのISじゃねえ!」「俺の嫁を汚すんじゃねえ!」

「一か月更新しねえとかふざけんじゃねえ!」

等の感想を抱かれる可能性のある方は閲覧を推奨いたしません。  
すぐにブラウザの戻るボタンを押してお引き取りください。

それでは、お楽しみください。

## Shift 0-1 「Prologue」

「……知らない……天井だ」

目を覚ました僕は開口一番にそう言った。だが今の一言にはいささか語弊がある。

今僕がいる空間は辺り一面が白、白、白、白、どこを見ても白。遠近感という言葉が介入する余地なんて全く存在しない程に、真っ白だ。

つまり、天井があるかと問われれば僕は首を捻らざるを得ない。

「……どうしてこうなった？」

僕は自分の内面に思考を巡らせ、ついさっき起こった事を記憶の底から引っ張り出す。

まだ冬の厳しい寒さが残る2月のある日、僕は仕事が休みで、なんとなしに近所の書店にふらりと出掛けた。その帰り道、交差点でキヨロキヨロと辺りを見渡す幼「ゲ」フンゲフン！

えー……小さな女の子がいた。

その女の子はあるう事が向こう側から来るトラックを全く気にしておらず、このままだと奇跡が起きない限り轢かれるだろうと思った。だから僕は…

「少女のミンチなんて見たくなあああい！！！」

……別に僕は少女が好きなワケじゃないんだ。

パツと見、そんな単語しか当てはまらないと思ったから言ったんだ。  
……とにかく僕は女の子を助けるために全力で走り、女の子を突き飛ばした。

その後は……よく分からない。たぶんトラックに轢かれて死んだんだろう。

今思えば女の子を抱いて全力で逃げれば良かったと思ったが、過ぎた事を悔やんでも仕方が無い。

たとえ書店で買うはずだった小説が売り切れて買えなかったとしても、僕は悔やんでいない。

女の子一人救えたのならそれでいいと思う。

「……よし、回想終了」

つまり、結論から言えばここは死後の世界というヤツなんだろう。……考えてた所とだいぶ違うな。三途の川とか無いんだろうか。そう思いながら辺りを見回していると

「きゃああああ……!!」

ッ!? 上の方から悲鳴が!?

反射的に体を動かし、上から降ってきたモノを回避する。

「へぶしっ!!」

ソレはそのまま地面（立っていられるし幼女がつぶれているのでおそらくは）に激突した。

上から降ってきたモノ……それはなんと

「あの時の少女？」

「私は少女じゃありません!!」

おでこにあざができているが見間違いではない。まさしくあの時の少女だった。

…… 本人は否定しているが。

「私は神様なのですっ!」

自称神様は左手を腰に当て、右手の人差し指を立ててこっちに向けてながらそう言い放つ。

どっかで見たことあるなこのポーズ。

「百歩譲って神様だとして、その神様が死人に何の用ですか？」

普通死人は閻魔大王に裁かれて天国か地獄に行くはず。そこに神様が介入する余地はない。例外を除いては。

「そのう…… 実は貴方はまだ死人ではないのですよ」

ばつが悪そうな表情でそう言い放つ幼」…… って、ゑ？

「僕は死人じゃ…… ない？ じゃあここは？」

「ここはこの世とあの世の狭間なのです」

なるほど。ここはあの世でもこの世でも無い狭間の世界。故に何も無いということか。

そして僕は死んじやいない。つまり、この神様に頼めば僕は元の世界に戻るはずだ。

「じゃあ早く元の世界に戻してください」

「それは……できないですよ」

神様は目を伏せてなんともいたたまれない雰囲気と言った。……待て。

「戻れない！？ 死人じゃないんでしょう？ 僕は」

「確かに貴方は死んではいないのですよ。少なくとも『今』は」

「『今』は？ それはどういう意味ですか？」

「貴方の体はトラックに轢かれて重体なのです。」

お医者さん達が色々手を尽くしていますが、30分後には体の全機能が停止するのです。

今貴方を体に戻した所で助かる見込みは無いのですよ」

「なら貴女が手を尽くせばいいでしょう？ 神様なんだから」

「私は神格が低いせいで現世への干渉能力がほとんど無いのです。魂である貴方を引っ張ってくるので精一杯だったのですよ」

「……………」

言葉を失った。今から戻っても本当にあの世へ行ってしまうだけとは。



もうここで存在する意味も……あれ？

「何で僕の魂を引っ張ってくるなんて面倒なことをしたんですか？」

「それが本題なのですよ」

神様はようやくといった感じで話し始めた。

「私は現世の調査をするために神界から遣わされた新米の神様なのです。」

……ですが現世に来たのは初めてだったので、つい見入ってしまったのです。

それですっかり不可視の結界を張るのを忘れてしまったのですよ。

普通の人には私を視る事はできませんが、能力があれば視る事は可能なのです。

そういった人にも視られないように結界を張る義務が私にはあったのですが、

それを怠ってしまったのですよ」

「つまり……僕は見なくていいものを見てしまい、拳句の果てに助けなくていいものを助けてしまい命を落としたと？」

「私は現世への干渉能力が低いですから、トラックも透けて通り過ぎるはずだったのですよ」

何て茶番なんだ……。傍から見たら自分からトラックに飛び込んだ自殺志願者じゃないか。

神様のミスで死ぬなんて……不幸だ……ん？

「正直驚いたのですよ。私を視る事ができるだけでなく、

突き飛ばす事ができる人間がいるなんて。貴方は霊媒師か何かなのですか？」

「……違いますよ。ところで貴女はさつき結界を張る義務がどうか……」

「そうなのです。貴方は私のミスで死なせてしまったようなものなのです。」

これはイレギュラーな事なのです。本当に申し訳ないですよ」

深々と頭を下げる神様。待てよ？これはひょっとして転生の件くだりなのか？

他の作品ではあっさりだが……出てくるまで結構かったな。

「イレギュラーをそのままの世へ行かせる事は出来ないのです。こういう時はイレギュラーを転生させると相場では決まっているですよ」

「相場って……まあいいか。それで、転生に条件はあるんですか？」

「よく知ってるのです。もちろんあるですよ。」

転生先は、イレギュラーが元からいた世界はたとえ時間軸が異なっても禁止。

転生にあたってイレギュラーの願いを一つ叶える事。この二つなのですよ」

「つまり、転生先は僕が元いた世界はたとえ時代が違ってもダメ。そして転生する時に僕の願いを一つだけ叶えてくれる……そういうことですか？」

「飲み込みが早いのです。私は優等生が大好きなのですよ」

……まあ……そういった小説は結構読んだからなあ……。お願いは一個か。

読んで字の如く、一生に一度のお願いだから、よく考えないと。

「そろそろ決めるのですよ」

5分後、神様はそう言ってきたが…転生先はすぐに決まった。  
あとはお願いの方だが……よし！あれだ！！

「じゃあ、転生先はインフィニット・ストラトスISの世界で」

「ISの世界ですね？　そこなら問題ないのですよ。お願いの方はどうするのです？」

「僕の部屋に一冊、ノートが置いてあるんですが……取って来ても  
らえませんか？」

「……へ？　それがお願いなのですか？」

「違います！！　お願いに関係する物なんです！！」

ノート一冊取って来てもらっただけでお願いはお終いつて……とんでもない詐欺だ！！

「まあその程度ならのーぷろぶれむなのですよ」

滑舌の悪い英語を喋りながら神様はパチンと指を鳴らす。  
すると地面に一冊の古びたノートが現れた。

「これが貴方の願いにどう関わるのですか？」

神様が怪訝そうに訊いてくる。

このノートは僕が書き溜めた創作ノートだ。当然二次創作も書いた。特にISが好きだったので気合の入った作品がいくつもある。

僕はページをパラパラとめくり、目当てのものを見つけるとそれを神様に見せた。

「この作品の設定を反映させてください。僕が主人公で」

「これは……ISの二次創作なのですか？」

そう言つて神様はノートに目を通していくが……徐々に顔を引き攣らせていった。

まあ……主人公がチートだしな。

「恐ろしい事に不可能ではないのですよ……でもそれなら最初からこの作品を転生先に選んで、お願いで主人公にしてほしいと言えば良かったと思うのですよ」

「神様がそう言うならそれで構いません」

「でもこの作品、途中までしか書かれていないのです」

「丁度いいじゃないですか。作品は自分の体で完結させますよ」

「それは面白そうなのですっ！ 私も出来る限りサポートするのですよー！」

作る側から演じる側へ。何が起こるか分からないけど、その方が面白いと思う。

だから僕はわざと完結していない作品を選んだ。

「この設定で良ければ転生させるのです。言い残しは無いですか？」

「……………ありません」

僕は少し考えてからきっぱりと言った。もう決めた事だ。向こうでどんな事があっても後悔はしない。

「それでは逝くのです！」

そう言っただけで神様は指を鳴らす。待て、字が違ふ。

僕はそう言おうとしたがそんな考えはすぐに吹き飛んだ。なぜなら、僕の真下に黒い穴がぽっかりと口をあけて……

「これは……………ベタ過ぎる」

そう言っただけで僕は穴の中に落ちていった。

## Shift 0-1 「Prologue」(後書き)

ユウ「いよいよ始めましたか」

HAL「ここまで来るの、結構大変だったよ」

ユウ「コレを投稿するまで僕やISの設定をずっとイジッてましたね」

HAL「物語が進むにつれて色々合わない部分が出てくるかもしれないから、

そこの調整のためだよ」

ユウ「ところでこの続きって考えてあるんですか？」

HAL「勢いで投稿したからまだほとんど出来てない」

ユウ「ちゃんと続くのか不安になってきました(汗)」

HAL「多分大丈夫だって…多分」

ユウ「こんな新米作者ですが、どうか温かい目で見守ってください」

HAL「ひどい言われようだね」

ユウ「貴方は黙って続きを書いてください」

HAL「……はい」

ユウ「次回のタイトルは『月明の守護者』です。楽しみにしてくださいね」

HAL「ちよっ…それ俺のセリフ…」

神様「私の出番ってこの話だけなのですか？とても寂しいですよ」

HAL「何勝手に出てきてんの！？戻って戻って!!」

神様「厨二作者がグダグダ言わないでほしいですよ」

HAL「くっ…好き勝手言いやがって。まあいい、次回もおっ」

神様「次回も見ないと魂引っこ抜くですよ」

HAL「ノオオオオオオ!!!（涙）」

改行について不満があったり、誤字・脱字等がありましたら感想掲示板でお申し付けください。出来る限り訂正していきます。

8 / 29 改稿しました。

## Shift 0-2 「月明（げつめい）の守護者」（前書き）

家に一台しかパソコンが無い上、弟がネットゲ三昧でパソコンから離れない…。

見つけたぞ！世界の歪み（執筆が遅れる原因）を！！

……なんか色々すみませんでしたorz

改行とかこれでいいのかな？

できるだけ見やすいように努力はしてるけど…

見にくかったら感想板でお申し付けください。



## Shift 0-2 「月明（げつめい）の守護者」

落ちていく。落ちていく。果てしなく落ちていく。

どれくらい時間が経っただろうか。5分？ 30分？ それとも1時間？

もう時間の感覚が無い。本当に転生できるのだろうか？不安になってきた。

……ん？ 下に光が見えてきた。

それはだんだんと大きくなり、やがて辺り一面が真っ白になった。そして次の瞬間

「おぎゃああ！」

「ようやく生まれました！ 元気な男の子ですよ！」

僕は、転生した。新たに与えられた名は、『奈々瀬 ユウ』。

原作開始（一夏がIS学園に入学する日）から16年前の事である。

一応、生まれた時の家族構成を紹介しておく。

父親の名は『ユリウス・アンドレヴィチ・クレンコフ』。

出身はロシア。ロシア国内では比較的著名な研究者である。

元々は婚約者がいたそうだが、その話を蹴って今の母と結婚し、実家とは絶縁同然という経歴を持つ。

意外と行動力があるな。

母親の名は『奈々瀬 亜衣』。

出身は日本。実家は神社だが、兄弟がいたため家は継がなかった。

容姿端麗、武芸に広く通じ、家事もそつなくこなし、そして包容力がある。

父でなくとも男なら絶対惚れるであろう、したたかな女性だ。

そして長女である、僕の姉の名は『奈々瀬 ユイ』。

僕より5歳年上で、後に篠ノ之束に匹敵する天才科学者となる姉である。

ちなみに僕と姉の姓が日系なのは、父が、

「日本人の名前はカッコいいね！ 憧れてたんだ！」

とか言つて籍を入れる時に奈々瀬の姓で入れたためだ。

僕と姉の名前がカタカナなのは、母が、

「見た目が日本人ぽくないし、カタカナの方が面白そうね」

とか言つて、しかも父が妙に納得して従つてしまい決まってしまうためだ。

まあ……設定通りなんだけどさ。

これから僕は、自分が創った物語の通りに行動することになる。

おかしい行動さえとらなければ、途中までは自分が思い描いた通りに物語は進行する。

シルバリオ・ゴスベル

銀の福音戦までは何とかなるだろう。

その後は……自分でどうにかしよう。

僕は順調に成長し、学校に通い、友達を作り、そして

篠ノ之束が『IS』を開発。インフィニット・ストラトス 世界に向けてその存在を明らかにした。

その他にも、言葉では到底語りつくせないくらい沢山の出来事があった。

楽しい事も、悲しい事も。僕はその全てを乗り越えた。

そして時は流れ、原作開始の1ヶ月前まで進む。

僕は今、アメリカの某州にある、近年急成長してきたアメリカのIS機器開發生産会社、アナハイム・エレクトロニクスの秘密ラボにいる。

もちろん姉さんも一緒だ。

「遂に完成したんだね、姉さん」

「ええ……これが私のオリジナルにして最高傑作。その名は『ア月明ルテミス』の守護者」

二人の目の前にあるのは、一つのIS。

それもただのISではなく、奈々瀬 ユイが一から創り上げた、468個目のコアを持つISだ。

「本当にこれで世界は変わると思う？」

姉さんが後ろから僕に抱きつきながら訊いてきた。僕は自信を持って応える。

「変わるんじゃない。変えるんだよ、姉さん。僕が変えてみせる」

「世界を変えるだなんて、最初は馬鹿げた事だと思ってた。でも、今はちよつと見てみたいかな…変革した世界を」

「『夢は常に大きく、志は常に高く』。母さんの言葉だよ」

「……そうだね。ユウならきつと出来るよ。私はそう信じてる」

僕がこの世界を変えてみせる。この機体が、姉さんが手伝ってくれる。

「プロジェクトN・T・S、か」

姉さんはその言葉が持つ意味を噛み締めるようにつぶやいた。

「ところで姉さん。ここ最近ラボに籠りつきりだったでしょ？ 家に帰ってご飯にしない？ お腹空いたでしょ？」

姉さんは職人肌の人間だから、集中すると中々ここから出てこない。備え付けの食事は全然減ってなかったから、きつと何日も食事を摂らずに研究に没頭していたのだろう。

「ユウの手料理かぁ……最後に食べたの、いつだったかな？」

そう言つて姉さんは視線を遠くに向けた。たぶん1週間くらい前…かな？

「じゃあ、いこ……！？」

言い切ろうとした瞬間、ラボにアラートが鳴り響いた。

「何があつたんですか!？」

僕は通信用のボタンを押して尋ねる。確か警備員に繋がるはずだ。

「しつ、侵入者です! 数は1! デュノア社製ラファール・リヴ  
アイブ! 何だコイツ……つよ」

通信はそこで途切れた。やられたか。

「バレてたの? おかしいなあ……」

姉さんは不思議そうに首を捻っている。まさか……マークされてたのは姉さんか?

「このままだともうじきここまで来ちゃうね」

姉さんはモニターを見ながらのほほんと言った。

うちの姉の辞書に焦燥という単語は果たして載っているのだろうか?

「とにかく迎撃しないと……」

「機体は出来上がったばかりのそれしか無いよ」  
アルテミス

ここは秘密ラボだから、機密性を重視するためにISは配置していない。

ISを配置するということは、これは重要な物だと、そう言いふらしているようなものだからだ。

つまり、必然的に僕がアルテミスで迎撃せざるを得ない。でも……

「僕、これ動かすの初めてなんだけど」

「……ファイト」

試運転もせずにいきなり実戦って……一夏とほとんど変わらないじゃないか。

むしろ生死が懸かっている分性質たちが悪い。

たとえISを動かせると知っていても、やっぱりこういう状況だと緊張する。

「あ！　そうそう、フォーマット 初期化と最適化処理は実戦でやってね」

くっ、たぶん僕は今日死ぬだろう。この後何が起こるか知っていないければ。

時間が無い。僕はカード型にした、これから愛機となるであろう機体を持って研究室を出る。

笑顔で手を振る姉に見送られながら。

通路をゆつくりと進むラファールの操縦者、オータムは退屈していた。

ISの性能は既存の兵器を軽く凌駕する。通常兵器などISの敵ではない。

警備員などいくら集まっても戦力にはカウントされない。

「チツ……ちったあ骨のある奴はいないのかい？　楽勝過ぎてアクビが出るぜ」

この秘密ラボから開発中のISを奪って来いとスコールに命令されて来たが、警備用のISも付けずに研究・開発される物などタカが知れている。

ロクな機体じゃないなと勝手に値踏みしながら通路を進むと、実験場らしき広大な空間に出た。

「ようやくお出ましいかい。ちつとは楽しませてくれるんだろうなあ？」

実験場には先客がいた。白いボディが特徴的なISだ。おそらくアレが今回のターゲットだろう。

操縦者は銀の短髪にスカイブルーの瞳、男とも女ともとれる容姿で、その顔には様々な感情が入り乱れている。

「はじめまして。貴女が侵入者……ですよね？」

「分かりきったこと訊くなよお。さっさとやられてそいつを奪われな！！」

そう言ってオータムはアサルトライフルを構えた。

Shift 0・2 「月明（げつめい）の守護者」（後書き）

ユウ「散々遅いとか言ってたくせに、割と早く出来ましたね」

HAL「まあ、連載開始する前に少しだけストックを作っておいたからね」

ユウ「それは良いとして……」

HAL「スルーされた!？」

ユウ「どうして戦闘シーンが入ってないんですか？」

HAL「どうしてって……この方が読者が楽しみにするかなって」

ユウ「新米作者はそんなこと考えずにさっさと次の話を作ってください。」

……まさか戦闘シーンが書けないとか言いませんよね？」

HAL「……………（汗）」

ユウ「……はあ……」

HAL「そこ！あからさまに失望したようなため息つかない!!」

ユイ「ねえねえ、キャラクターとかISの設定っていつ出すの？」

HAL「そこ！勝手に出てくるな!!……はあ……」

設定はあと2話くらい投稿したら出します」



ユウ「は！？気合い入れて作ってたくせに、何言ってるんですか！？」

HAL「色々と大人の事情があるんだ。

読者様には悪いけどもう少し我慢して頂きたい」

ユウ「そんな戯言はプロになってから言ってください」

HAL「ぐあ！」

ユイ「ふうん。大人の事情？じゃあ別にいいや。

私はユウとイチヤイチヤできればOKだから」

ユウ「ねっ…姉さん！？ちよっ…抱きつかないで！！」

HAL「（よし、今がチャンス！）

次回のタイトルは『守護者の覚醒』です！どうぞお楽し」

ユイ「次も読んでくれたら嬉しいな」

HAL「…やられた（涙）」

8 / 29 改稿しました。

## Shift 0・3 「守護者の覚醒」(前書き)

知識再確認の為、原作を一から読み直しています。

…話を書くのが嫌になって逃げたとか、そんな理由では決してありません。

……… 本当ですよ？

それでは本編をお楽しみください。

## Shift 0-3 「守護者の覚醒」

ラファールのアサルトライフルが火を吹く。まずい、黙って立っていたらいいのだ。

「くっ……」

反射的に身を逸らし、同時にスラスターを作動させ、襲い来る銃弾をかわしていく。

だが、僕のIS操縦時間はまだ10分程度。加えて機体が最適化されていない。

故に、どうしても操作がぎこちなく、遅くなってしまふ。

かわしきれなかった銃弾が機体に当たり、シールドエネルギーが削られていく。

「何だ何だあ？ まるでド素人じゃねえか！ 動きがノロノロだぜえ？」

オータムはサディスティックな笑みを浮かべながらアサルトライフルを撃ち続ける。

「たかが侵入者一人に本気を出すのは情けないですから……ね！」

強がってはみたものの、彼女の言っている事はおおむね正しい。

僕は今までISを『実際に』操縦した事が無い。だから素人と言われても反論はできない。

だからと言って、僕は今まで何もしてこなかった訳ではない。

姉さんお手製のISシミュレータを何年もこなしてきた僕の仮想I

S 操縦時間は、おそらく国家代表クラスと比べても遜色ないだろう。……つまり、この機体の最適化が終了し、僕の思い通りに扱えるようになったら、戦況がひっくり返る可能性は十分にある。

「そらそら！ 無様なダンスでも踊ってな！ ヒヤハハハハ！」

オータムめ……遊んでいるな？ さっきと比べて狙いが甘くなっている。

僕は彼女にザコ認定された訳か。屈辱的だが、今は利用させてもらう。

銃弾を避けつつ、機体状況を確認。シールドエネルギー残量は8割初期化、及び最適化は3割終了。……もっと早くならないのかこれ。

「避けてばかりじゃアタシは倒せないぜえ？ ほらほら、早く反撃してきな！」

「油断大敵って言葉、知ってますか？」

「お前がそんなこと言える立場かあ？ アハハハハ！」

安い挑発に乗ってみすみす勝機を逃すような事はしたくない。ここは我慢だ。

だが、このまま避け続ければ彼女に何か狙っていると感づかれるかもしれない。

仕方ない、ここは彼女に乗ってやるか。

僕は反撃をするために武器を呼び出そうとした。しかし

「……………なっ！？」

武装欄を見て絶句した。武装のほとんどが使用不可になっていたからだ。

必死になって使用可能な武装を探し出したが、それはたった一つ。

「ビームサーベル……これだけ？」

両腕に装備されているビームサーベルだけだった。

この機体は複数の武装を同時に使用することが可能だが、これでは意味が無い。

「……無いよりはマシ……そういう事か」

そう言つて腕からビームサーベルを抜き、両手に持つて刃を出す。柄から形成されるビームの刃は細く、頼りない印象を受ける。

だがこれでも威力は実体剣なんかよりもずっと高い。

一撃……一撃でも当てられれば十分だ。

「おいおい……状況分かってんのかあ？ 近づけもしねえのによお！」

「そんな考えだから……貴女は弱いんですよ！」

オータムは油断しきっている。今なら銃弾を掻い潜り近づく事は難しくない。

今まで回避に徹していた体を反転させ、一気に距離を詰める。

「ハッ！ 近づかせるかよお！！」

オータムはアサルトライフルを連射し、弾幕を張る。

銃弾の相対速度が上がり、機体へのダメージも跳ね上がる。

……ダメージは気にするな。相手への一撃に集中するんだ。

僕は心の中で自分にそう言い聞かせ、オータムの懷に飛び込む。

「……ッ!? このッ!」

被弾を恐れず突っ込んでくる僕の姿を見て、彼女は一瞬怯んだ。今だ!

「はああああッ!」

速度を十分に乘せた右の突きを繰り出す。

だが、オータムは直感か、それとも経験か、突きを寸での所で左に動いてかわす。

「このガキ!」

そのまま武器を近接ブレードに持ち替えて反撃しようとする。だが

「甘い!」

僕は体を回転させ、その勢いそのままに左手のビームサーベルを薙ぐ。

「チイツ!」

ビームサーベルと近接ブレードがぶつかり合い、音と閃光を伴って一瞬拮抗した。

だが、サーベルの方が切れ味は上だ。

近接ブレードはビームサーベルによって真っ二つに切り裂かれた。

「このクソがあー!!」

「女性がそんな汚い言葉を使うものじゃないでしょう!」

すぐに追撃を掛けようとするが、オータムは苦々しい顔つきで僕から距離を取る。

ダメージは与えられなかった。ついでに油断も無くなった。失敗したか……。

「もう二度と近づけさせねえ! ブチ殺す!!」

オータムは再びアサルトライフルを呼び出し、乱射してきた。

「……くっ!」

狙いが付いてない分予測できない。その上密度も上がっている。

シールドエネルギーは3割を切り、装甲もボロボロだ。

このままじゃ本当に殺され……何ッ!?

「……しまった!?!」

気付いたら僕は何時の間にか実験場の隅の方に誘導されていた。

まずい、逃げ場が無い。

「まさか……あの怒りは演技だったんですか?」

「アッハハハハ! アタシが本気を出せばざっとこんなモンよ。よくここまで耐えたねえ? でも、これで終いだあ!!」

オータムは武器をアサルトライフルからグレネードランチャーに切

り替え、僕に向けて躊躇なく撃つ。  
この間1秒。回避は……無理だな。

「姉さん……ごめ」

言い切る前に僕の声は爆音で掻き消え、僕の体は爆発の光に包まれた。

「ヒヤハハハハ！ これで終わり……何イ！？」

勝利を確信していたオータムだったが、爆発の煙が収まり、僕を視界に捉えるとその表情は一変する。

……無理も無い。

今彼女の瞳には、初期化と最適化を終え真の姿となったアルテミスが映っているのだから。



Shift 0-3 「守護者の覚醒」(後書き)

ユウ「この話、タイトル詐欺になりませんか？  
それになんだか話が短い気が…」

HAL「なんか切りが良い所で切ったらこんな感じになった。  
次は長めだから大丈夫だろう。…多分」

ユウ「…チートとは程遠い苦戦ぶりですねえ？」

HAL「最初からチートじゃ面白くないだろ？」

ユウ「確かにそうですが…ところで設定の方はどうですか？」

HAL「大方出来上がっているよ？次投稿したら載せるよ」

ユウ「そうですか…」

HAL「次回のタイトルは『IS D』です。  
次でプロログ編は終了し、原作一巻の話に入ります。  
次回もお楽しみに！…よしッ、勝った！！」

ユウ「ところで原作一巻からの話って出来てるんですか？」

HAL「……………(汗)」

ユウ「…貴方のような大人はッ……………修正しますッ！！」

HAL「…ッ！？待て！俺に何を…グハァッ！？」

8 / 29 改稿しました。

Shift 0-4 「IS D（イグニッションナルストライク・ドライブ）」

ジージエネに買い溜めてあったラノベ10冊ほど…そろそろ消費したいところ。

執筆進むかな…（汗）

設定は最終確認をしてから出すので、明日か明後日くらいになると思います。

……一巻の話に入ってからどうにも執筆が進まない。

大筋は一応組んであるけど、上手く文章化するのが難しい。

…いかん、ナーバスになってしまった。それでは本編をお楽しみ下さい。

「ふう……間に合って良かった」

視界の中央に表示されている、初期化と最適化が終了した旨のウィンドウを閉じながら、僕はほっと胸を撫で下ろした。

今の攻撃は、ファースト・シフト一次移行によって追加された両肩のバインダーで防いだ。

あとほんの数瞬遅ければ僕はボロボロになって倒れていただろう。正直こういう心臓に悪いイベントはあまり体験したくない。

機体は先程までとは違い、アンロック両肩に非固定式のバインダーが追加され、実体ダメージがリフレッシュされた装甲は曲線が映える天使のような形をしている。

今まで感じていた違和感は全く感じられない。

それどころか、僕が願えばその全てを叶えてくれる。そんな全能感すら感じられる。

……行ける。理屈など関係無い。直感がそう告げている。

「一次移行だとお！？ まさかてめえ、今まで初期設定の機体で戦ってたってのか！？」

オータムはそう言いながら、苦虫を噛み潰したかのような顔をする。その顔は一次移行前に倒せなかった僕に対してか、それとも一次移行させてしまった自分に対してか、それともその両方に対してか。僕にとってそんな事は些細な事でしかない。これで僕は自分の戦いができる。

「だが……今更一次移行してもおせえんだよお！」

お前のシールドエネルギーはもうほとんど残っていない。対して自分分はほぼ無傷。

どっちみちお前の負けは揺るがない。言外にそう言っているのだろう。

確かにシールドエネルギーはあと一割しか無く、たとえアサルトライフルでも、攻撃を受け続ければすぐにでも装甲を光の粒子へと還すだろう。そうならないためには

「貴女の攻撃を食らわなければ良いだけの話です」

「そうかい、じゃあ……避けれるもんなら避けてみなあ！」

そう言っただけでアサルトライフルを構える。あと一秒もしないうちに撃ってくるだろう。

だけど不思議と焦りは感じない。何故か解ってしまうのだ。

彼女が何処に狙いを付けているのか、彼女が動揺している事が、彼女が頭の隅で、ほんの少しだけ油断している事が、解るのだ。

なぜ解るのか、その理由の検討もついている。

機体全体に張り巡らされ、一次移行によって機能を開始した『サイコフレーム』。

これが僕のニュータイプとしての力を増幅しているのだ。

あとコンマ5秒もすればアサルトライフルから銃弾が飛び出すだろう。

被弾はもう許されない。そして隅に追いやられたこの状況を打破しなければならない。

取れる行動は限られてくる。

「はああああッ！！」

「……………にいい！？」

オータムが引き金を引く瞬間、僕は彼女に向かって突進した。被弾してはいけない場面での、特攻とも取れる突進。明らかに矛盾している。

「ッ！？ ナメんじゃねえええ！！！」

この矛盾に明らかに動揺したオータムだが、それでもアサルトライフルの引き金を引くのをやめない。

銃弾が僕に向かって飛び出す。だが、動揺した状況でともに狙いを付けるのは難しいはず。

予想通り、直撃コースはほとんど無く、たとえ直撃コースでもバインダーで全て防げた。

「食らえッ！」

「グボアッ！？！」

僕はバインダーを前に構えたままタックルした。

オータムは回避行動もせずアサルトライフルを撃ち続け、衝突。そのまま20メートル程吹っ飛ばされ、受身も取れずに地面に転がった。

僕はバインダーが緩衝材になったので、衝撃はほぼゼロだ。

もし動揺していなければ、このタックルは冷静にかわされ終わっていただろう。

動揺の瞬間は油断と同様、最も攻めに適した瞬間だ。そう母さんが言ってたっけ。

ISにはブラックアウト防止機能が付いているので、オータムは気絶しなかった。

すぐに体勢を整え、深呼吸。……動揺が消えた。もちろん油断も。右手に近接ブレードが現れる。チツ、予備があつたのか。

「……ダセエ。たかがガキ一人にこのザマ……か。柄にも無く熱くなっちまったぜ。……おい！ もう遊びは終わりだ！ ……死ね！」

オータムがそう告げた瞬間、刺突の構えを取り、僕に向かって瞬間<sup>イグニッションブースト</sup>加速を発動させた。

……速い！？ もう目前じゃないか！！

「オラア！！」

「ッ！」

突っ込んでくるオータムを紙一重でかわす。今のは危なかった。どうする？ 射撃武器は追加されていないので使えない。

瞬間加速は使えない事は無いが、このタイミングで使うのは色々怖い。

彼女にダメージを与えるにはどうしても速さが足りない。

「こんな時に考え事かあ？ 隙だらけだぜえ？ そらっ！ お返しだあッ！！」

「ぐあッ！？」

蹴りを入れた！？ シールドエネルギーは……まだ大丈夫だ。さっきのオータムのように地面に転がる事は無かったが、10メー

トル程飛ばされた。

くっ、あの速さは想定外だった。……だが、負けない。負けるわけにはいかない。

彼女の速さに対抗するためには、あと一手必要だ。

その一手は今、アルテミスの中に眠っている。ならば引き出すまで。

……僕を護る気があるのなら、『守護者』の名が伊達ではないのなら、力を貸せ！

そう強く願った瞬間、「かちり」と、扉の鍵が開くような音が聞こえた。

『感情レベル…C

…機体ダメージレベル…高

…サイコフレーム共振率…27%

…状況による数値補正を考慮…再計算終了

…規定条件のクリアを確認

…IS-Dを起動します』

いくつものウィンドウが出ては消え、出ては消えを繰り返し、最後に現れたウィンドウには『IS-D』という文字。

それが現れた瞬間、機体全体の装甲がスライドし、サイコフレームが露出。

サイコフレームは淡い赤色に輝き、自らの存在を主張している。

「デメエ、まだ奥の手を隠してやがったのか!？」

直感で身の危険を感じ取ったのか、オータムは再び瞬間加速で僕に肉薄する。

早々に決着を付けるつもりか？　だがそれは悪手だ。



「……遅い！」

「何ッ！？」

オータムが僕に向かってブレードを突こうとした瞬間、目の前から僕の姿が消えた。

否、突こうとした瞬間、僕は高速で彼女の後ろに回り込んでいた。

「はあッ！！」

「グアッ！？」

隙だらけになったオータムの背中目掛けて、僕はビームサーベルを一閃。

ラファールのスラスターを破壊する。

「……ヤロオ！」

スラスターを破壊されたオータムは近接戦闘の不利を悟ったのか、武器をアサルトライフルに持ち替え、距離を取りつつ弾幕を張る。

「見える！」

「コイツ……速い！？」

彼女の弾幕は、しかしながら僕を捉えるには至らなかった。

単純に速いのだ、機体速度が。

サイコフレームの残光が幾重にも折り曲がりつつ、一筋の赤光となる程に。

「退いてください！　ここから、今すぐに！！」

弾幕を掻い潜り、ビームサーベルを薙ぐ。  
一瞬遅れてアサルトライフルが両断され、オータムが破棄した瞬間、爆発した。

「チクショウ！　この化け物がア！！」

完全に戦意を失ったオータムは、悪態をつきつつもスモークグレネードを使いその場から逃走した。

『戦闘の終了を確認。IS　Dの起動を終了します』

IS　Dの起動が終了し、装甲が元に戻っていく。  
これにて僕の初陣は終了した訳だが

「はあ、はあ、……ぐっ！？」

体全体が急に痛み出した。特に頭が痛い。

おそらく脳が今までには無い情報を受信してしまい、異常な負荷が掛かっていたためだろう。

追々慣れていくしかないな、これは。機体が粒子に還り、僕は地面に倒れた。

「ユウ、お疲れ様」

痛みで薄れゆく意識の中、最後に見た物は駆け寄って来る姉さんの姿。

その笑顔はきつと僕を労ねぎっているものであって、決していいデータが

取れたからそんなイイ顔している訳ではないのだろう。  
……そう信じたい。

## Shift 0-4 「IS D（イグニッションナルストライク・ドライブ）」

ユウ「IS Dって、まんまアレじゃないですか！

どうせ裏の意味だってモガモガ……」

HAL「ハイハイ、ネタバレは厳禁ですよ」

ユウ「くっ…ところで、この話でプロローグ編は終了でしたね」

HAL「そうだよ。次から原作の主人公勢が出てくるよ」

ユウ「そうですか…とうとう『彼女』に会えるんですね」

HAL「ああ、『彼女』はしばらく出ないよ？」

ユウ「え？」

HAL「だって原作でも結構遅かったじゃないか。

この連載だとまだ出てこないよ」

ユウ「うああああん！！！！（涙）」

HAL「行っちゃったよ…まあいいか。

今回のタイトルは『入学と自己紹介』です！次回もお楽しみに！

…おっと、忘れてた。ご意見ご感想お待ちしております」

## 連載の一時中止について

先日発生した大地震による原発の問題で、

福島在住の作者は最悪の場合、自宅を離れ避難する事になります。

そうなった場合、パソコンからの更新はできなくなりますので、連載できなくなる可能性があります。というが無理です。

また、ライフラインに関しても不安定であり、電気が使えなくなってもアウトですので、いつそのこと連載を一時中断します。

読者の皆様には申し訳ありませんが、ご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

連載の再開については、4月の上旬を予定していますが、大幅に遅れる可能性がありますので、あくまで目安と考えて頂きたい思います。

それでは4月にまたお会いしましょう。

## 連載再開のお知らせ&amp;オリジナル主人公及び主人公機の設定（前書き）

長らくお待たせいたしました。本日より連載を再開いたします。  
ただし、不定期である事に変わりは無いので、どうか過度な期待を  
なさらぬよう。

設定の紹介が続くので、本編開始はもう少し後になります。  
本編をお待ちの方は申し訳ありませんがもうしばらくお待ちください。  
い。

## 連載再開のお知らせ&amp;オリジナル主人公及び主人公機の設定

### 主人公設定

名前 奈々瀬 ユウ（ななせ ゆう）

性別 男

身長 164cm

体重 59kg

容姿 髪は銀のショートカット。瞳の色はスカイブルー。体の線は細く、女性に見えなくもない。

一番理想に近いと思われるモデルはガンダムWのカトル・ラバーバ・ウィナー。

趣味 料理（先生は近所に住んでいる、有名ホテルの元料理長）と読書（主に小説）。

特技 変装（本人は否定。女装は図捜査で標的が100%引っ掛かるレベル）と

料理（これも本人は否定。店を出せば絶対に儲かるレベルらしい）。

好きな物 たいやき（とある店舗限定）、笑顔。

嫌いな物 女子供の涙、絶望。

苦手な物 姉、想定外な事、海（泳げないという訳ではない）。

性格 冷静沈着な策士タイプ。ただし他人を犠牲にするような冷酷さは無い。

意志は強く、己の信念を貫くような熱い部分も持っている。ただし、温和な表情と物腰のためよく天然系キャラと勘違いされる。

基本的に言葉遣いは、姉と小さな子供にはフランクに、それ以外の人には丁寧な言葉遣いをする。  
ただし、感情が昂っている時は丁寧ではなくなる。

その他の情報（今後役に立つかもしれないもの）

- ・両親が他界してからはアメリカの叔父の所に身を寄せている。身を寄せる際、叔父が経営する電気機器開発会社、アナハイム・エレクトロニクスが経営危機に陥っている話を聞き、会社をIS機器開発に参入させることで救った。  
以後は社長よりも頼りになる社員として待遇されている。

- ・ISが扱えるようになってからアメリカ軍にスカウトされ、対IS特務機関の補佐官に任命された。階級は大尉。

- ・アナハイムの経済事情が劇的に良くなったため、懐はこれでもかと潤っている。俗に言うセレブである。

自宅はロスの一等地で、IS学園から車で30分の海辺沿いに別荘を持っている。

- ・日本語、英語に加え、ロシア語、フランス語が話せる。

- ・護身術としてCQC（近接格闘術）や、サバット（屋外での使用を想定した実戦派格闘技）を用いる。



また、護身用として防弾仕様の鉄扇を所持しており、鉄扇での戦闘術も一応習得しており、鉄扇で斬鉄できる。

・ニュータイプの適性を持つ。ただし能力はあまり高くなく、アルテミスのフルサイコフレームの補助が無ければ的確な察知はできない。

#### 8 割方転生前の主人公の創作ノートより抜粋。

追加情報（今後ストーリーが進んだ場合に明らかになるもの）

・父親の仕事の都合で、ロシア、フランス、日本と、引っ越しと転校を繰り返していた。

・アメリカに引っ越してから一夏と文通をしていた。  
しかし、情報操作をしていたため、一夏はユウの現状をよく知らない。

転生前の主人公について

ごく普通の家庭に生まれ、ごく普通の学校に進学し、  
ごく普通の会社に就職した、ごく普通の社会人（享年25歳）。

高校を卒業する前に好意を寄せていた女の子に告白し、振られた。  
ちなみに一夏のような鈍感ではない。モテ体質でもない。

純愛が理想の恋愛だと思い込んでいるおめでたい人間。

小説（特にライトノベル）を愛読し、溢れ出る創作意欲もっそうをノートに書き溜め、  
創作ノートくろれきしを作り上げた。

ISの小説が最も好きだった理由は、『シャルロットに恋をした』

ため……らしい。

## 主人公機設定

名称 アルテミス げつめい つかいつか  
(月明の守護者)

操縦者 奈々瀬 ユウ

## 機体説明

アナハイム（正しくは奈々瀬 ユイ）がProject N・T・Sの過程で開発した第四世代試作型IS。

奈々瀬 ユイが新たに創り出した468個目のコアを内蔵している。

これまでのISとは異なるエネルギー供給システム（高圧縮式マルチシフトリアクター）を採用しており、駆動時間は第三世代型のおよそ4倍、

エネルギー系武装の威力はおよそ1.5倍と大容量、高威力化を果たしている。

加えて背部に追加のプロペラント・タンクが装備されており、稼働時間がさらに増している。

ただし、装甲とシールドエネルギーについては他の第三世代とあまり変わらない。

機体フレームは全てサイコフレームとなっており、ユウのニュータイプ能力の強化に一役買っている。

サイコフレームが操縦をアシストするため、ISスーツを着なくとも操縦に影響が無い。

ただし、最低限操縦者の命が守られなければならないため、ユウはIS学園の制服を改造し、ISスーツに近い性質を持たせている。

機体のシルエットは曲線が映える天使のような形。カラーリングは白。

全身装甲とはいかないまでも、装甲の割合は他の機体よりも多く、加えて機体の周囲に非固定式の4つのバインダーを装備し、外観はいかにも重装甲型らしい形をしている。

しかし、機体の周囲にある非固定式の4つのバインダーはシールドの他、

スラスターとしても機能し、見た目とは裏腹に高い機動性を持つ。

機体イメージはガンダムUCのクシャトリヤにユニコーンの機能を持たせ、

装甲をスマートにした上で白色に塗装した感じ。

スペックデータは偽装され、第三世代相当に落とされている。

## 武装

ファンネル×12

操縦者の脳波に連動して起動、攻撃する漏斗型小型自律兵装。

BT兵器のようにビームを偏向させる事は出来ない。

バインダーに各3つずつ搭載されている。

バースト・ファンネル×4

ビーム砲を9門装備している大型のファンネル。

バインダーに各1つずつ搭載されている。

ビーム・ガトリングガン×2

4砲身型の小型ガトリングガン。

エネルギー充填式であり、一回の充填で500発撃てる。

弾丸を搭載する必要が無いので小型かつ軽量。

片手で所持することができ、取り回しもビーム・マグナム並。  
両手に持つて使用することが多い。

1発の威力はあまり高くなく、専ら牽制・弾幕用として使われる。

#### ビーム・マグナム

エネルギーパック消費型のビームライフル。

一発につき雪羅の荷電粒子砲並の威力があり、掠めただけでもダメージを負う。

エネルギーパックは1パックにつき5発分、予備の物を合わせても15発分しか無く、

一回の戦闘で15発しか撃つ事ができないが、  
機体のエネルギーを消費せずに強力な攻撃を行える事が強みである。

#### ビームサーベル×4

ビーム刃を形成して敵機を攻撃する近接武器。

実体系の近接武器より高威力かつ取り回しが良い。

2本は両腕部に、残りの2本は後ろ二つのバインダーに各1本ずつ収められている。

腕部の物はビーム・トンファーとして用いることも可能。

#### 高出力ビームソード×2

ビーム刃がより高出力かつ長大になったビームサーベル。

近接武器の中では長い部類に入るが、取り回しはビームサーベルとほとんど変わらない。

前二つのバインダーに各1本ずつ収められている。

#### ビームバリア発生装置×4

バインダーの表側に搭載されている防御兵装。

稼働させれば実弾、光学問わず大抵の攻撃の威力を無効化、もしくは減衰できる。

4つの発生装置の内一つだけ稼働させるなどの部分展開が可能。全て同時に稼働させた場合はエネルギー消費が激しい。

ワンオフアビリティー

IS D（イグニッションナルストライク ドライブ）

『機体と操縦者の潜在能力を引き出し、戦闘能力の即時強化を行う』ためのシステム。

発動時に機体全体の装甲がスライドし、サイコフレームが露出。同時に機体性能、特に機動性が大幅にアップする。

また、ユウのニュータイプ能力も強化され、より素早い察知が可能となる。

ただし、相手のBT兵器等の操作はできない。

通常稼働時はサイコフレームが赤色に、最大稼働時は月光色に輝く。

圧倒的な性能ゆえに使用状況が限定されるという性質を持つ。

この機体説明は二次移行以後の状態を示しているものであり、セカンドシフト  
Shift 1-1から適用される設定である。

## 連載再開のお知らせ&amp;オリジナル主人公及び主人公機の設定（後書き）

HAL「とりあえずお待たせしました。それと本編じゃなくてごめんなさい」

ユウ「今まで投稿出来ていなかった僕の設定ですね」

HAL「うん。次はその他のオリジナルキャラ&amp;IISの設定ね」

ユウ「本編をさっさと書けとは言いませんが、この設定……」

HAL「何か？」

ユウ「何故僕の転生前の情報が載っているんですか？」

HAL「いやあ……需要あるかと思ってついでにちよちよと」

ユウ「なんですかこの設定は！？ 酷すぎますよコレは！  
まるで僕が根暗な人間みたいじゃないですか！」

HAL「え？ 違っの？」

ユウ「違いますー!!」

HAL「そうそう、本編が進んだ時の追加情報はこっちに入れるから、

話が進んでからもこっちを定期的にチェックしてくれよな」

ユウ「スルーですか！？ スルーしましたよね！？」

HAL「細かい事気にするな。器の小さい男だと思われるぞ」

ユウ「む……仕方がない。でも後で必ず後ろから刺します」

HAL「おおこわい。それじゃあきをつけよう（棒読み）。

それでは読者の皆さま、今後とも応援よろしくお願いします

」！

ユウ「僕としては先行きが不安です。作者がこんなんで……」

HAL「うっさい」

## オリジナルキャラ及びオリジナルIS設定（前書き）

ISってゲーム化しませんかね？

劇中では普通にゲーム有りましたし……。

漫画化・アニメ化と来れば後はゲーム化しか残っていないと思うんですが……。

ゲームシステムはガンダムvsガンダムみたいな感じで。

媒体はPS3あたりだと画面が綺麗で良いんですけど。

あとエディット機能を付けてくれればいくら高くても買います。絶対に買います。絶



## オリジナルキャラ及びオリジナルIS設定

オリジナルキャラクター設定

SHIFT 0-2 以降登場

名前 奈々瀬 ユイ (ななせ ゆい)

性別 女

身長 不明 (ボールペンで荒々しく塗り潰されており、解読不可)

体重 不明 (身長と同様)

スリーサイズ 不明 (『ユウ以外には見せてあげない』と書かれている)

容姿 おおよそユウと変わらないが、髪はロングで胸が大きい。

美女と呼べるレベル。

好きな物 ユウの手料理 (『むしろ自分が料理されたい』と後ろに書かれている)

嫌いな物 ユウを傷つける人

(こちらは『ユウをキズモノにするのは私の役目』と書かれている)

性格 一言で言うならブラコン。何かにつけてユウにくつつきたがる。

ユウの頼みなら基本何でも聞く。

篠ノ之束と同等、もしくはそれ以上の天才<sup>へんじん</sup>。

しかし、束と違い他人に対して排他的ではない。

#### その他の情報

・ユウの5歳年上。家事はほとんどできず、ユウに任せっきり。

・ISの基礎となるものを創り出した。その時、弟子の中に篠ノ之束がいたため、

束からは『師匠』と呼ばれている。

・ユウの頼みでアナハイムの技術主任を務め、経営の持ち直しに役買った。

・束以外にISコアを作ることができる人物である。

名前 ユリウス・アンドレヴィチ・クレンコフ

詳しくはShift 0-2 に記載。

#### 追加情報

・奈々瀬ユウが10歳の時に事故死。

名前 奈々瀬 亜衣（ななせ あい）

詳しくはShift 0-2 に記載。

#### 追加情報

・奈々瀬ユウが10歳の時に夫と共に事故死。

Shift 1 - 2 以降登場

名前 河井 和花 （かわいい わか）

性別 女

容姿 髪は濃<sup>こい</sup>藍<sup>あい</sup>色のショートカット。瞳の色はダークブルー。  
メガネを掛けており、容姿は山田真耶とよく似ている。

性格 年相応の思考をし、年相応の夢を抱く、ごく普通の少女。  
人が見ていない所で人一倍努力するがんばり屋さん。  
弱気で気が小さい一面を持っているが、暴走すると手が付けられなくなる。

その他の情報

・ Shift 1 - 2 の時点では名前を出す予定しかなかった。  
しかし、名前が特徴的かつキャラ自体も動かしやすいので、  
モブキャラからサブキャラに見事昇格したシンデレラ・ガール。

・ クラスメイトからは『マヤマヤ2世』のあだ名で呼ばれる。  
しかし、言うまでも無く山田真耶との血縁的関係性は皆無である。

・ マンガやアニメを密かに楽しむ隠れ二次専。  
BLもGLもいけるオールマイティな人。

オリジナルIS設定

名称 ワルキューレ くろがねいくさおとめ（鉄の戦乙女）

#### 機体説明

アナハイムが開発した第二世代型IS。

特徴は豊富な拡張領域と、新開発フレーム、バスロット

『エクステンションナル・ディバイドフレーム』による高い追従性。さらに、用途に応じて多種多様なカスタムができるので、

熟練者が乗れば最新型と互角にやり合うほどの潜在能力を持つ。

機動性では『ラファール・リヴァイブ』にやや劣るが、

武装の性能は第二世代の機体の中では最も高い。

悪条件下での機体の安定性や信頼性も高く、

それが評価されアメリカ軍で制式採用されている。

機体のデフォルトカラーは灰色。

#### 基本装備

ビームサーベル×2

性能は基本的にアルテミスの物と同じ。

左腕部に一本、シールドに一本収納されている。

ビームライフル

言わずと知れた、ビームを撃ち出すライフル。小型ゆえ、片手で持てる。

威力はブルー・ティアーズのスターライトMk.？くらい。

ビーム・マグナムと違い弾数制限は無いが、

機体のエネルギーを消費するので使えばその分稼働時間が短くなる。

バズーカ

拡散弾頭を積んだ大きめのバズーカ。装弾数は4発。

弾頭の特性上距離が開けば開くほど威力が低下するが当てやす

くなる。

## シールド

物理シールド。裏側にビームサーベルを一本収納している。表面に対ビームコーティングが施されており、光学兵器に対しても一定の防御力を持つ。

## その他IS関連設定

アナハイム・エレクトロニクス社（通称アナハイム）

近年急成長してきたアメリカのIS機器開発生産会社。

世界で初めてビーム兵器の小型化に成功し、その他豊富な携行火器を開発、

生産している。国外からの需要は高い。

第二世代型IS「ワルキューレ」がアメリカ軍で制式採用されている話から、

アメリカ国内では政府に融通が利く程影響力がある。

## オリジナルキャラ及びオリジナルIS設定（後書き）

ユウ「……酷いですね」

HAL「いやー、普通にインタビューしたら適当にはぐらかされちゃったよ。

参った参った」

ユウ「参った参ったじゃありませんよ！コレで読者の皆さんが納得すると

思ってるんですか！？」

HAL「じゃあお前がインタビューすればいいじゃん」

ユウ「うつ……。でっ、でもこういうのは作者である貴方の仕事でしよう？」

HAL「インタビューだけならお前だけでも問題ないだろ」

ユウ「……………そういえばフルキューレの設定、作ったのは良いんですけど、

これから使う予定って有るんですか？」

HAL「コイツ……露骨に話題逸らしゃがって……。まあいい。

一応頭の中ではIS7巻のように出す事を考えている。

……何時になるかは未定だけだな」

ユウ「一応先読みしましたけど、5話使って戦闘シーンがもがもが」

HAL「バカヤロウ！！ てめ、ネタバレすんじゃない！！」

ユイ「次回から本編に入りまーす タイトルは『入学と自己紹介』だよー。」

お楽しみにー」

HAL&amp;ユウ「あ。言われた……orz」

## Shift 1-1 「入学と自己紹介」(前書き)

ストーリーは基本主人公視点、もしくは三人称視点で進行します。  
人物の心情は○、もしくはインタールードで入れていきます。

進行速度が異常に遅い感じがしないでもありませんが、  
これは作者の力量のせいです。気にしないでください。



## Shift 1-1 「入学と自己紹介」

Interlude 奈々瀬ユウ

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rは<sup>ショートホームルーム</sup>じめますよー」

この声は、今教壇に立っている山田先生の物だ。

転生前は二次元でしか見た事が無かった（当然だが）が、三次元で見るとその破壊力たるや凄まじいものがある。特に胸。

なるほど……一夏が称賛するだけの事はある。あの体つきであの胸は反則だ。

しかし……思っていた以上に<sup>こゝろ</sup>IS学園は居心地が悪い。

秘密ラボ襲撃事件（秘密なので当然ニュースにはならない）の後、ニュースに『唯一ISを使える男』こと織斑一夏の名が頻繁に出るようになった。

そのニュースを見て僕は、アメリカ政府に対しアルテミスの稼働データを提出。

そして政府はこれを受諾し、僕は『ISを使える二人目の男』になった。

……秘密裏に、なんだけどね。

ISを使える二人目の男になったことで、当然の事ながらIS学園への入学が強制的に決まった。

姉さんは僕のIS学園への入学が決定すると、

「IS学園の教師になろうかなあ。そうすればいつでもユウとイチヤイチヤできるし」

「お願いだからやめてよ姉さん。欲望がダダ漏れだよ？」

姉さんの世界の中心はどうやら僕らしい。

少しでもいいから自分が世界に及ぼす影響を考えてほしい。

駄々をこねる姉さんをアナハイムの社員たちに預け、僕は単身、I  
S 学園に向かった。

これが原作開始前の、一ヶ月の間にあつた事だ。

そして冒頭に戻る訳だが……

女、女、女、女、どこを見ても女。いや、一人だけ男がいる。  
織斑一夏のことなのだ。

ちなみに僕の席は一夏の三つ左で、篠ノ之箒の一つ左。

一番窓側の一番前。一夏よりはだいぶマシな位置だな。

右斜め前には教壇に山田先生の姿。そして後ろは全員女。

後ろから突き刺さるような視線を感じる。感情の大半はおそらく『  
好奇』だろう。

原作では一夏が全て受け止めていたのだから、そのプレッシャーた  
るや凄まじいものだったのだろうな。

当の一夏本人は原作同様そわそわしている。

……あ、こっちに視線を向けた。正確には僕の一つ右の箒に視線を  
向けた。

その視線は『助けてくれ』という意味だろう。  
やはりというか、箒は顔を逸らした。

一夏は今度は本当に僕に視線を向けてきた。  
自己紹介くらい自分でできないと将来苦勞するぞ？  
僕はわざと目を逸らし、顔を窓の外に向けた。

「織斑一夏くん。……織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

一夏は裏返った声で返事をし、教室内からくすくすと笑い声が出てくる。

泣き顔の山田先生に頼まれた一夏は席から立ち上がり、後ろを向いてクラスメートたちを一瞥、自己紹介を始める。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願いします」

一夏、それでは情報量が少なすぎるぞ。

自己紹介は相手に自分を知ってもらう初歩的な手段だ。

ここである程度情報を提示しておかないと、相手が自分に対してどのように接すればいいかわからず、結果、適切な友好関係が築けないといった弊害を招く。

ほら、他の女子たちは『もって何か喋ってよ』という視線を一夏に送っている。

その視線に対し、一夏は息を吸って……

「以上です」

がたたつ。案の定、ずっとこける女子が複数名。  
そして何時の間にか教室に入ってきていた千冬さんが、不甲斐ない弟に対して出席簿アタックをかました。

その冷徹さたるや、うちの姉とは大違いだ。  
振り向いた一夏は一言、

「げえっ、関羽!？」

パンツッ！ うわっ……痛そう。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

そりゃ怒るよ、そもそも性別が違うじゃないか。

この場合は『弓腰姫』こと孫尚香が正しい。おそらくは。

げえっ、孫尚香!？ ……ダメだ、合わない。

そんなくだらない事を考えていると、女子から黄色い歓声が上がったり、一夏に対して羨望の声が上がったりした。

女帝織斑のネームバリューは凄まじいな。改めてそう思う。

そう僕が思った瞬間、千冬さんが僕の方をギロリと睨み、

「奈々瀬、今失礼な事を考えなかったか？」

ッ!？ 思考を読まれた!？ だがまだだ、まだ終わらんよ！

「いえ、織斑先生の人望は素晴らしいと考えていました。自分も先生のようになるために精進します」

「……ふん。まあいい」

ふう、危なかった……今のは読心術か？ ニュータイプも真っ青だぞ。

ちなみに僕はニュータイプで、真っ青になったんだが、どうでもい

い事か。

しかしどうやら出席簿アタックは回避できたらしい。

幸か不幸か、まだSHR終了のチャイムは鳴らず、自己紹介は続き

……

「次は…… 奈々瀬ユウ君」

「はい」

僕の名前が呼ばれた。僕は席を立ち、後ろを向く。

「初めまして。奈々瀬ユウです。僕はロシア人と日本人のハーフで、生まれは日本、育ちはロシア、フランス、日本、今はアメリカ。趣味は料理と読書です。」

皆さんと早く打ち解けたいと思っているので、気軽に声を掛けてください。よろしくお願いします」

『……………』

必要最低限の事を述べ、かつ声を掛けやすい印象を持たせる。僕としては上出来だ。でもなぜ皆黙っているんだろうか。

『……………か』

か？ カッコいいとかかな？

『かわいい〜〜〜！！！』

…………… なんです。

「男子！ もう一人の男子！！」

「しかもハーフだって。銀髪綺麗」

ええそうです。ハーフです。珍しいでしょ？

「弟にしたい！ 頭を撫で撫でしたい」

まあ、実際弟だし。姉さんいるし。いつも撫で撫でされてるし。

「これが今時の草食系男子ね！ むしろ天然系？ 癒されるう」

天然系って……他の人にはそんな風に見られているのか？ むう……

「キタ！ ーxユウ！！ これでご飯三杯はイけるッ！……」

おい、誰だ今言った奴は。ちょっと表で『オハナシ』しようじゃないか。

薔薇より百合の方が素晴らしいって事を説いてやんよ。……やっぱ  
り今の無しで。

……どうやら僕は少し錯乱しているようだ。

だって反応が予想外過ぎるだろこれ。というか女子の目が姉さんと  
同じようになってきてるし。

え？ 何これ、気を抜いたら喰われるとか、どんなバイオハザード  
だよ。

これからの学園生活について一抹の不安を感じつつ、僕はSHR終  
了のチャイムが鳴るのを聞いていた。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。」

その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。

いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

締めはやはり織斑先生のありがたいお言葉。

やっぱりここは普通の高校じゃないな。当然だけど。

## Interlude out

## Shift 1-1 「入学と自己紹介」(後書き)

ユウ「一つだけ訊きたい事があります」

HAL「何？」

ユウ「何故僕は女子にあんな目で見られるんでしょうか」

HAL「えーと……あれだ、知ったら軽く絶望するよ？」

ユウ「は！？ 一体何を……」

ユイ「ねえ、私の出番ってあれだけ？ 勿論この後も出られるよね？」

HAL「うん？ ユイの出番はこの先全くと言って良いほど無いけど？」

ユイ「作者のバカアアア！！！」

ユウ「ああ、泣いて何処かに行っちゃいましたよ。

ちよつと酷いんじゃないですか？」

HAL「事実なんだ。仕方ないだろう？」

じゃあ逆に訊くが、ユイをIS学園に赴任させていいのか？」

ユウ「……現実残酷ですね。」

HAL「やれやれ、お前も他人の事言えないな」



ユウ「貴方ほどではありませんよ」

HAL「次回のタイトルは『再会』だ」

ユウ「次回もお楽しみに！」

お知らせ

『奈々瀬ユウ』の欄に情報を追加。

8 / 29 改稿しました。

## S h i f t 1・2 「再会」(前書き)

この作品にBL要素は一切入っておりません。安心してお読みください。

え？ 何でこんな事書いたのかって？ ……どうしてだろうね。

あと一話ごとの進行速度が遅いような気がするけど、気にしない気にしない。

## Shift 1-2 「再会」

Interlude 奈々瀬ユウ

ショートホームルーム

SHR終了後、すぐに一時間目のIS基礎理論の授業が始まった。僕は姉からISに関する知識を色々と教えられていたため問題無かったが、一夏はやはり全く分からなかったらしい。

チャイムが鳴り、先生達が教室から出ていくと同時に教室がざわつき始めた。

女性は無駄話を好む傾向にあると何処かで聞いたような気がする。十代女子の活力は3分の1くらいは無駄話から得ているのだろう。おそらくは。

だが、今回のざわつきは無駄話の類という訳ではなさそうだ。

実質女子校であるIS学園に合法的に入学してきた男子。それも一人ではなく二人。

結論、僕と一夏は否が応にも目立つ。

今現在この学園においては、特定の男子を探す事などどんな女子でもできる。

教室内だけでなく、廊下からもおびただしい数の視線が僕と一夏に注がれている。

これはスーパースターを見るギャラリイと言うよりも視か……ゴホン、逆セクハラもいいところだ。

だが女尊男卑の今の風潮では、そんな事を訴えても追い詰められるのはこっちだったりする。

そんな何とも情けないような世知辛いような事を考えていると、視線に耐え切れなくなっただのである。一夏が立ち上がり、僕の所にや

って来た。

久しぶりに会ったんだし、せっかくだから少し苛めてやろうかな。

「久しぶりだな、ユウ。その……元気で何よりだ」

「……？ 何を言っているんですか？ 貴方と会ったのは初めてですよ？」

「……んなっ!？」

驚愕に目を剥く一夏。ちよっとインパクトが強すぎたか？

それともいくら友達だからと言ってこれはやり過ぎだったか。

「すみません、冗談ですよ。久しぶりです一夏。小学4年以来ですね」

「……おどかすなよ、びっくりした。ユイさんは元気にしてるか？」

「ええ、僕なんかよりずっと元気ですよ」

「……そうか。ユーリおじさんと亜衣おばさんの事、その」

父さんと母さんは僕が10歳の時に事故で亡くなった。

葬式には織斑姉弟と箒の姿もあったので、彼らは二人の死を知っている。

「良いんですよ過去の事は。父さんと母さんの分までちゃんと生きるつもりですから」

「そうか。ユウらしいな、その意志の強さとか」

なんかしんみりとしてきたので話題を変える。話題とは移ろいゆく物だ。

「それより一夏は大変ですね。こんな所に無理やり入れさせられたんでしょう?」

「ああ……ってユウは違うのか?」

「僕は自分の意思でここに来たんですよ。君と違ってちゃんと知識も入れてきました」

「うぐっ……納得してないのは俺だけなのか?」

一夏は自分の待遇にひどくご不満なようなので、とりあえず説得してみるか。

まあ、例によってからかうんだが。

「もう遅いです。さつさと受け入れて順応したらどうです?」

……それに悪い事ばかりじゃないですよ、ここは。

女の子がいつぱいでよりどりみどりと、大和撫子からパリジェンヌ、巨乳から貧乳まで何でも揃っています。

しかも純粹無垢、男に免疫がありません。

自分の腕次第ですが、墮とそうと思えば誰でも墮とせます。

たとえば君が如何にモテナイ君だったとしても彼女等の誰かは墮とせます。

ハッキリ言ってここは男子にとって地上の楽園なんですよ」

ちなみに『それに』は一夏にのみ聞こえるように話した。

こんな話が女子に聞かれた暁には、女子に軽蔑されるのは目に見え

ている。

しかし、改めて見渡してみると女子のレベルは結構高い。

本命は一人だが、その一人がダメとなれば標的ターゲットを変えて積極的に攻めていてもいいかもしれない。

……姉さんに喰われない内に。

「……しばらく会わない内に随分変わったな。……悪い方に」

呆れる一夏。今のはドス黒い欲望丸出しだったからな。……漢共おとこの。だがこんな話は男同士、気心が知れた者同士だからできるのだ。

「所詮僕の本質は、どんなに取り繕おうと男なんです。当然のことです。」

それに、こんなバカ話ができる男友達がいた方がいいでしょう?」

僕の意図に気付いたかは不明だが、一夏はククク、と笑い、

「そうだな。お前がいてくれて本当に助かるよ」

本当に嬉しそうに言ってくれた。

……悪いな一夏、本命以外の女子は全員君に押しつけさせてもらう。恨むなら己の運命を恨め。僕は知らん。

そんな感じで一夏と話をしていると、横から、

「……ちよつといいか」

この声は箒だ。授業終了後すぐに席を立って何処かに行っていたようだ、どうやら戻ってきていたらしい。

視界の隅では箒がちらちらと一夏の事を見ている。メインは一夏か。

「お久しぶりです、篠ノ之さん」

「ああ……このような形で再会するとは思っていなかった。それと呼び方は箒で構わないぞ。前はそう呼んでいただろう？」

「分かりました。一夏、箒と二人で話したらどうですか？ 会ったのは久しぶりなんでしょう？」

「おう、……でも何で久しぶりって知ってるんだ？」

「彼女の立場を考えれば当然です」

篠ノ之束の妹ともなれば保護は必然。転校もやむなしという事だ。多少の予備知識だけでも、少し考えれば分かる。

「廊下でいいか？」

「おう」

箒は一夏を連れ、廊下に出て行った。……待て、教室には僕一人じゃないか。

餌に飢えた狼の群れに羊が一匹。これは危険すぎる。

狼が一拳に押し寄せてくれば僕は1分と持たずに喰い尽くされるだろう。

「あつ……あの！」

「はい？」

後ろから声を掛けられた。振り返ってみると女子が1名。

その後方には女子のグループが1つ。

どうやら今僕に声を掛けている女子が代表らしい。

よく考えてみれば、入学初日から初対面の人間に遠慮なく声を掛けるような、無遠慮かつ鬱陶しい人間などそうはいない。

……自意識過剰だったか。

「えーと……か、か……」

あいにく僕には瞬間記憶能力なんて便利な能力は無い。

だから入学初日からクラスメート全員の名前を把握することは難しい。

「かつ、河井です。河井<sup>かわい</sup>和花<sup>わか</sup>」

そう、思い出した。山田先生みたいに上から読んでも下から読んでも名前が同じ人だ。

なんて言うか、山田先生を彷彿とさせる人なんだよね。色々と。

「そう、河井さん。……えーと、僕に何か？」

「う、うん。奈々瀬君って織斑君と仲が良いの……ですか？」

今普通に話そうとしたけど、初対面だし男子だしやっぱり丁寧な方がいいかなとか思っ、急遽丁寧な言葉に変えようとしたんだけど、使い慣れていなくて結局噛んだって所かな。

丁寧な言葉を無理して使おうとすると大抵失敗する。僕だって最初は失敗していた。

「普段通りの話し方で構いませんよ河井さん。一夏とは小学3、4



年生の頃クラスメートだったんです。

僕は家庭の事情で小学4年の時にアメリカに引っ越してしまったんですが、引っ越した後は年に一回手紙を交換していました」

その手紙には僕の身分等、重要な情報は全く書かなかったんだが。

「そうなんだ。……えっと、ありがとう」

そう言っただけで彼女は後ろのグループに合流し、他の女子に情報を伝えている。

人の口に戸は立てられない。明日には全校生徒に伝わるのだろう。

ちなみに今の返答が『一×ユウ交際疑惑』を更に加速させる事になるのだが、答えた本人にとっては知る由の無い事であった

2時間目始業のチャイムが鳴り、一夏と篤が戻って来た。

その後山田先生と千冬さんによって授業は行われたのだが、

「織斑君、分からない所はありますか？」

「先生、ほとんど全部分かりません」

一夏は山田先生に不明点を尋ねられ、己の不勉強を吐露。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パアンッ！

参考書を電話帳と間違えて捨て、

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者！ 後で再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな？」

「でも一週間であの厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい、やります」

千冬さんに手酷く叱られた。その上、

「えーえつと、織斑君、分からない所は放課後に教えてあげますから、それまで頑張ってください。ね？ ねっ？」

山田先生に手を取られ慰められている。男としてのメンツが丸潰れだな。

見ているこっちが恥ずかしいよ、全く。

## Interlude out

そして二時間目が終了し、休み時間。静観していたあの女が、遂に動き出した。おじょうなま

Shift 1・2 「再会」(後書き)

和花「え」と、初めまして。河井和花です」

HAL「うむ。よろしく、『マヤマヤ2世』」

和花「まっ、マヤマヤ2世!？」

ユウ「ちょっと、あまり彼女をいじめないでください」

HAL「すまん。でもコイツはモブだからどう使おうと俺のか」

和花「え!？ 私の出番ってあれだけなんですか!？」

ユウ「え!？ モブだったんですか!？ サブだと思ってたのに…」

…」

HAL「うん。名前以外全く考えていない。

勿体ないよね、名前は良いのに」

ユウ「どうにかありませんかね、彼女の扱い」

HAL「だからここで使う事にした」

和花「へえ、そうなんですか」

ユウ「河井さん、貴女の事ですょ」

HAL「じゃあ早速次回予告よろしく」

和花「え！？ わ、私ですか！？ …… えーっと、次回のタイトルは……」

『お嬢様ってツンツンしてるのが多いけど、仕様？』です。ちよつとギャグっぽくないですか？ このタイトル。

え？ まだ続きあるんですか！？ えーと……

次回も見るの！ ……ですよ。……ダメでしたorz」

HAL「……やっぱりか」

ユウ「……ですね」

お知らせ

『奈々瀬ユウ』、『ユリウス・アンドレヴィチ・クレンコフ』、『奈々瀬亜衣』の欄にひっそりと情報を追加。

河井和花の情報？ 需要があれば載せます。

8 / 29 改稿しました。

S h i f t 1 - 3 「お嬢様ってツンツンしてるのが多いけど、仕様？」（前

去年テレビでやってた、『マヤの2012年地球滅亡説』が笑えなくなってきたような気がする今日この頃。

大型余震多発でまた連載中断とかやだなあ。

Shift 1-3 「お嬢様ってツンツンしてるのが多いけど、仕様？」

Interlude 奈々瀬ユウ

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

突然横から掛けられたお嬢様然とした声に、一夏は間の抜けた声を出して振り返り、僕は声のした方向を向いた。

箒は僕と同様、声のした方向に首を向けている。

今は二時間目の休み時間。一時間目の休み時間と同様、一夏が僕の席に赴き、箒も加えて三人で談笑していた時のことだった。

顔を向けた先には、金髪ロールが特徴のイギリスのお嬢様。

知ってる人は知っている、あのセシリア・オルコット嬢である。

実際に会ってみると、高貴なオーラと言うか、出来る女的なオーラがひしひしと伝わってくる感じがする。

しかし、残念な事にこのオーラはひと月も経たない内に消え去る事になるだろう。

……織斑一夏という存在によって。

しかし、篠ノ之箒にセシリア・オルコット、鳳鈴音、果てはラウラ・ボーデヴィツヒ。

ツン後デレの女子の比率が非常に高い……気がする。

若干名ニュアンスが違う者がいるのだろうが、僕は全部同じに感じる。

ツンデレの種類について議論する気は無いが、こんなにツンデレを

出して読者の需要が偏ったりしないのだろうか？

「聞いてます？ お返事は？」

どうやら思考の海に浸かる時間が長過ぎたらしい。

視界の隅の一夏をチラ見してみると、僕と同じように思考の海に浸かっていたのだろう。

はっとなつて彼女の質問のニュアンスを推し量っている。

彼女の目線から察するに、おそらく僕にも返答を求めているのだろう。

「あ、ああ。聞いてるけど……どういう用件だ？」

「これはこれは、イギリス代表候補生のミス・オルコットではありませんか。

光栄ですよ、わざわざ貴女に声を掛けて頂けるなんて」

言うまでも無いが、前者が一夏、後者が僕だ。

「そちらの方はいいとして、貴方！ なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相應の態度という物があるんじゃないかしら？」

こういった自己顕示欲が強いというか、無理にでもガンガン押し込んでくるような手合いは好きじゃない。

だが、こういった人間を数多く相手にしてきたため、あしらい方は嫌でも覚えた。

こういつ相手にわざわざ真正面からぶつかり合う気なんてさらさら無い。

適当に返事を合わせて、さっさと話を終わらせるに限る。

一夏はそんな大人な考え方をしてくれるとは思えないが。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「ユウは知ってるか？」

「無論です。ネットで調べればすぐに見つかります」

ちなみに、各国の代表候補生のデータだが、何故かホームページ上に載っていた。

無論国家公認ではなく、非公式ではあったが。しかもそのデータ、IS関連は全く載っていない。

載っているのはスリーサイズ（予想）、趣味、誕生日などなど、まるでいうか、まんまアイドルのプロフだった。

やはり好き物はどんな時代、どんな世界にもいるようだ。

「へえ。あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」



「貴方っ、本気でおっしゃってますの!？」

「おう。知らん」

「一夏、受験生だったんですから新聞くらい読んだでしょう? 読みましたよね?」

「……すまん。教科書とノートと参考書で手一杯だった」

ダメだコイツ、早く何とかしないと。

「一夏、どうやら僕は君に対する評価を改めなければならないようです」

「え? どういう事だよそれ」

「信じられない。信じられせんわ。常識ですわよ、常識。これだから極東の島国は……」

「で、代表候補生って?」

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートの事ですわ。」

「……貴方、単語から想像したら分かる事でしょう」

「一夏、加えて説明しますが、国家代表候補生には専用のISを所持する権限が与えられています。」

世界にISのコアは467個、研究用を引けば実用機は少なく見積もって200前後、国家代表の分を引けば100程度。

分かりますか? 彼女はその100人の中の一人なんですよ。

例えるなら、世界に100匹しかない希少生物が今、目の前にいるという事です。

どれだけ幸運な事だか分かりましたか？」

「そうか、そいつはラッキーだな」

「……馬鹿にしていますの？」

そう言つてミス・オルコットはこっちを睨んできた。

まあ、あれだ、少なくとも間違つてはいない……はずだ。

「大体、貴方ISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。

こちらの方程ではなくとも、少しは知的さを感じさせるかと思つていましたが、ハッキリ言つて期待はずれですわ」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

違うな一夏。織斑千冬の弟という時点で、君は既に期待される対象になつている。

良くも悪くも……ね。

「まあでも？ わたくしは優秀ですから、貴方のような人間にも優しくして差し上げますわよ。

泣いて頼まれたら、ISについて教えて差し上げなくてもありませんわ。

何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「入試つて、あれか？ ISを動かして戦つてやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「俺も倒したぞ、教官」

「は……？ わ、わたくしただと聞きましたか？」

一夏の試験結果だが、正しくは相手の自滅だ。自滅と撃破はニュアンスが違う。

この場合、ミス・オルコットの言い分が正しい。

だが、一夏はそんな事はお構いなしとばかりに追加口撃する。

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。

うわっ、いらない一言を言うから空気にヒビが入ったじゃないか。無論、物理的に修復不可能なのはお約束だ。

「っ、つまり、わたくしだけではない……と？」

「いや、知らないけど」

「貴方も教官を倒したって言うの！？ ……まさか貴方も！？」

ミス・オルコットはそう言ってこっちを睨みつけてきた。

はあ……仕方ない。正直に言おう。

「僕は教官を倒してませんよ。そもそも入試すら受けていません。稼働データと実戦データを提出したら即合格でした」

「……は？ 試験も受けずに合格！？ エリートであるわたくしでさえ試験を受けるよう言われたのに！？」

「僕は男ですから、例外もあるんでしょう」

「例外！？」

「じゃあ俺は例外じゃないってか？」

「貴方はすっ込んでなさい！」

「まあまあ、落ち着いてください」

「これが落ち着いていられ」

ミス・オルコットがヒートアップする直前、三時間目開始のチャイムが鳴った。

この学園のチャイムは本当に空気が読める。何処かの唐変木とは全然違う。

「っ……！ また後で来ますわ！ 逃げないことね！ よくって！？」

決め台詞を言って自分の席に戻っていくミス・オルコット。本当に律義な人だな。

## Interlude out

Shift 1-3 「お嬢様ってツンツンしてるのが多いけど、仕様？」（後

ユウ「僕は主人公ですよ？ 目をそらさずに答えて下さい」

HAL「無論、お前は主人公だ。なぜ今更そんな事を聞く？」

ユウ「本編での僕の主人公らしさがこれっぽっちも感じられません」

和花「あー……」

HAL「それはあれか、そろそろカリスマが欲しいって事か？」

ユウ「否定はしません」

HAL「安心しろ。お前の見せ場なら作ってある」

ユウ「本当ですか!？」

HAL「和花、次回予告を頼む」

和花「はいっ！ 次回のタイトルは、

『上には上がいる。能ある鷹でも気分次第で爪見せる』です。  
でもこれってやっぱりギャグっぽいですよ？」

HAL「気にするな。俺は気にしない」

ユウ「次回も楽しみにしてください」

8 / 29

改稿しました。

Shift 1-4 「上には上がいる。能ある鷹でも気分次第で爪見せる」

バトルを期待していた方々、申し訳ありませんが今回、バトルはありません。

というかこの進行速度だとしばらくはバトルがありません。

ほのぼのとした学園生活を楽しみながらお待ちください。

Shift 1-4 「上には上がいる。能ある鷹でも気分次第で爪見せる」

Interlude 奈々瀬ユウ

三時間目開始のチャイムの後、千冬さんと山田先生が入室し、すぐに授業が始まると思ったが、

「授業の前に、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

そう言えば決闘イベントがあつたな。適当に一夏に押しつけるか。

「はいっ。奈々瀬君を推薦します！」

「私もそれが良いと思います」

ほら一夏、君への推せ……あれ？

「俺も奈々瀬が良いと思います」

待て、何かおかしい。なぜ一夏の名前が出てこない？  
それから一夏、僕を売る気か？ 売る気なんだな？

「では候補者は奈々瀬ユウ……他にはいないか？ いないのなら奈々瀬で決定するぞ」

まずい。このままでは僕がクラス代表になつてしまう。  
僕は立ち上がって千冬さんに存在を示して意見する。

「ちょっと待って下さい！ ……一夏、後で友情って何なのかよ」



く話し合いましょう。

織斑先生、僕は織斑君を推薦します」

「ゆっ、ユウ!?　なんて事をするんだ!　今の雰囲気なら押し通せると思ったのに!」

一夏が立ち上がってそう言ってくる。

冗談じゃない。君がクラス代表にならないとこっちが困るんだ。

「待ってください!　納得がいきませんわ!」

パンツ!　と机を叩いて立ちあがったのはミス・オルコット。

自分を差し置いてワイワイやられるのはそれは納得がいかないよな。

「男がクラス代表だなんて、いい恥さらしですわ!

わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!?

そもそも実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。

それを、物珍しいからという理由でISのあの字も知らないような素人や、人のご機嫌を取ることしかできないような甲斐性無しの方にされては困ります!」

さすが、貴族らしい堂々とした発言だ。だがミス・オルコット、最後の一言は余計だ。

僕はまだいいが、一夏が黙っていないぞ。

「わたくしはISの修練の為にこのような島国くんだりまで来ているのです。

ただでさえ、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない事自体が苦痛であるというのに」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

若干シナリオとは違う展開になったが、まあいい。  
これで決まったな。後はオートで勝手に進むだろう。

「あつ、あつ、貴方ねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの！？  
……決闘ですわ！」

「おう、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「では織斑先生、まずは織斑君とミス・オルコット、その後勝った方と僕という試合の流れで構いませんか？」

「まあ、構わんが……お前には男のプライドという物は無いのか？」

二人の決闘の流れとは別に、僕はクラス代表決定戦の試合の流れを千冬さんと相談していた。

千冬さんは僕にも男らしい一面を期待しているようだが、プライドねえ……。

じゃあこの後ちよつとカッコいい所見せちゃおうかな。意趣返しを兼ねて。

「それで、ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくら「一夏」……何だよユウ」

「一夏、これから行うのは決闘、真剣勝負でしょう？　ならばハンデなど不要。

付けようとするならそれは決闘という行為への侮辱でしかありません」

一夏の言葉を遮って僕はそう言った。感謝して欲しいな一夏。本来なら君は女子全員に笑われているはずなのだから。

「……そうか、そうだな。悪かった」

「あら、分かっているらしいですね。貴方になら特別に情けをかけて差し上げててもよくてよ」

「……ミス・オルコット、貴女は一つ勘違いをしています」

右手の人差し指を立てながら、僕はそう言った。

ミス・オルコットだけでなく、クラス中が僕に注目している。何この状況、刑事ドラマ？

「勘違い……ですって？」

「先程の話を覚えていますか？　入試の話です」

「ああ……あの話がどうかありませんか？」

「気付きましたでしたか？　あの話こそ、僕の実力を顕著に表わす物だったと言うのに」

「……？　どどういう事ですか？」

「僕が試験を受けることなく合格したのは、男だからとか、そんな陳腐な理由だからではありません。」

まして国家代表候補生レベルの実力で試験を回避できるなんて、IS学園はそんなに甘くはない。

ならば、導き出される答えは絞られてくるでしょう?」

「~~~~っ、勿体ぶらないで話さない!」

「僕が提出した実戦データは、国家代表二人を同時に相手し、勝利した時のデータなんです」

『……………は?』

僕の言葉を聞いた瞬間、教室全体が固まった。

クラス中が何を聞いたのかよく理解していない感じた。

もし完全に理解できていたとしても、それはそれで驚愕せざるを得ないデータなのだが。

「こ、国家代表って……」

「国家代表候補生の、その上の人たちですね」

相手はナターシャとイーリスだったんだけど、あの二人、結構強かったよ。

コンビネーションが特に良かった。ISの世代が同じだったらこっちが負けてたな。

「バカな!? 何かの偶然ですわ!」

「3連戦して、3戦とも僕の勝ちでした」

「……………」

さっきまで怒りで赤かったミス・オルコットの顔が、みるみる青ざめていく。

だがそれでも『分かりました』とうなずかないのは、貴族の意地か、それともただ単に現実が受け入れられないからなのか。  
どちらにせよ、次の一撃で勝敗は決する。

「理解して頂けましたか？ 情けを掛けられる側なのは、本来なら貴女なのだという事を」

トドメの一撃を受け、ミス・オルコットはすとんと力無く席に着いた。

肩が震えているように見えるのは悔しさからか？ それとも怒りか？ 泣いているかどうかは確認できないが、もし泣かせてしまっていたなら自己嫌悪に陥りそうだ。

『言いすぎた。悪かった』と、後でちゃんと謝っておこう。  
しかし、女子たちに一つの事実を示す事ができた。

『ISを扱える男子が出てきた場合、女子と対等以上に戦える実力を手に入れられる可能性がある』という事実を。  
教室の沈黙がその重さを顕著に物語っている。

「さて、話は纏まったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。

初戦は織斑とオルコット、その次が奈々瀬対初戦の勝者というトーナメント形式だ。

それぞれ準備をしておくように」

重い雰囲気のまま織斑先生が話を締めようとするが……

「え？ クラス代表ってユウじゃないの？」

声を上げたのは一夏だ。まるで今のでクラス代表が決まったような雰囲気だが、それは決して違う。

そもそも君とミス・オルコットの決闘の話が発端だろう。

「まだ試合をしていないのに決める奴がいるか、馬鹿者」

「一夏、君はミス・オルコットとの約束を蔑ろにするつもりですか？」

「でも実質お前が」

パンツッ！ 織斑先生の出席簿が振り下ろされた。哀れいちパンツッ！ ……痛い。何故僕まで叩かれるんだ？

「織斑、やりもしない内に負けを認めるな。そんな脆弱な心ではISに振り回されるぞ。それから奈々瀬、口が達者なようだが、ガキの口喧嘩に機密事項を使うな」

「……はい」

今のは全面的に織斑先生が正しい。

一夏もそれを分かっているのか、織斑先生に返す返事は一緒だった。

## Interlude out

Shift 1-4 「上には上がいる。能ある鷹でも気分次第で爪見せる」

HAL「良かったね、カッコいい所を見せる事が出来たよ？」

ユウ「良くありません！！ 何ですかこれは！？

まるで僕が悪役じゃないですか！！」

HAL「君にはこれからもこういう汚い事をいっぱいしてもらおうから、

腹の底で黒く笑っていれば良いと思うよ」

ユウ「最悪な主人公ですね」

HAL「何を言っている。必要悪だよ、これは」

ユウ「……そうですか。ところで今日は河井さんがいませんね」

HAL「いないね。じゃあ君がやってよ、次回予告」

ユウ「はい。次回のタイトルは、『ルームメイトは誰？』です。

そっいえば僕は誰と組むんでしょう？」

HAL「それは次回のお楽しみだ」

8 / 29 改稿しました。

## Shift 1-5 「ルームメイトは誰？」（前書き）

ユウのルームメイトは、迷いに迷ってあの人になりました。  
だって動かしやすいんだもん。

ところで『明石家さんまのホンマでっかTV』ってすごく面白いですね。

ふわふわおっ いにする方法があるって聞いた時はコーヒー吹きま  
したよ（笑）

おっ い体操って実在したんですね……

しかも動かし方を変えるだけで大きさも自由自在。

もはや魔法の域としか……。

どうにかネタとして使えないだろうか……。



## Shift 1-5 「ルームメイトは誰？」

Interlude 奈々瀬ユウ

「うっ……意味が分からん。なんでこんなにややこしいんだ……？」

「一夏、今はまだ辛いかもしれませんが、一ヶ月もすれば自然と分かるようになりますよ。  
僕はそうでしたから」

「……なあ、俺にISの事教えてくれ」

「教えてもらいたいなら、まずは参考書を読み切る事ですね。一週間の時間制限付きなんでしょう？」

「うぐっ……」

放課後、僕と一夏は教室でそんなやり取りをしていた。  
筈は何処かへ行ってしまったため、教室にはいない。

ちなみにお昼休みだが、一夏は学食に向かったようだ。それも堂々と。

女子のプレッシャーが大変だったに違いない。

何故そういう風に僕が他人事のように言うのか。

その理由だが、僕は女子の索敵網を掻い潜り、誰もいない屋上で自作の弁当を食べていたからだ。

せっかくなんだし皆で食べようよ、とか思った人もいると思うが、せめて食事くらいは落ち着いてゆっくり食べたい。

女子に囲まれて、緊張して味が分からない料理を食べるよりは遙か

にマシだ。

食べてる途中、一夏が「裏切り者おお!!」とか叫んでいる気がしたが、おそらく幻聴だ。

それに今となつては過去の事。

一夏、君も過去を気にしない懐の深い男になつた方がいいよ。うん。

「あ、織斑君に奈々瀬君。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「え？」

考え事や雑談をしていたので気が付かなかったが、何時の間にか山田先生が書類を片手に立っていた。  
今の気の抜けた返事は一夏だ。

「山田先生、僕たちに何か？」

「はい。えつとですね、寮の部屋が決まりました。二人は別々の部屋で、その……どちらも女子との相部屋です」

そう言つて山田先生は僕と一夏に部屋番号の書かれた紙とキーを渡した。

ん？ なぜ僕にも渡されるんだ？ 確か別宅から通学する予定だったんだけど。

「俺の部屋、決まって無かつたんじゃないんですか？  
前聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらつて話でしたけど」

「僕もしばらくは別の所から通学するものだと思つていたんですが……」

「織斑君の場合は、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。」

それから奈々瀬君の方なんですが……最初から部屋割りの方に組み込まれてみたいです」

「……は？」

どういう事だ？ 僕は男だから、普通なら選考の時点で弾くと思うけど……。

「ま、まあ、一ヶ月もすれば二人用の部屋が用意できますから、しばらくは二人とも女子との相部屋で我慢してください」

「ちょっと待った！ なら俺とユウが組んで、お互いの相方が組んだ方がいいんじゃない？」

一夏が筋の通った反論を当たり前のように返してきた。

一か月も女子と相部屋なんて我慢ならないんだろう。

だが、僕としては君と篤が同室になってくれた方が色々面白い。とりあえず確認すべき事を確認しよう。

「一夏、部屋の番号を教えてください」

「え？ えっと、1025号室だけ」

1025か、原作と同じだな。ならば一夏に篤を押しつけるチャンスだ。

ここは何としても押し込む。諦めろ一夏。

この選択が後に、僕に災厄をもたらす事になるのだが、この時点で僕はそんな事知る由も無かった

僕は一夏と筭をくつつけるため、説得を始めた。

「僕は1036号室ですね。割と近いですからいつでも会えますよ。それに、学園に二人しかいない男子と相部屋ともなれば、おそらく彼女たちは部屋替えの件を了承してはくれないでしょう。幸運だから言つてね。

それに一夏、君には早く耐性を付けてもらわないといけません。無論女子に対しての、です。どうして僕がこんな事を言うか分かりますか？

さっき言いましたがこの学園に男子は僕と君の二人しかいないんです。

日常生活ではどうしても女子に接する機会が多くなりますし、女子に気軽に話しかける事ができなければ何時まで経っても僕以外の友人ができませんよ？

僕は君がそんな悲しい事になるのを友人として見過ごす訳にはいきません。

僕としても君と同室になれないのは残念ですが、今後の事を考えればこれは必要な事です。

それに一ヶ月なんて、ISの勉強をしてればすぐですよ。

……ですから一夏、僕と同室の件は諦めてくれませんか？」

若干、というかもう暴論に限りなく近いが、そこは身振りを加え感情を前面に押し出し、一気にまくしたてる事でカバーする。

更に最後には一夏の手を取りお願いする。男同士で気色悪いとか言われそうだが、これだって立派な交渉術だ。この際気にしない事と

する。

「ユウ……俺の事をそこまで考えてくれてるのか。……お前が友達で本当に良かった。……じゃあ山田先生、一ヶ月後に部屋替えて事でよろしくお願いします」

両手を僕の両肩に置きながらそう言う一夏。

うん、ちよろいね。小学生の頃から何も変わってない。単純で鈍感で直情的だから、とりあえず熱意を見せれば首を縦に振ってくれる。

叔父さんもそうだけど、こういうタイプは扱いやすくて助かるな。

そして山田先生の方は……ん？

「……………」

何故かぼーっとその場に突っ立っている。しかも顔が赤くなっているような……。

「……………山田先生？」

「織斑君と奈々瀬君ってそんな……ダメですよ、二人とも男の子同士なのに」

いかん、この人の瞳の奥にバラ園が見える。これは早急に引き戻さねば。

「山田先生、山田先生！」

「へ？ あ、はい！ 一ヶ月後ですね。分かりました」

話はちゃんと聞いていたようだ。戻ってくれて良かった。

「そういえば荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

思い出したように一夏が言う。そういえば僕の荷物ってどうなるんだ？

間違えて別宅の方に行っていたら目も当てられない。

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配をしておいてやった。ありがたく思え。それと奈々瀬の荷物なら届いていたぞ」

「ど……どうも」

「ありがとうございます」

なんとも素晴らしいタイミングで登場してくる千冬さん。

ニュータイプの勘が告げている。この人は危険だと。……多分。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。

あとお風呂ですけど、寮には大浴場がありますが、その……織斑君と奈々瀬君は今の所使えませんので、各部屋に備え付けてあるシャワーを使ってください」

「え、なんですか？」

真顔で聞き返す一夏。いや、普通聞き返さないでしょ。理由が明らか過ぎるし。

「一夏、君はIS学園の女子生徒全員を敵に回す気ですか？」

「は？ それってどういう……？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

「おつ、織斑くんつ、女子とお風呂に入」

「山田先生、部屋の様子を見たいので、用事が無ければ失礼しても構いませんか？」

今の山田先生の言葉は誤解を生むような気がしてならなかったので、誠に失礼ながらカットさせてもらった。

「え？ あ、はい。構いませんよ。私たちはこれから会議がありますので、これで。織斑君、奈々瀬君、道草くっちゃダメですよ」

直帰しろという事だろうか？ 参ったな、色々と見て回ろうと思っただけだ。

まあ、別に明日でもいいか。まだ初日だし。

「分かりました」

「んじゃ行くか、ユウ」

そう言っ僕と一夏は教室を後にしようとしたが……何故か周りの女子が「いつ、一緒に帰るのかな？」だの、「手を繋いで帰るのかな」だの、「やっぱりー×ユウで間違いないわね！」だの、訳のわからない事をワイワイ言い合って騒いでいた。

別にいいだろ、男同士で帰っても。あと最後の奴、変な物見過ぎだ。

「1036、1036……ここか」

寮に入っってから、僕は一夏と別れて自分の部屋を探した。

目当ての部屋はすぐに見つかり、僕はドアの鍵を開けようとするが、

「……違う、これは拙いな」

差し込もうとした鍵をピタリと止める。

危ない危ない、危うく一夏と同じ轍を踏むところだった。

女子がいるかもしれない部屋にノックもせずに入るなんて自殺行為だ。

という訳で僕は二回、ドアの向こうの相手にも聞こえるようにノックした。

「はい」

程なくしてドアの向こうから返事が聞こえた。やっぱりいたか。無論、ここで気を抜いて自分からドアを開けるのもダメだ。



以前姉さんの部屋に踏み込んだ時は酷かった。あんな思いは二度と  
したくない。

「奈々瀬です。ドアを開けて頂けますか？」

「えっ、奈々瀬君！？ ちょっと待って」

ドアの向こうが急に慌ただしくなる。中で何が起きているのか気になるが、無駄に詮索しないのがマナーだろう。  
ところでこの声、何処かで聞いたような気が……。

しばらくしてドアが開かれ、目の前には

「えっと、確か河井さん……ですよね？」

教室で話をした河井<sup>かわい</sup>和花<sup>わか</sup>さんだ。  
この部屋にいるって事はまさか……

「えーと、うん。それで、この部屋に……何か？」

「この部屋って、1036号室ですよね？」

「そうだけど、もしかして私のルームメイトって……」

僕は部屋番号が書かれた紙を見せながら河井さんに言った。

「どつやら、僕みたいです」

## Interlude out

Shift 1・5 「ルームメイトは誰？」（後書き）

ユウ「前回ここにいないと思ったら、出演準備してたんですね……」

HAL「これでモブからサブに格上げだな」

和花「ありがとうございます！」

ユイ「うふふふ」

ユウ「？ 姉さんどうしたの？」

ユイ「何でもないわ。うふふふ」

ユウ「……………（絶対に何かあるよコレ）」

HAL「次回のタイトルは、『策士策に溺れる？』だ」

ユウ「策士って僕の事ですか？ 僕の事ですよね？」

HAL「誰もそんな事言っていないだろ」

ユウ「目が泳いでますよ？」

ユイ「次回も楽しみにしててね。うふふふ」

お知らせ

『河井和花』の情報は近日公開予定。

8 / 29 改稿しました。

S h i f t 1 - 6 「策士策に溺れる？」（前書き）

やらなきゃいけない事が増えてきたので、更新ペースが落ちる事になりそうです。

それと、その内あらずじとキーワードを一部変更します。  
迷走したって良いじゃない。処女作だもの。

ご意見、ご感想は随時受付中です。

## Shift 1-6 「策士策に溺れる？」

「……えっと、とりあえず入っても構いませんか？」

「え？ あ、はい。どうぞ」

いつまでもドアの前で突っ立っている訳にはいけないので、とりあえず部屋に入れてもらう。

僕の部屋なので『入る』が正しいと思うが、残念ながらこの学園では女子の方が強い。

この部屋の優先権は女子である河井さんにあるのだ。  
別にレディーファーストだって言えば良いんだろうけどさ。

「それにしても驚いちゃった。まさかルームメイトが奈々瀬君だなんて……」

「僕ですよ。さっき話した相手がルームメイトだなんて、普通は考えませんか」

実際のところ、ルームメイトが誰かなんて予想もしていなかった。  
彼女がルームメイトだなんて想定外だった。

中に入って部屋を見渡すと、思っていた以上に広く、設備も上々だ。  
ベッドが一人用としては随分大きい気がしたが、気にする事じゃないよな。

手前のベッドにはまだ未整理の荷物が数多く置いてある。

僕はこんなに沢山荷物を送った覚えは無いし、荷物の量からして女性物の物、つまり河井さんの物である事は間違いないだろう。

そのまま手前のベッドをスルーし、奥のベッドに向かおうとすると

「あれ？ その荷物、奈々瀬君のじゃないの？」

河井さんに止められた。……はて？ なぜ止められた？

彼女は今この荷物が僕の物だと言った。なぜ？

「え？ この荷物は河井さんのじゃないんですか？僕はこんなに  
沢山送った覚えは無いんですが……」

「私はもう荷解きを終わらせたけど……」

「……………」

「……………」

静寂がこの空間を支配する。お互い顔を見合わせ、同時に視線をベッドの上の荷物に向ける。

……なぜだろう、すつごく嫌な予感がする。そして不幸な事に、僕はニュータイプだからこの勘が外れる可能性を否定することができない。

どこかで木刀が木製のドアを貫くような音がするけど、今の僕にはそれを聞いて楽しむ余裕はこれっぽっちも有りはしない。

……とりあえず状況を整理しよう。

1、僕は山田先生から1036号室の部屋を割り当てられ、鍵をもらった。

2、この部屋はおそらく1036号室である。

（鍵を確認してないので確定ではないが、河井さんが認めている）

3、織斑先生の話によれば、僕の荷物は部屋に届いている。

4、河井さんは、既に荷解きを終えている。

うん。絶対僕のだね、この荷物。全く身に覚えが無いんだけど。

「あ、あの……」

「……何か？」

「う、うん。もしかしたらこの荷物、奈々瀬君のじゃなくて別の人のかも……」

ふむ、確かに可能性が無いわけじゃない。でも間違えるだろうか？  
量的にパツと見分かるような気がするけど……。  
それにこれが全部他の人の荷物とも限らない。

「もしかしたらこの中に僕の荷物が混じっているかもしれません」

「……！ それもそうだね」

「他人の荷物をいじるのは趣味じゃないんですけど、この際仕方ありません」

そう言つて荷物の確認を始める。しかしすぐにある事に気が付いた。

「あれ？ 隠れて見えなかったんですけど、タグが付いてますね。これなら誰の荷物かすぐに分かりますよ」

「それならすぐに見分けられるね」

荷物にタグが付いている事は不自然な事じゃないし、悪い事でも無い。

むしろいい事だ。でも何故だろう……。

脳裏では僕の勘が常に警鐘を鳴らしている。それに触れるなど言わんばかりに……。

しかし、一度出した手を引っ込めるなんて不自然なので、結局タグを見てしまった。

タグには『名前：奈々瀬ユウ』の文字。……ん？ 奈々瀬ユウ？

「こんな荷物、見覚え無いんだけどな……」

次の荷物のタグにも『名前：奈々瀬ユウ』の文字。

……まあ、荷物がひとつつて訳じゃないから。

そうして確認していった結果、とんでもない事実が判明した。

「結局全部奈々瀬君のだったね」

「そんなバカな……」

全ての荷物に僕の名前のタグが付いていた。

これはアレか？ 増殖したのか！？ それともドッキリか！？



そして未だ鳴りやまぬ警鐘。間違い無い。これは特A級危険物だ。開けた時点で DEAD END な代物だ。

「奈々瀬君、どうしたの？ 荷解きしないの？」

固まった僕を見て首をかしげながらそう言うルームメイト。

開けるしか、ないのか……？ いや、まだ回避手段は残っている。

「……今日は疲れたんでまた後で」

「でもこの量じゃ、早く解かないと後で苦労するよ」

くうつ……なんて優しいルームメイトなんだ。涙が出てくるよ。

惜しいのはこれが嬉し泣きじゃないって事だ。

「……分かりました。それじゃ、始めます」

覚悟を決め、手近にあったカバンを開けて中にある物を取り出す。

……………コレハ、ナンダ？

出てきたモノは白い服のような物。

ヒント1、これはIS学園で身に付ける物である。

ヒント2、何故かズボンが付いていない。

ヒント3、間違っても僕が身に付けるべきではない。身に付けては

ならない。

「奈々瀬君……それって」

「……………」

壊れたブリキのおもちゃのように首を河井さんの方に向けると、河井さんは口元に手を当て、ほほを赤く染めてビツクリしていた。やったあ、ドッキリ大成功！……なワケあるかボケエー……！！何コレ！？ 何で女子の制服入ってんの！？ 新手的ドッキリ！？ 仕掛け人は河井さん！？ カメラは何処だ！？

「……………あ、あの」

「……………はいっ！？」

「……………封筒、落ちてる」

はっ……………取り乱してて分からなかったが、河井さんに指摘されて初めて気が付いた。

確かにベッドの上に封筒が一つ落ちている。制服から落ちたみたいだ。

パツと見普通の封筒だ。差出人の名は書かれていない。

封筒を開けてもドッキリは起きず、一枚の紙が出てきた。

ふむ、どれどれ……………！？

『マイ・ディア・リトルブラザー、ユウへ。』

どう？ 私手作りの制服は気に入ってくれたかな。

さっさと女子に嫌われてこっちに帰ってきなさい。

そしたらお姉さんが優しく慰めて ア・ゲ・ル （はあと）

君が敬愛してやまない麗しの姉より』

つまりはこういう事だろう。

『女子用の制服を作って荷物に仕込んでおいた。

その制服を女子が見ればキモイと思うだろうし、仮にそう思われなくとも、女子用の制服についての噂が広まればIS学園でマトモに生活できるはずが無い。

という訳でさっさと喰われに帰ってこい』……と姉はのたまっているのだ。

手紙を読み終え僕は一言、

「……姉、さん……。謀ったな！ 姉さん！！」

やっぱりアンタか！？ 何処まで弟に迷惑かける気だよ！

第一人学園から引き戻すのにどれだけ仕込んだんだ！

この最終鬼畜変態ブラコンシスターがああ！！！！

I n t e r l u d e o u t

ちなみにユイの仕込みがどれほどの物だったかと言うと、

- 1、書類を改竄して部屋割りに組み込ませた。
- 2、ユウ専用の女子の制服を作った。（無論、愛情のこもった手作り）
- 3、ユウに偽装の荷物業者と契約させ、自分が荷造りした荷物の方を学園に送った。

以上をひと月で完璧にこなした。才能の無駄遣いである。

ちなみにユウが姉の悪質なイタズラを満喫している頃、一夏と箒は……

「お、お前から希望したのか？ 私の部屋にしろと……」

「俺はユウと一緒に良いって言ったんだけど、ユウがどうしてもって言うから……」

「……ユウが？」

「ああ、でもルームメイトが箒で助かったぜ。幼馴染ってのはいい響きだな」

「!？ …… ああ、そうだな。 うむ、 幼馴染とは良いものだ（ユウ  
には後でお礼をしなくてはならんな）」

…… 割と良い感じだった。

Shift 1 - 6 「策士策に溺れる？」（後書き）

ユウ「ハメられた……orz」

HAL「さすがの俺でもアレやられると動揺というか、混乱するな」

ユイ「さあ、私の元にカムバック!!」

ユウ「入学初日でまさかの退学!?!」

HAL「安心しろ。次はご都合主義満載の話だから。  
それとお前が退学したら話にならん」

ユウ「そうですか……良かった」

HAL「……無傷で乗り切れると思うなよ」

ユウ「!?!」

ユイ「次回のタイトルは、『平穩の代償（笑）』だよ。  
いやあ、楽しみだねー」

ユウ「ちよつ、もうこんな話を入れる気ですか!?!（ヒソヒソ）」

HAL「別に良いじゃん。ちゃんとR - 15付けてるんだし（ヒソ  
ヒソ）」

お知らせ

オリキャラ紹介の欄に『河井和花』の情報をひっそりと追加。

8 / 29 改稿しました。

Shift 1・7 「平穩の代償（笑）」（前書き）

良くも悪くもユウの方向性が決定してしまった話（苦笑）

書いたって良いじゃない。作者だもの。

「これはマズイだろ」と思う表現がありましたら、感想版でご指摘ください。

すぐに訂正等を行います。

あと、通常の感想等も受け付けています。気軽に書きこんで下さい。



Shift 1-7 「平穩の代償（笑）」

Interlude 奈々瀬ユウ

「奈々瀬君はじつとしていいよ。私が脱がしてあげるから」

「だっ、ダメです……河井さん。こんな事……」

今現在、僕は河井さんに押し倒されている。

普通は逆だろうと突っ込みを入れたいが、今はそんな余裕は無い。河井さんの目は潤み、しかし据わっていて妖しく光っている。頬は朱に染まり、息遣いはハアハアと荒くなっている。つまりどういう状態かというと

「……………我慢、出来ない。ヤッちゃってもいいよね？」

「全力で拒否します……!!」

「答えは聞いてない」

「そんな理不尽な！？ 正氣に戻ってください……!!」

「ナニライツテルノ？ ワタシハシヨウキダヨ？」

暴走しているのだ。この雌猫は。

誰か答えて欲しい。どうしてこうなった？

20分前。

僕のカバンに女子用の制服が入っているという衝撃的な事件の後、河井さんは処理落ちしたかのように動かなくなってしまった。顔は俯いており、表情は読み取れない。

きつと彼女に『女装趣味のキモイ男』と取られたに違いない。

「……………」

「…………その、失望…………しましたか？」

「……………」

返事はない。やっぱり嫌われてしまったか。仕方ない。

これ以上迷惑を掛けるわけにはいかないし、さっさと荷物を纏めて出ていこう。

「短い間でしたが、お世話に「待って！」…………え？」

何故か河井さんに止められてしまった。エロゲ展開だよねこれ。

河井さんは奥のベッドに駆け寄り、ベッドの下をゴソゴソしている。定番と言えば定番だけど、それ絶対自分のベッドでやる事じゃないよね？

河井さんは目当ての物を見つけたらしく、何かを抱えてこっちに来た。

「…………コレ」

顔を赤くし、目を逸らしながら両手で物を差し出してくる河井さんの姿には、男子としてそられる物があった。

しかし惜しいかな、手に持っている物との相性がすこぶる悪い。何せ彼女が手に持っている物、それは……

『女装探偵ユージの事件簿』

女装しての潜入捜査を得意とする高校生探偵、小鳥遊悠二<sup>たかなし ゆうじ</sup>が、

怪事件が起これと噂される女子校に潜入し、他の女子と怪事件を解決するという、

いかにもな設定の選択肢形式のノベルゲーム。R - 18 指定。定価 6980 円。

うん。突っ込み所満載だね。

でも僕が何を強要されるかすぐに分かってしまうのが怖い所だよ。

「何でそんな物持ってるんですか？」

「お兄ちゃんが、『溜まったらコレ使え』って」

河井兄！ アンタ妹になんて物持たせてるんだ！？

それから理由がおかしいだろ！！ 15 の妹に言うセリフじゃないよね！？

「……で、コレが出てきた理由を教えてください、構いませんか？」

「そのう……一生のお願い！ それを使って女装して欲しいの！……ダメ？」

僕が持っていた女子用の制服を指さしながらそう言う河井さん。

顔を赤くし、上目遣い＋潤んだ瞳でそうお願いしてくる河井さんの姿には、男子として（以下略

しかし惜しいかな、言っている事との（以下略

ハッキリと言おう。僕に女装癖は無い。前にアメリカでやらされた事はあったが、どうしてもと土下座され、かつ人助けの為だったからイヤイヤながらやったんだ。

何で僕が女装しなきゃならないんだ。キモイだけだろう。

……なんて言ったら、この先IS学園で生活していく事ができないような気がした。

彼女が一言、『奈々瀬君は女装癖持ちのキモイ男だ』と言えば僕は即、警察に厄介になるかもしれないからだ。

つまりこれは僕がIS学園で3年間生活していくための代償という事が……。

これは大きい代償だな。しかし背に腹は代えられない。

「……分かりました。ただしいくつか条件があります」

「条件？」

「一つ目、僕が女装した事は絶対誰にも言わない事」

「まあ、それくらいなら。私こう見えても口は堅い方だから」

「それを持つてる貴女が言える事ですかね？」

彼女が手に持っているソフトを指さしてそう言う。

とんでもない秘密をカミングアウトしている彼女を信用するのは勇気がいるな。

「ちよつ……それ酷くない!？」

「……はあ。分かりました。信用しますから。次、二つ目は僕が女装した写真や映像記録は決して残さない事。音声もバレそうな気がするのでアウト」

「えー。」

「えー。じゃありません! 僕にとっては死活問題なんです!」

こういう秘密にしておきたい事は、物的証拠を残さないのがセオリーだ。

記録に残るのではなく、記憶に残る……はちよつと違うか。

「最後に、僕が着た女子用の制服は僕が責任を持って処分させていただきます」

「えー!？ せめて制服くらいは……」

「……聞きたくないですけど一応聞きます。何に使う気ですか？」

「せっかくだし、私も着るの」

「着るの!？」

「うん。」

「うん。じゃありません! 僕が困ります!」

それをやられるとドッペルゲンガーに遭遇するより心臓に悪い。  
なんでそんな事したがるんだ。普通しないだろ。

「じゃあせめて着替えシーンくらいは」

「却下。」

「ケチ」

「……はあ。条件は以上です。分かったら向こうを向いていてください。……覗かないで下さいよ？」

「はいはい。じゃあ着替えが終わったら言ってね」

「分かりました」

話を終えると間仕切りを出して、僕はすぐに着替えに取りかかった。ノロノロしていると襲われそうな気がしたからなのは言うまでも無い。

しかし女装という行為に関して良い思い出は全く無い。  
むしろ悪い思い出ばかりな気がする。

ゆえあつてFBIの囹捜査に協力した時は最悪だった。

検挙した犯人の全員が全員、『男だとは思わなかった』なんて口を揃えて言っていたのだ。

しかも騙されたのに顔はなんだか良いものを見たような清々しさだった。

罵詈雑言を受けるよりダメージを受けたよ、あれには。

ところで、下着、どうしよう……。上はいいとして、下はこのまま

じゃマズイよね。

そういえば他のカバンを開けてなかったし、この際だからついでに開けてみるか。

他のカバンを開けてみると、出るわ出るわ、女装用の胸パット、コスメセット、

果ては女物の下着 e t c . . . 。

「開けてみる物……か。あのブラコン、僕に何させる気だったんだ？」

うん。帰ったら必ず仕返ししよう。……倍返しで。

「どうかした？」

「何でもありません」

とりあえず着替え再開。上は胸パットを入れ、ブラを装着。その上にシャツを着る。

下は短パンで何とかなるか。某超電磁砲のお嬢様だってそうしてたし。

うわ、スカート短いなー。何で女子ってこういうの好むかな？

ところでこの制服、女子が着ている物とデザインが全く違う。

色は同じだが、女子中高生が着るブレザーに近い形だ。

IS学園って制服のカスタムが自由だけど、これでもOKなんだろうか。

スカートを穿いてネクタイを締め、制服に袖を通す。

メイクは……まあ、最低限で。後は長髪のかつらを付けてポニーテールにすれば完成。

鏡の前でくるっと一回転……とかしないから。しないからね？  
所要時間は10分足らず。これはきつと必要最小限の準備だったからで、決して慣れていないからではない。そう信じたい。

「……終わりましたよ」

「随分と早かったね。それじゃ早速……ッ!？」

河井さんが僕の姿を目にした瞬間、何かとんでもないものを見たかのように動かなくなった。

「……やっぱり変ですよ。見苦しいものを」

「……綺麗」

「……へ？」

綺麗？ この姿が？ まさか。聞き間違いだ。

「すごく似合ってる。体の線だって細いし、どう見ても女の子にしか見えない」

「それは、どうも……」

うん。やっぱり聞き間違いじゃなかった。  
女の子にしか見えないとか、それ褒め言葉じゃないよね？

「この胸だつてすごく自然。何入れてるの？」

「他のカバンに入っていたパットを……ひう!？」



僕の胸を指さして訊いてきた河井さんが、いきなり胸パットを触ってきた。

ビックリした……。コレって作り物だけど、リアルに圧力掛かるみたいなんだよね。

「!?!? ……どうしたの?」

「いえ……その、いきなり触られたのでビックリして」

「……そう、なんだ」

ふに、ふに。

そのまま揉み続ける河井さん。

何だろう、圧力に慣れてくると今度はくすぐったいような……。

ふに、ふに、ふに。

「んっ!?!? 河井さん? くすぐったいんで、やめて……っ!?!? 頂けませんか?」

「……………」

無言で揉み続ける河井さん。なんか怖いよこの人。

ふに、ふに、ふに、ふに。

「はっ……く、くすぐった……んっ!」

「奈々瀬君……可愛い」

「河井さん？ いい加減にしないと……わっ!？」

河井さんの力に耐え切れず、ベッドに押し倒される。

え!？ 何で押し倒されるの？ 僕の方が力あるよね？

「河井……さん……？」

「奈々瀬君がいけないんだよ？ そうやって一々扇情的な仕草をするから……」

「え!？ そんな事……」

「あはっ 無意識にしてるの？ もしかしたら奈々瀬君って実は女の子だったりして」

「違います!!」

「全部脱いだら、本物の胸が出てくるんでしょ？」

「違います!! 絶対に有り得ません!!」

「奈々瀬君って嘘つきだなあ。そういう子にはオシオキしなくちゃ」

そして冒頭の文に戻る。以上が20分の間にあった出来事だ。

マズイ……このままじゃ大事な物を失ってしまいそうで怖い。

「~~~~っ！ いい加減にしないと……はっっ！？」

「ダメだよ、じつとしてなきゃ」

抵抗むなしく、河井さんに押さえつけられる。  
だからどうして河井さんの方が力が（以下略

「んふふ〜」

あれよあれよと言う間に制服のボタンが全て外され、ネクタイが取り払われ、シャツのボタンに手を掛けられる。

別に胸を見られようが構わない。それで止まるなら抵抗なんてしない。

だが、彼女の目が語っているのだ。『胸だけで済むと思うなよ』……と。

『目は口ほどに物を言う』とはよく言った物だ。

一夏、済まない。僕は望まぬ形にせよ、男になるかもしれない。

あまりにも酷い遺言のような覚悟を決めた時、奇跡は起きた。

コンコン。

部屋に響き渡るノックの音。 来客だ。

「……？ はむぐっ！？」

河井さんがノックに気を取られている内に拘束から脱出。  
そのまま河井さんの口元を押さえ、体勢を入れ替える。

僕が上に、河井さんが下になり、攻守が逆転した。

目を白黒させる河井さんに向かって静かにするようジェスチャーし、居留守を使つて来客をやり過ごす。

「ユウー。いるかー？ ……どこ行つたんだろっ？」

来客は一夏だったようだ。ドアの向こうの気配が遠のいていく。どうやら諦めたようだ。一息ついた僕は河井さんを解放する。

「ぶはっ、ビックリした。奈々瀬君つて大胆なんだね」

「違います。この格好で出たら一夏にバレるでしょうっ？」

「……？ 何が？」

まさかもう忘れたのか！？ 僕が男だという事を。僕が女装しているという事を。

「僕をただの変態にしたいんですか？」

「……あー、ごめんなさい」

「はあ。もう良いでしょう？ 着替えますから、向こうを向いていてください」

「え？ もう終わり？」

「もうすぐ夕飯の時間です」

## Interlude out

Interlude 河井和花

あーあ、もうそんな時間か。

もっと見たかったのになあ、奈々瀬君の女装姿。

私なんかよりずっと可愛かったし、絶対生まれてくる性別間違えてるよ。

私は奈々瀬君に言われた通り180度回れ右をして待つ。

あれ？ さっきと違って間仕切りが無いから、そつと振り向けば……

生着替えが見られる。

飽くなき探究心を抑えつける事ができず、私はそつと振り向いて……

Interlude out

Interlude 奈々瀬ユウ

僕が着替えをしていると、突然、

「#T\$ ÷!？」

後ろから奇声が聞こえてきた。河井さんの声だろう。

僕が振り向くと、そこには鼻血を噴いて倒れる河井さんの姿が。

……つてええっ!？

「河井さん！？　大丈夫ですか河井さん！」

河井さんは小さいながらも力強い声で、

「……我が生涯に一片の悔い無し」

言い終えるとそのまま気絶した。幸せそうな、清々しい顔で。  
うん。何を見たのか分かってしまうから余計に傷つくよ。

……これじゃ夕食は食堂では食べられないな。  
河井さんを彼女のベッドに運ぶ途中でそう思った僕は、彼女の夕食  
を取ってくるために部屋を出た。

……ちゃんと着替えてから。

その後食堂で一夏にバツタリ出くわし、お前何してたんだとか、ど  
うして飯食わずに持って行くんだとか訊かれたが、一言、

「ルームメイトが貧血で倒れましてね。色々忙しいんです」

と言ったら、

「……大変だな」

と納得してもらえました。ある意味間違っていないから別にいいよね。  
というか真実を言っても信じてくれないよね。言う気すら無いし。  
そんなこんなで散々な日だった。もう嫌だ。絶対に女装なんてしな  
い。

この決意はひと月も経たずに無駄になるのだが、それはまた  
別のお話。

I  
n  
t  
e  
r  
l  
u  
d  
e  
  
o  
u  
t

Shift 1-7 「平穩の代償（笑）」（後書き）

ユウ「さて、覚悟は出来ていますか？」

HAL「待て、あれはユイがやった事だ！俺は何も知らない！」

ユイ「ぐすん……あれは作者がやれって言うから……。  
でないと出番減らすからって……」

ユウ「姉さん……。全く、貴方って人は……。  
さあ、どこから切断されたいですか？」

HAL「ユイ！？くっ……和花、ユウの姿、どうだった？」

和花「それはもう天女様のように綺麗で……（鼻血噴いて倒れる）」

HAL「和花！……ユウ、お前は存在自体が毒だ！  
また犠牲者を出しやがって！」

ユウ「全部……アンタのせいだアアアア！！！」

HAL「待て！！やめっ……何をs」

（報道規制）

ユウ「またつまらぬ物を切ってしまった」

ユイ「次は特別番外編を予定しています。みんな見てねー」



HAL「俺は……死なん……ガクッ」

お知らせ

あらすじとキーワードを変更しました。

8 / 29 改稿しました。

Shift EX-1 「特別番外編 姉弟を立ち直らせた、運命の出会い」

今回は、サザンクロス様の「IS―インフィニット・ストラトス―不屈の翼」より、

月光夜明と夕暮太陽をゲストとして出させて頂きました。

サザンクロス様、二人を貸し出して下さり本当に有難う御座います。

個人的にやり過ぎちゃった感が有りますが、太陽への大きすぎる愛ゆえ……という事でどうか許して頂きたいです。

それでは本編をお楽しみください。

Shift EX-1 「特別番外編 姉弟を立ち直らせた、運命の出会い」

両親の死後間もなく、アメリカにいる叔父の元へ身を寄せる事になった奈々瀬姉弟。

両親を失った悲しみに加え、大きな環境の変化もあり、二人の心は少なからずダメージを負っていた。

二人の心をどうにか癒そうとした叔父ではあったが、二人は叔父に対して全く心を開こうとしなかった。

二人の心は、事故の日を境に完全に止まってしまっていた。

しかしある日、停止した二人の心は唐突に再稼働する。

叔父が二人を連れて入った一軒の喫茶店、そこにいる二人の人間が、彼らを揺り動かした。

この出会いは、もしかしたら運命だったのかもしれない

「……ねえ、叔父さん。今日はどこに連れてくの？」

「……歩きっぱなしで疲れた。お腹空いた」

「もうすぐ着くからもうちつと我慢しろ。美味<sup>うまい</sup>いモン腹一杯食わせてやっから」

10歳の少年、奈々瀬ユウは叔父に対して冷ややかな、放っておけ

とでも言いたげな視線を向けつつ質問し、15歳の少女、奈々瀬ユイは文句をブツブツ言いながらふらふらと歩いている。  
叔父は二人の前を歩きながら、二人を宥め、歩かせている。

しばらくして唐突に、叔父が歩みを止めた。叔父の目線の先には一軒の喫茶店。

喫茶店の名は『Daybreak's Sun』  
ディスプレイクス サン

彼の行きつけの喫茶店だ。叔父、ユイ、ユウの順に店内に足を踏み入れる。

「いらっしゃーい」

「よう、おっさん久しぶり。最近顔出さないから、嫁の手料理食ってるかと思ってたぜ」

女性の声、続いて男性の声が聞こえてきた。

店内には客の他に店員と思われる人が二名ほどいるが、この声は店員達から発せられたものらしい。

女性店員は、髪はシャギーが入っている紅いセミロングで、瞳の色は髪と同じ紅色。

スタイルは服越しでも十分に優れている事が窺える。

有名ブランド誌の巻頭に出てきそうな美女だ。

しかし、何故か彼女には『漢らしい』という表現がしっくりきてしまうのが何とも謎だ。

男性店員は、髪は銀のロングヘアを翼の形をした髪留めで一つに纏め、瞳の色は髪の色と同じ銀色。

体格は長身瘦躯だがひ弱な印象は受けない。

甘いマスクでこれまた有名ブランド誌の巻頭に出てきそうな男性だ。しかし、顔からはどうもイタズラ好きな子供のような印象を受ける。

どちらも若々しく、年齢は推定20代半ばと言った所。

「おいおい、俺はまだ30代だぜ？ おっさんはひでえだろ。それと妄想はよせ。ちょっと忙しかったんだよ」

叔父は男性店員に向かってやれやれといった仕草をしながらそう言う。

男性店員は悪びれもせずに、見た目がおっさんっぽいぜ、と漏らしつつ、女性店員に彼らを席に案内するよう指示した。

「済まないなクレンコフさん。御覧の通り今はカウンターしか空いていないんだ。それでも構わないか？」

女性店員は申し訳なさそうにそう尋ねてくる。

昼時とあってか、座席は8割方埋まり、カウンター席しか空いていない。

「……だそうだ。二人ともカウンターで良いか？」

「別にどっちでもいい」

「右に同じ」

叔父の質問に対して、疲れと空腹から適当に返事をする二人。女性店員に案内され、三人はカウンター席に座る。

「ねえ叔父さん。この人たちは知り合い？」

程なくしてユウがそう尋ねる。ユイも気になるようだ。

店内には他に多くの客がいるが、その中でも圧倒的存在感を放つ二人の店員。

気にしないはずが無い。

「ああ、そついや二人は初対面だったな。こつちの兄ちゃんは月光夜明。で、こつちの姉ちゃんは月光太陽ちゃんだ。

夜明、太陽ちゃん。こいつらは兄貴んトコのガキ達だ。こつちが奈々瀬ユイ。んでこつちが奈々瀬ユウ」

「二人とも、ヨロシクな！」

「よろしくな。あとコイツの事は夜明オジサンで構わないぞ」

「おい！ 俺アまだそんな歳じゃねエぜ！？」

「知った事か」

夜明と太陽はそれぞれ二人に挨拶（と言う名のコント）をするが、ユイとユウは会釈をするに留まった。

「さ、食いたい物を選べ。何でもいいぞ」

叔父からメニューを渡された二人は、メニューを見て一言、

「「メニューに統一感が無い」」

「うっせえ、ほっとけ」

夜明は二人の言を一蹴した。しかし二人がそう思うのも無理は無い。この喫茶店はシーフードとスイーツの二枚看板でプッシュしているのだ。

世界広しといえどこの組み合わせでやっている喫茶店はそう無いだろう。

そうなった理由だが、夜明の好みが魚介類で、太陽の趣味がお菓子作りだったため、『それならシーフードとスイーツの二枚看板でいいか』という、至極単純な足し算から来ていたりする。

これほど奇抜なメニューでありながら経営を続けている二人の技量は推して知るべし。

しばらくして全員分の注文が決まり、太陽が注文を聞きに来た。叔父は注文しつつ太陽の胸に視線を送り、注文を言い終えると、

「太陽ちゃんは相変わらず綺麗だねえ」

その言葉に何かしらの意図を感じ取った夜明が釘を刺す。

「おいおっさん。太陽に手エ出すなよ？ 死んでも知らねエからな」

「おうおう、お熱いこつて。安心しろよ、俺はまだ死にたくねえから。……ところでお二人さん、子供は作らねえのかい？」

ニヤニヤしつつ二人に質問する叔父。

叔父の意地の悪い質問に対し、夜明は明らかに狼狽しつつ、

「う、うつつ、ウルセエ！！ ガキの前で訊く事じゃねエだろ！？」

割と初心な夜明に対し、太陽は、

「私はいつでも構わないと言っているんだが……。なぜかこいつは初々しい恋人みたいに毎回毎回避妊避妊とうるさくてな。クレンコフさん、なんとか言っつけてやってくれないか？」

真顔でそんな事を聞いてきた。間違っても10代半ばの子供に聞かせるセリフとは思えないが、彼女の悩みはそれほどまでに深刻らしい。

ユイとユウはこの話を聞いて顔を赤くすると同時に、一つの結論を出していた。

（絶対かかあ天下だ）

しかし実際はどうなのかなど知る由の無い事である。

しばらくして料理が運ばれて来た。

叔父はパエリア、ユイとユウはシーフードパスタだ。

ユウは二人の料理と自分の料理を比べてボソリと言、

「エビが少ない」

「!？」

ユウの一言に夜明は肩をビクツとさせる。太陽はその一瞬を見逃さない。

「まさかお前、つまみ食いしたのか？」

「……まさか」



「目が泳いでいるぞ?」

「……これは生まれつきだ」

「……はあ、済まないなユウ。後でデザートをサービスするから許してやってくれ」

夫に非難の目を向けつつ、ユウに対して謝罪する太陽。だが、

「あれ? 本当だったの? ダメな大人だなあ夜明さんは」

わざとらしくカミングアウトするユウ。

その顔にはうすら笑いが浮かび、人によってはバカにしたような嘲笑に見える。

実際にはエビの量は他の二人と変わっていなかったのだが、夜明は味見の量が多すぎたのではないかと思ひ込み、見事に引っ掛かってしまったという訳だ。

数秒経って夜明は嵌められた事に気付き、顔を赤く染めていく。

「なっ!? このガキ、嵌めやがったな!？」

「……ぷっ、くくっ、ははははっ!」

「あっはははは!! ガキに騙されるなんていい気味だぜ!」

太陽と叔父は夜明の道化っぷりを見て笑い放題だ。  
ユイはおろか、他の客達までクスクス笑っている。

「まさか本当に騙せるとは思わなかったから……御免なさい」

「お前、それ絶対に謝る気無いよな？」

ユウは素直に謝るが、その顔からは未だに嘲笑がこぼれていた。なぜこんな事をしたのか、訊けば彼はこう答えただろう。

「イタズラが好きそうな人がイタズラされた時の顔を見てみたかった」

……と。策士の片鱗を見せた瞬間だった。

とんでもないガキだと夜明は思うが、しかし本当にとんでもないのは夜明の方だ。

両親が死んで以来、叔父の前でも笑う事が無かった二人を笑わせたのだから……。

食事を終え、三人はデザートをつついていた。太陽お手製のショートケーキだ。

ランチタイムとくに過ぎ、客の姿はまばらになってきている。

ユイは太陽と、ユウは夜明と楽しそうに話をしている。

二人に笑顔が戻り始めている。良い傾向だ。

叔父はそう思いつつ、コーヒーを啜りながらユイ達の話に耳を傾けると……

「太陽さん、どうやったらそんなに胸が大きくなるの？」

「ん？ そんなの簡単だ。好きな人に毎日揉んでもらえばいい」

「へえ〜。じゃあこれから毎日ユウに揉んでもらおうっと!」

「ブフウー!ー!! おいてめえら、なんて事話してんだ!？」

微笑ましい雰囲気を出しながら中身はとても生々しかった。  
あまりの衝撃にコーヒーを嘔く叔父だったが、

「む、女性の会話に割って入るなんて失礼だぞ」

「叔父さんのエッチ!」

「……そいつぁ……悪かった」

女性二人はどこまでもしたたかだった。

一方、ユウと夜明は至極真つ当な会話をしている。

「夜明さんには、叶えたい夢ってある？」

「叶えたい夢って言うか、貫きたい想いだな、俺のは。聞きたいのか？」

「うん」

「コイツと結婚する前は『視界に映った全ての人を守る』ってのが俺の想いだった」

「……だった？」

「今はちょっと変わってな、何があってもコイツを守るってのが今

の想いだ。

まあ、結婚式の時にコイツに無理やり誓わされたんだけどよ」

夜明は困った風に言っているが、満更でもない様子だ。

「ところでユウ、お前が叶えたい夢って、何だ？」

「その……バカにしないで聞いてくれる？」

「バカになんかするかよ。夢を持つのはガキの特権だぜ？」

アンタだってガキだろ、と、この場にいる人間は突っ込んだ事だろう。

実際に聞こえたわけではないので心の中で、という事になるだろうが。

「僕の夢は、『全ての人たちが幸せに暮らせる世界を作る』事だよ。正確にはだった、けど……」

「……へえ、いい夢じゃねエか。で、なんで過去形なんだ？」

「だって、僕達にはもう父さんと母さんが……いないから」

夜明は目で叔父に尋ねる。『何があったんだ』と。

「兄貴達は事故で死んだんだ」

叔父は苦い顔をして夜明に言った。夜明はそうか、と呟き、

「なあ、ユウ。人はいずれ死ぬ。俺も、おっさんも、お前も。お前

の両親はそれがちょっと早かったただけだ。お前が夢を諦める理由にはならねエ」

「……でも」

夜明の言葉に対し、ユウはまだ納得のいく顔を見せない。

「じゃあお前は、両親が生きていないと幸せになれるのか？ 違うだろ？」

「……………」

「俺は子供の頃孤児院で過ごしてた。両親がいなかったからな。アイツだって、俺が出会った時には両親がいなかった」

夜明はそう言いながらユウから顔を逸らす。視線の先には太陽の姿。少しして顔を戻し、ユウに語りかける。

「でもよ、俺とアイツは今幸せなんだ。世界中の誰より幸せだって思う。……幸せの形は一つじゃないんだぜ？」

「夜明さん……………」

「生きていればお前にも『幸せだ』って思える日がきつと来る。その時が来るまで、強く生きる」

「……うん。でも、僕だけが幸せになる訳にはいかないよ。だってそれじゃ、夢が叶えられないから」

「なら、強くなれば良いんじゃないか？ 皆の幸せを守るためによ」

「僕に……できるかな？」

「時間ならたつぷりあるだろ？ 努力すれば、きっと叶えられるさ」

「……うん。僕、頑張るよ。強くなって、皆の幸せを守れるようになる」

「上出来だ。頑張れよ、ユウ」

「うん！」

どうやら話は纏まったらしい。店内の時計の針は午後二時を指している。

いつまでもここに居座る訳にはいかない。

「さて、そろそろ帰るか」

叔父がユイとユウに切り出す。二人は頷き、席を立つ。

「おっと、もうそんな時間か。太陽、会計頼む」

「ああ。じゃあクレンコフさん、伝票を預かります」

太陽が伝票を預かった直後、叔父はポツリと夜明に言葉をこぼした。

「……今日はありがとな」

「何だよ改まって。気色悪いな」

「そう言いたい気分なんだ」

「……何かあれば力になるぜ？」

「なら、毎日こいつらの面倒を見てくれ」

「……そいつぁ勘弁してくれ」

夜明の引き攣った顔を見て、叔父は笑いながら会計に向かう。  
会計を済ませ店を出る直前、ユウが夜明に尋ねた。

「ねえ夜明さん、また来てもいい？」

「ヘッ、テメエみてエなガキ、こつちから願いさげぶしっ！？」

言い切る前に夜明の頭に衝撃が走り、鐘を撞いたような音が鳴り響いた。

夜明が振り返ると、そこにはフライパンを持って仁王立ちしている太陽の姿。

「大事なお客様になんて事を言っているんだお前は！」

「……でも」

「でもない！　そもそも客とトラブルを起こすのはいつもお前だろうが！　その度に客に謝ってきたのは私なんだぞ？　お前がそんな事言えた義理か！」

「……はい、仰る通りです」

太陽に怒鳴られ小さくなっていく夜明。

その図はまさしく怒鳴られる子供と叱る母親のそれだ。

（やっぱりガキだコイツ）

その場に居合わせた全員が揃いも揃って同じような感想を抱いたのは言っまでも無い。

「どうやら、本格的なお仕置きが必要なようだな」

「…………お仕置き？」

「今夜は寝かさないからな。覚悟しておけ」

それを聞いた夜明は顔を真っ青にしてい。普通なら男たちが血の涙を流して狂喜乱舞するようなセリフだが、今の夜明にとっては恐怖という感情しか湧き上がらないセリフらしい。

「あはは……………ほどほどにしてやれよ太陽ちゃん？　じゃあな夜明…………死ぬなよ？」

「そいつあ…………無理かもな」

「またのご来店、お待ちしております」

「「ごちそうさまでしたー」」

三人は楽しそうに店を出て行く。しかしユイとユウの顔には入店前のような暗さは無い。



その目には希望の光が、夢への情熱が宿っている。

「ねえユウ。今日は一緒にお風呂に入ろーよ!」

「ヤダ。僕はお風呂用の玩具じゃないよ?」

「むー、ユウのいけず。じゃあ胸揉んでよ」

「……僕を体<sup>てい</sup>のいい道具か何かと勘違いしてない?」

「してないよー。ユウが一番好きだから言ってるのに……」

「姉さん。それは社会的にダメな考え方だからね? 分かってるよね? 抱きついてないで返事してよ姉さん」

「聞こえない聞こえないーい」

「……はあ」

繰り返し言っが、その目には希望の光と、夢への情熱が宿っている……はずである。

店を閉めた後、夜明と太陽は店内の掃除をしながら語り合う。  
……常連が連れてきた、二人の子供の事を。

「なあ」

「何だ？」

「いい眼してたな。ユウは特に」

「昔のお前によく似ていた。あれはきつと将来大物になるな」

「……そうか。叶うといいな、あいつの夢」

「心配ならお前が鍛えてやったらどうだ？」

「……笑えないジョークだな」

「そうか？ 最近平和だったからボケてるんじゃないのか？」

「あいつなら大丈夫だ。しっかりしてそうだからな」

「お前みたいに楽観的でない分、しっかりと先を見通していそうだしな」

「……バカにしてないか？」

「何だ、自覚があるのか？」

太陽に切り返され、夜明はうつ、と言葉に詰まり、テーブルを拭く作業を中断する。

どうやら夜明にもそれなりの自覚はあったらしい。分が悪いと見た夜明は話を逸らした。

「ところで太陽。お仕置き是件だが、あれは性質たちの悪い」

「冗談だろ……とでも言いたいのだろうが、そうはいかんぞ」

「……………」

思考を先読みされ、夜明は冷たい汗が背筋を伝っていくのを感じた。

「いい機会だからな。一晩じっくりと矯正ちやうきやうしてやる。ありがたく思え」

「おい、ルビが違くないか？」

「ん？ 何を言っている。これで合っているぞ」

「……一応、念のために聞いておく。手加減は？」

「したら意味が無いだろう。最初から最後までクライマックスだ」

「……これで死んだら俺は世間の笑い物だぜ？」

「安心しろ。私とて鬼ではない。ほら、好きなだけ使え」

そう言って太陽は、得体の知れない液体の入った瓶をどっさりと力ウンターに置く。

「これだけあれば一晩軽く持つだろう？」

「……俺を体ていのいい道具か何かと勘違いしてないか？」

「そんな事は無い。私はお前を魂の底から愛している」

「嬉しいね。涙が出てくるよ」

そう言いつつも、夜明の顔は盛大に引き攣ひきつっていた……。

Shift EX-1 「特別番外編 姉弟を立ち直らせた、運命の出会い」

ユウ「サザンクロス様。本当に申し訳御座いませんでした」

HAL「ん？ なに空に向かって謝っているんだ？」

ユウ「……よくそんな平然としていられますね」

HAL「ちなみに夜明と太陽だが、原作より10歳くらい年取って、かつ結婚している。という設定だ」

ユウ「何を訳のわからない事を……」

HAL「あと、あの後夜明と太陽がした事だが……」

ユウ「そう！ あの二人に何言わせてるんですか！？」

明らかにアッチ方面としか思えませんよ！」

HAL「結局太陽は夜通しで『接客業のマナー』を夜明に叩き込んだらしい」

ユウ「夕暮さんが取り出したあの液体は？」

HAL「ただの栄養剤だ。……何を期待してたんだお前？」

ユウ「いえ……何でもありません」

ユイ「次回は本編更新予定だよー 楽しみに待っててねー」

H A L「感想等は随時募集中だ。書いてくれると嬉しいぞ。

あとサザンクロス様、これからも連載頑張ってください」

8 / 2 9 改稿しました。

Shift 2-1 「策士、動く（前編）」（前書き）

この話から三人称主体で行きます。でも結構難しい（汗）  
執筆が全然進んでません。読者様申し訳ありません。

あと余談ですが、まどか マギカ最終話まで見ました。  
とりあえず感想を。

「コレ見てたら自然と涙が出てきました」

いやホント、泣けるアニメですね。

＼まどか様マジ女神！／

と言う訳では非まどか教に入信し……ん？  
どうしたんだいシャル？ え……？ ちょっ……やめ……。

Shift 2-1 「策士、動く（前編）」

AM 5:30

ユウは昨日からあてがわれている自分のベッドの上で目を覚ました。河井さんが貧血（実際はそんな単純ではない）で倒れてから一晩が経ち、現在は朝の5時半。

あの後彼女はすぐに復活したが、夕食を食べると「今日はもう疲れた」と言ってさっさと寝てしまった。

しかし、精神的疲労はユウの方が遥かに大きい。

なにせ女子に強か……襲われそうになり、河井さんが寝た後に訪れた他の部屋の女子に挨拶と握手を繰り返し、アナハイムから送られてきたデータの確認まで行い、ベッドに倒れる様に寝たのは日付が変わってから。

これが一週間も続くものなら、確実に体を壊すだろう。

しかし、とりあえずは河井さんより早く起きる事ができて、ホッとするユウだった。

万が一寝過ごそうものなら、昨日のように襲われる可能性があるからだ。

それは男にとって嬉しい事ではあるが、今のユウにとっては恐ろしい事でしかない。

「……さっさと準備するか」

ユウが隣のベッドに目を向けると、まだ河井さんはぐっすりと寝ている。

まだ彼女の起床時間には早いようだ。



ユウは河井さんに配慮しつつ、登校準備を始める。  
カーテンは開けず、物音を極力立てないように着替えを始める。

ちなみにユウのパジャマ、動物の絵がたくさん描かれたものすごく可愛い”女子用”のパジャマである。

昨日着替えようとしてカバンを探してみたら、当然のようにコレしか入っておらず、小一時間迷った挙句、「着ないよりはマシか」と嫌々ながら袖を通したのだ。

制服、パジャマが女子用。下着も女物、カバンの中身がどうなっているのかなど想像するのは難しくない。

カバンの中には男物が全くとっていいほど入っていない。

ユウにとっては非常によろしくない状況だ。

（これじゃいろんな意味で精神がおかしくなりそうだよ……）

とりあえず一日も早く男物を揃えないと厳しい事になりそうだなと、ユウは深々とため息をついた。

A M 7 : 0 0

ユウと一夏は寮の廊下を歩いている。お互いのルームメイト、河井さんと箒も一緒だ。

これから朝食を食べに行くために食堂に向かっている。

「おはよう、ユウ。……顔色が良くないな。どうしたんだ？」

「おはようございます一夏。昨日はよく眠れなかったんですよ」

「む、それはいかな。今週末辺りに快眠グッズを買ってやろうか？」

「あ、篠ノ之さん、私も付き合うよ」

上から一夏、ユウ、箒、河井さんの順だ。ユウは苦笑しつつ、

（河井さん、貴女が僕を襲おうとしなければ十分寝れます）

……と心の中で突っ込んだ。決して言葉には出さない。  
沈黙は金。要らない事は喋らないのが一番だ。

一行は食堂に着き、それぞれ欲しい物を選んで取っていく。  
所謂バイキング料理で、和・洋・中、何でも一通り揃っている。

一通り取り終え、続いて空いている席を探す。

丁度4人掛けのテーブルが空いていたので、自然とそこに座った。

ユウの左には一夏、対面には河井さん、左斜め前には箒。

ちなみに朝食は全員和食。日本人の性……といった所だろうか。

食事を始める四人。周りには河井さんと箒をうらやましそうに見つめるギャラリーが集まり、ユウと一夏の一挙手一投足に熱い眼差しを向けている。

「……一夏、昨日あれだけ盛大に啖呵を切ったんです。まさか、勝算が無いという訳では無いですね？」

ユウはしょうゆを差し出しながら一夏にそう切り出す。

「サンキュ。……いや、あれは勢いというか、男の意地でだな……」

しょうゆを受け取り、納豆に掛けながらそう言う一夏。

「普通に戦ったら君は負けてミス・オルコットの奴隷になってしまいますよ？」

まあ、君にそういった嗜好があるなら口出しはしませんが」

ユウは一夏からしょうゆを返してもらいながら言い返す。

最近の女尊男卑の影響でそういった嗜好の持ち主が増えてきているらしい。

無論ユウにはそういった嗜好は一切無い。

「冗談じゃない。俺はそんなのゴメンだぜ？」

一夏は苦虫を噛み潰したかのような顔をする。

一夏にも隷属嗜好というものは無いらしい。

「なら、勝てるように死に物狂いで努力することですね」

「ならお前が教えてくれれば」

「一夏、僕にも都合という物があるんです。手伝えるなら喜んで首を縦に振っています」

「……そうか。悪かった」

ちなみにユウの都合だが、それは『一夏の特訓相手が箒になる事』だったりする。

あくまでユウはごく自然にそうなるように誘導するつもりらしい。

外野では、ユウと一夏のやり取りを見た女子たちがキャーキャーと騒ぎ合っている。

それに気づいたユウが聞き耳を立ててみると、「何も言わずにしょうゆを渡し合った!？」だの、「あの二人、心で繋がっているのね!」だの、「もしかしてこれが究極の夫婦愛!？」だの、既にユウと一夏は恋人同士から夫婦にランクアップしているらしい。  
結構腐女子の多いIS学園一年女子なのであった。

A M 11:00

現在三時間目、山田先生がISの基礎知識を教えている。

「というわけで、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。

また、生体機能も補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態に保ちます。

これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどが挙げられ

「

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか、体の中をいじられているみたいでちょっと怖いんですけども……」

クラスメイトの一人が不安げな面持ちで尋ねる。ユウに言わせれば、

「実際は目紛るしく変化する環境から体を守っているんです。

人の体は急激な環境の変化に追い付けません。平地から一気に山頂まで登った時や、水面から水底まで一気に潜水した時、体はその急激な変化に追いつけず、失調したりするでしょう？　高山病なんか

がいい例です。

元々ISは宇宙用に開発されていたのですから、地上から宇宙への環境の変化に十分に対応できるように作られているでしょう。宇宙という地上と全くかけ離れた場所で地上のように行動できる。それを考慮し、備えられたのが生体補助機能と言った所です」

おそらくこれが優等生の回答。だが山田先生は……

「そんなに難しく考える事はありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。

あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出るという事は無いわけです。

もちろん、自分に合ったサイズの物を選ばないと、型崩れしてしまいますが」

素直に説明すれば誤解されずに済むのに、とユウは思った。

しかもそれは女子校専用のネタ。IS学園は今年から共学（男子二名）なので、そのネタはいささか男子への配慮に欠けている、と評価せざるを得ない。

ユウは教科書に目を落とし、一夏は顔を赤くしている。

一夏と目が合った山田先生も顔を赤くしている。

「え、えつと、いや、その、お、織斑君と奈々瀬君はしていませんよね。

わ、分からないですよね、この例え。あは、あははは……」

山田先生の言葉に対し、ユウは、

「いえ、つい昨日したばかりです」

……なんて口に出して言う訳にはいかない。言えば変態扱いされるのは目に見えている。

むしろ、今この瞬間ユウが一番気になっているのは河井さんの態度だ。

昨日ユウの女装を見た河井さんがおかしいな反応をすれば、ユウの方が色々とマズくなる可能性があるからだ。

山田先生がまた説明を始めて、他の女子が彼氏彼女がどうこうとか尋ねているが、それよりも河井さんが暴発するかしないか、そればかり気になって仕方が無いユウであった。

しばらくして三時間目終了のチャイムが鳴った。

結局ユウは授業終了まで河井さんが気になって集中できなかった。しかも振り返っても彼女の様子は授業前と全く変わっていないかったというオチ。

この結果にユウは何とも言えない雰囲気のため息をつく。

そして一夏の方は、千冬さんの実体を女子にバラそうとしたので、突如現れた千冬さんから情報漏洩防止のために出席簿アタックを食らっていた。

千冬さんはそう言えばと一夏に、

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機が無い。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう  
だ」

「????」

唐突に言われたので一夏はさっぱり理解できていない。  
しかし、千冬さんの言葉の意味をしっかりと理解できている女子たちは驚愕している。

「せ、専用機！？ 一年の、しかもこの時期に！？」

「ああ、いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

女子の反応に未だ？マークを浮かべる一夏。  
見かねた千冬さんがため息混じりにつぶやく。

「教科書六ページ。音読しろ」

「え、えーと……」

長くなるので纏めて言わせてもらおうと、

1、ISの最も重要な部分であるコアは467個しか無い。

2、ISのコアは篠ノ之博士しか作る事ができず、  
当の篠ノ之博士はコア作る事を拒否している。

3、減る事はあっても増える事の無いコアは、  
世界各国に割り振られ研究されている。

本来ならば国や企業が認めた人間でなければ専用機を持つ事は出来ない。

ただし、世界でただ一人、男でありながらISを操縦できる織斑一夏。

彼は例外という事らしい。

「良かったじゃないですか一夏。これで君も467分の1になれますよ」

「ああ、そう言う事か。でも確か専用機って実力が無いと持てないんじゃない……」

「お前の場合は状況が状況だからな。データ収集を目的として専用機が用意される事になった。分かったか？」

「な、なんとなく……」

どうやら一夏の機体は原作通り到着が遅れるらしい。

そう感じ取ったユウは、計画通り、一夏と箒の特訓イベントの下地作りを進める事に決めた。

ちなみにこの後、篠ノ之博士と箒の関係について教室で一悶着あったのだが、特訓イベントに必要な事なのであえてスルーするユウであった。

P M     12:20

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

昼休みに入っすぐ、一夏の席にやってきたセシリアはそう言った。手を腰に当てるポーズが様になっているのは昨日と変わり無い。



「良かったじゃねえか。これでお前と対等にやり合えるぜ」

「……ふふっ、ふふふふふっ」

一夏の言葉を聞いたセシリアは口に手を当て嘲笑した。

「……何が可笑しい？」

一夏は彼女の意図を測りかねている。しかしユウは当然だろう、と思う。

一夏とセシリアでは経験の差が有り過ぎるのだ。

「まさか、専用機を手に入れたくらいでわたくしと対等に戦えると思っ  
ていらっしやいますの？」

「どういう事だ？」

「一夏、君はISなんてほとんど触った事が無いんでしょう？ 対して彼女は入学前から長くISに触れ、操縦している。彼女の方が一日の長、経験で勝っているんです。さすがに経験までは埋める事はできません。彼女のアドバンテージです」

「……あ」

ユウの言葉を聞いてハッとする一夏。

「たかが一週間程度の付け焼刃で勝てる程、わたくしは甘くなくてよ」

セシリアの言葉に一夏はぐう、と唸り、対照的にセシリアは勝ち誇った笑みを浮かべている。

（これじゃ一夏が惨め過ぎるな）

あまりの惨状に、見るに見かねたユウが一夏を援護する。

「……ミス・オルコット。余裕と油断をくれぐれも履き違えませぬよう。」

相手を見下してばかりいると足元を掬われますよ?。」

僕のようにね、とユウは最後に付け加える。  
セシリアは顔を不快そうに歪めながら、

「無論ですわ」

と言って何処かへと歩き去って行った。

Shift 2-1 「策士、動く（前編）」（後書き）

ユウ「そついえば僕の視点がメインとか言ってますでしたっけ？」

HAL「色々と試したいんだよ、初めてだから」

ユウ「更新頻度が少なくなってますが……」

HAL「やる事が多くて時間が割けないんだ」

ユウ「……そうですか」

HAL「でもせめて一週間に一話は更新したいな」

ユウ「頑張ってください」

ユイ「次は後編だよ みんな見てね」

お知らせ

2011/5/14

一部改稿。

8/29 改稿しました。

S h i f t   2 - 2   「策士、動く」（後編）」（前書き）

今回の話は難産でした。三人称難しい（汗）

皆さんはGW中何処かにお出かけになりましたか？  
自分は大学の課題があったので家籠りです。

今年は日光東照宮とか華厳の滝辺りが大穴場だとか言う報道が一週間前くらいに有りましたが、実際どうだったんでしょう？

……さて、課題やるか。

## Shift 2-2 「策士、動く（後編）」

「……さ、一夏、箒、一緒にお昼ご飯を食べに行きましょうか」

セシリアが立ち去った後、ユウは場の雰囲気を変えるため二人にそう提案した。

二人から反論の声は上がらない。

「あつ、あの！」

ユウ達が教室を出ようとすると、後ろから声が掛けられた。ユウが振り返ると河井さん以下数名の女子が立っている。

「私たちも一緒に食べて良いかな？」

河井さんがユウに質問する。

おそらく彼女が代表という訳では無く、面倒事を押しつけられたといった所だろうか。

ユウとしては特に断る理由が無いので、一夏と箒に同意を求める。

「……だ、そうです。二人とも構いませんか？」

「俺は別に構わないぜ」

「……………」

大勢で食べると楽しいよな、と言わんばかりに同意する一夏。しかし箒としては一夏を独占できない状況は非常に面白くない。箒は一夏をジト目で睨むが、ユウの目が、

（後で何とかします）

と言っているような気がしたので、

「……私も構わん」

そっぽを向きながらも仕方なく同意した。

P M 12:30

教室から食堂に移動し、現在は席に着いてにぎやかに食事をしている。

唯一人、箒だけは仏頂面だが。

「さつきは助かった。ありがとな」

一夏は食事を始めて開口一番、ユウにそう言った。  
さつきのセシリアとの口論の件だろう。

「感謝する気があるなら、彼女に勝てるよう努力して欲しいものです」

余計な御世話だと言わんばかりに、全くもって冷たい一言を返すユウ。

しかしこれは一夏のために思っただけだ。

「うぐっ……相変わらず容赦がねえな。どうして俺はけなされてば

かりなんだ?」

ユウの辛辣な一言にがっくりと頂垂れ、悩み始める一夏。ユウはやれやれ、とため息をつき、諭すように一夏に言った。

「一夏、君なら彼女に勝てるかもしれないから言ってるんです。可能性が無いならこんな事言いません」

そんなユウの一言に、周りの女子は「これってツンデレ!?!」といった感じの反応をしているが、間違ってもユウはツンデレでは無い。ただ単に一夏の事を弄んでいるだけである。

「そうかよ……。なあユウ、本当にISの事教えられないのか?」

縋りつくような目をして尋ねる一夏。それでもユウは動じない。

「こればかりは仕方ありません。諦めてください。それに……」

「それに?」

「僕以外にも適任者がいるじゃないですか」

「適任者って……まさか千冬姉とか言わないだろうな?」

「違いますよ」

適任者。それを聞いて一夏が最初に思い浮かんだのは自分の姉。目の前に居るだろうに、とユウは一夏の答えを苦笑しつつ否定し、筈は殺気の籠もった視線を一夏に向けている。

「あれ？ 違うのか？ じゃあ誰なんだ？」

箒の視線に全く気付かず、唸りながら考え込む一夏。  
それを見たユウは視線を箒に向け、一人の人物の名前を出す。

「箒なら一夏を正しく導けると思いますよ」

それを聞いた箒は一瞬肩をビクつかせるが、そしらぬふりをしてご飯を食べ続ける。しかし内心では、

（ユウ、よくやった！ お前は最高の友だ！）

友人の鶴の一言に狂喜乱舞していた。

一方、一夏は成程と頷き、とりあえず箒に尋ねてみた。

「他に頼れる人いないし……。箒、教えてくれるのか？」

「む……お、お前がどうしても、言うなら……教えてやってもいいぞ」

箒はそっぽを向きつつも、ちらちらと一夏を見てそう答える。

「そうか。じゃあ頼む」

箒の返答を肯定と受け取った一夏は、改めて箒に頼み込んだ。  
当然ながら箒としては断る理由が無い、というか断る訳にはいかない。

「し、仕方ないな。なら放課後、剣道場に来い」



「え？ でも俺はISの事を」

「いいから来い！」

「わ、分かった」

どうやら話は纏まったらしい。一夏はいまいち納得していないようだが、箒はルンルン気分で踊りだしそうな雰囲気だ。一部始終を見たユウはニコニコ顔だが、

（予定通り。これで一夏は箒が勝手に鍛えてくれるだろう）

その笑顔は100%善意という訳ではないようだ。その後も食事は続き、15分程経った頃、

「……さて、僕はそろそろ行きますね」

ユウがそう言って席を立った。

「もう行くのか？」

一人にするな、と言いたげな視線を向けながら一夏はユウに訊ねる。ユウは一夏の視線をスルーしつつ、

「ちょっと行く所がありますから。それじゃ皆さん、僕は先に失礼します」

女子たちに一礼し、ユウは食堂から姿を消した。

P M 4 : 0 0

放課後。ユウは現在情報処理室の前に来ている。

手には情報処理室の鍵。昼休みに山田先生から借り受けた物だ。

別に千冬さんから借りても良かったが、あの人は「軟弱者！」とか言いそうだったので止めた。

一夏が「昼休みどこ行ってたんだ」だの、「これからどこ行くんだ」だの、ユウを質問攻めにしようとしたが、幕に剣道場へと引き摺られる事になりあえなく失敗。

悠々とここに辿り着いた訳である。

「……何故だろう、言い様の無い不安を感じる。さつさと済ませよう」

鍵を開け、室内に入る。室内には数多くの情報端末が整然と並べられている。

ユウは入口に近い端末の前で止まり、端末を起動させる。

程なくして端末は起動し、ユウは椅子に腰かけ作業を開始する。

山田先生から借り受けたフラッシュメモリをスロットに差し込み、データを読み込む。

画面に映し出されたのは、試験官を相手に戦うセシリアの姿。

この姿を見て萌えるためにわざわざ借りた訳では決して無い。

戦場においては情報の有無が勝率を左右すると言って良い。

敵の情報を知っているのと知っていないのでは、知っていたほうが遥かに有利だ。

つまりはそう言う事。

ユウにとって、戦うという事は『戦闘する』だけではない。

己を含む味方の情報、敵の情報、戦場の情報。様々な情報を収集、処理し、緻密な戦術プランを構築していく。それも一つではなく、いくつも。それがユウのスタンス。

直接戦闘の前から既に戦いは始まっているのだ。これを一般的には情報戦と呼ぶ。

敵を知り、己を知れば百戦殆からずとはまさにこの事である。

一時間ほどセシリアの戦闘シーンを見て、ユウは片付けを始める。メモリを抜き、端末の電源を落とす。

情報処理室を出る直前、ふとユウは室内を見渡した。人の気配は無い。

「まさか……ね」

誰もいない事を確認し、ドアを閉めて施錠。そのまま去って行った。

施錠され、誰も居ないはずの情報処理室。その奥の机の下。  
そこに一人、気配を殺し、息を潜めて隠れていた者がいた。

「ふう、危なかった。まさか勘付かれるなんて、私もまだまだね」

潜伏者はユウが座っていた席に移動し、電源が落ちた黒いディスプレイを眺め、その顔に笑みを浮かべる。  
まるで新しい玩具おもちゃを手に入れた子供のような、無邪気な笑顔。

「奈々瀬ユウ……ね。ふふっ、面白そうなコじゃない」

そう言って潜伏者は予備の鍵を使い、情報処理室から立ち去って行った。

その手に一つのフラッシュメモリを持ちながら……。

Shift 2-2 「策士、動く（後編）」（後書き）

ユウ「最後に出てきた人がすつごく気になります」

HAL「気にするな。すぐに会える」

ユウ「そうですか。ところで僕の黒さ、何とかありませんかね？」

HAL「スーパーロボット系の熱血展開が好きなら別に構わないぞ」

ユウ「どっちみち最後はそうなるでしょうに」

HAL「次回からクラス代表決定戦に入る」

ユウ「いよいよ戦闘シーンですか？ また難産なんですね？」

HAL「詳しくは言えん。期待せずに待っていてくれとしか言えんな」

お知らせ

2011/5/14

一部改変。

8/29 改稿しました。

## Shift 2-3 「秘策」(前書き)

話の分量を見誤りましたorz

戦闘を期待していた読者の皆さま、本当に申し訳ありません。

あと、何時の間にかお気に入り登録数が100件になっていました。処女作であるにもかかわらずこれほど多くの読者の皆様に愛読して頂き、感謝の気持ちで一杯です。

更新頻度は作者の力量ゆえに低いですが、これからもこの作品を愛読して頂けると嬉しいです。

感想を頂けるともっと嬉しいです。

では、本編をお楽しみください。

## Shift 2・3 「秘策」

時間は嵐のように過ぎ、翌週の月曜日。セシリアと一夏の対決の日が来た。

昼休み、最早恒例となった一夏とユウの食事会。その席でユウは一夏に尋ねる。

「どうしたんですか一夏、喉に小骨が突っかったような顔をして」

「ユウ、先週言ったよな。箒なら俺を導いてくれるって。言っ  
たよな？」

箒の奴、ISの事について何も教えてくれないんだぜ？ どう  
いう事だ？」

ずずい、と顔を近づけ、一夏はユウを問い質す。

一夏の隣にいる箒は申し訳なさそうに顔を逸らしている。  
対するユウは涼しい顔で、

「僕は箒なら君を導くだろうとは言いましたが、ISの事を教えて  
くれるだろうとは一言も言ってません」

ユウの返答に一夏は呆然とし、ハッとしたと思ったら今度は疑惑の  
目を向けてきた。

「ユウ、まさか俺を騙したのか？」

一夏の視線にユウはやれやれ、と首を横に振り、

「騙すなんてとんでもない。じゃあ逆に聞きますけど、君はISに  
ついて説明された場合、正しくその意味を理解できますか？ P I パッシヴ・イナーシャル・  
キャンセラー

Cや武装の特性、対IS戦の戦術理論etc...」

「……すまん。俺が悪かった」

自分に非があれば素直に謝る。一夏はそういう男だ。

ユウは水を飲んで一息つき、再び話し始める。

「いくら知識を詰め込んだ所で、君が理解しなければ無いのと一緒に  
です。それに結局専用機が届きませんでしたから、実践も無理でし  
たしね。」

ついでに言えば、ISがいかに強力と言えど、扱うのは生身の人間  
です。君自身が強くなるというのは決して無駄ではないはず……」

「……まさかそこまで考えてくれたのか？」

「さあ？」

実際は筈と特訓させたかったただけだ、なんて決して言う訳にはい  
かない。

ユウはそれより、と話を切って、一夏に対しこう告げた。

「一夏、大事な話があります。この後屋上に来て下さい。二人きり  
で話したい」

「ああ、分かった」

『はあ！?!?!?!』



一夏は普通に返事を返したが、ある女子は顔を赤らめ、ある女子は鼻血を噴き、ある女子はカメラや集音機の準備に取り掛かるなど、食堂はしばらく騒然となった。

箒は魂が抜けたようにその場に呆然と座る始末。

原因の二人は結局どうしてこうなったのか知らぬまま食堂を後にしたのだった。

10分後、二人の姿は屋上にあつた。他に人影は無い。

扉の奥にはおびただしい数の女子生徒がいるのだが、当の二人は特に気にしていない。

「で、大事な話って何だ？」

「放課後のクラス代表決定戦の事です」

ユウがそう言い放った瞬間、扉の奥の気配が綺麗に消えた。

まあ、十代女子とはそういう生き物だ。

ユウは苦笑しつつ、声を小さくして一夏に語りかける。

「一夏、ミス・オルコットに負けたくは……ないですよね？」

「当たり前だ。負けて奴隷になるなんてまっぴらゴメンだぜ」

真剣な顔で答える一夏。悲痛と言っても良いだろう。

一夏の答えを聞いたユウは、一夏同様真剣な顔をして切り出した。

「なら、彼女との戦い方を教えます」

「なっ……あるのか!？」

ユウの一言に一夏は目を見開き、信じられないと言った表情で聞き返した。

ユウは頷き、小型端末を取り出して話を進める。

「ええ、見てください。これまで集めた彼女に関する情報です」

端末の画面にはセシリアと彼女のIS、ブルー・ティアーズの情報がびっしりと映し出されている。

「まさか……一週間ずっと集めてたのか？」

「そうです。幸い君のISの情報はまだ向こうに全く入っていませんから、情報という面では君の方が有利。経験は情報と戦術で覆しましょう」

「確かにこれはありがたいけど、俺はまだISなんてロクに触ってもないんだぜ？ 俺に戦術云々なんて……無理だ」

ユウの自信に満ちた言葉を聞いてなお、一夏は悔しそうな表情を浮かべる。

しかしユウは右手の人差し指を立て、一夏に告げた。

「問題ありません。君でも彼女に勝てるとおきを用意しました」

「……え!？」

一夏は有り得ないといった表情をユウに向けた。

「良いですか？ 一夏。」

ユウは一夏の方に顔を向け微笑み、口を一夏の耳元に近づけ、説明を始める。

それは天使の導きか、悪魔のささやきか。答えは神のみぞ知る……。

一通り説明をし終えたユウは、口を一夏の耳元から離れた。

ユウの目に映った一夏の顔は、説明前とほとんど変わらない、厳しいものであった。

「ユウ、いくらなんでもそこまで巧く行くとは……」

「信じる信じないは君の勝手です。勝手に戦って負けたとしても僕は君を咎めたりはしません。……犬扱いくらいはしますが」

ユウの手厳しい言葉に一夏はため息をつく。

「そんな脅しみたいな事言われたら信じるしかないじゃないか」

「お気に召して頂き恐悦至極に存じます」

ユウはそう言って執事のように恭しく一礼し、その姿を見た一夏はただただ苦笑するしかなかった。

再び時間は過ぎ去り、放課後。第三アリーナ・Aピットに一夏、箒、ユウの姿があった。

「……来ないな」

「……来ませんねえ」

「……………」

上から順に一夏、ユウ、箒の順だ。

何が来ないかと言うと、一夏の専用機が未だに来ないのだ。

「このまま専用機が来なかったら、不戦敗になるかな？」

「なっ……けしからん！！ 戦いもせずに敗北を認めるなど、男として恥ずかしくは無いのか！！」

「ぐおっ！？ よ……よせ箒……く、首が……」

「千冬さんの事です。何が何でもここに専用機を引っ張ってきますよ」

一夏が吐いた弱音に箒が激怒、そのまま一夏の胸倉を掴み、締め上げる。

ユウは二人のやり取りを特に気にすることなく、あくまでマイペースに振る舞っている。

「おっ、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

一夏が箒に意識を飛ばされそうになった瞬間、ピットに山田先生が現れた。

箒は山田先生が現れた瞬間、自分の行為を自覚し、頬を紅く染めて

神速の如き速さで手を引つ込めた。

箒から解放された一夏は酸素を求めてぜえぜえと喘いでいる。

ユウは何やら考え込んでいたが、駆け寄って来た山田先生に対して  
落ち着くよう言葉を掛ける。

「山田先生、とりあえず落ち着いて下さい。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す~~~~は~~~~、す~~~~は~~~~」

「そこで息を止めて」

「うっ」

「お腹に力を入れて」

「んっ」

「お腹に力を入れたまま浅く呼吸。はいっ、ひい、ひい、ふう~~~~」

「ひい、ひい、ふう~~~~」

「もういつか……」

「パァン!!」

唐突にユウの背後から出席簿が叩きつけられた。紛れも無く千冬である。

「~~~~~っ!!」

「目上の人間に何をさせている、馬鹿者」

ユウはあまりの痛みにうずくまる。威力を嫌という程熟知している一夏は顔を引き攣らせ、箒は顔を背け、当の山田先生は自分が何をしていたのかよく分かっていないようだった。

ユウは涙を流しながら振り向き、弁解を始める。

「何って、予行演習ですよ。いずれ必要に……」

パン！！

「山田先生にはまだ早い……あ。」

『……………』

千冬さんの一言に場の空気が凍る。

ユウは背後から負のオーラが漂うのを感じた。振り向くと、目の前には体を震わせて今にも泣き出しそうな山田先生が立っている。

「山田先生、その……」

「……………」

今度は千冬さんが山田先生に対して弁解しようとするが、山田先生の無言の圧力がそれを許さない。

「女性を泣かせるなんて、織斑先生は最低ですね」

ユウの非難の声に対し、千冬はユウを睨みつけた。その殺気たるや、

軽く百回は殺せるのではないかという程のものだ。

「元はと言えばお前のせいだろう。それより時間が無い、早く何とかしろ」

「はいはい、分かりましたよ」

ユウはあくまで涼しい顔で千冬要求に応える。  
おもむろに山田先生に近づき、耳元で囁いた。

「山田先生、後日良く効くと噂の恋愛成就のお守りを差し上げますから、どうか気を落とさないで下さい」

「!？ それ、本当ですか!？」

山田先生は目を光らせながらユウの両肩をがっしりと掴む。

ユウは苦笑しながら何度も頷き、山田先生を引き剥がしながら言った。

「それよりも今は一夏に伝えなければならぬ事があるんじゃないんですか？」

ユウの一言に山田先生はハツとして、慌てて一夏に告げる。

「そそそ、そうでした！ 織斑君、専用機が届きました！」

山田先生の声と共に、ピットの搬入口が重厚な音を立てながらゆっくりと開いていく。

扉の奥に、一機の白いISが鎮座している。空白のような純白の中に感じられる圧倒的な存在感は、そこらの専用機とは比べ物になら

ない。

「これが織斑君の専用IS、『白式』です!」

「びゃく……しき……、これが俺のIS……」

「織斑、体を動かせ。すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマツトとフィッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。分かったな?」

一夏は山田先生から聞かされたISの名を反芻し、感慨深げに白式を見つめるが、千冬さんはお構いなしに一夏を急かす。

一夏は千冬さんの言葉に頷き、白式に触れた。

「背中を預けるように、ああそくだ。座る感じでいい。あとはシステムが最適化する」

一夏は千冬さんに言われたとおり、白式に体を預ける。すると白式の装甲が一夏の体を包んでいき、装甲が合わさり閉じていく。20秒程で全工程が終了し、一夏は感触を確かめるようにゆっくりと体を動かしていく。

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか?」

「大丈夫、千冬姉。いける。……」

一夏は千冬さんの問いに答え、その後顔も向けずに箒の名を読んだ。ハイパーセンサーによって360度全方位が見えているからこそその芸当だ。



「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

箒は一夏の言葉に吃驚しながらも、すぐに表情を引き締めてそう告げた。

一夏は箒の言葉に首肯で応える。

「……ユウ」

「僕から言う事は何もありません。好きなように戦うと良い」

「俺はお前を信じる。白式こいつと一緒にならきつと勝てる」

「過信と確信は全くの別物ですよ」

「分かってる。じゃ、行ってくる」

一夏はユウの指摘に苦笑しながら応え、ピット・ゲートに進み始める。

ゲートが解放され、一夏は飛び立つ。戦いの空へ

Shift 2 - 3 「秘策」(後書き)

ユウ「お気に入り登録数が100件になったって聞いたんですけど、冗談ですよな？」

HAL「いや、確かに100件になっていたぞ」

ユウ「おめでとございます」

HAL「なん……だと？」

ユウ「？ 何か？」

HAL「お前がそんな事言う方が信じられない」

ユウ「失礼な。素直に祝って何が悪いんですか？」

HAL「辛辣がお前のモットーではないか」

ユウ「ほう……そこまで言うなら遠慮は要りませんね？」

HAL「俺が悪かった(土下座)」

ユウ「まったく……人の厚意は素直に受け取るものですよ」

HAL「そうだな。読者の皆様にも御礼をしなければな」

ユウ「ならさっさと次の話を書いて下さい。それが一番の御礼です」

HAL「やっぱりお前は辛辣だ」

ユウ「次回から戦闘開始です。さあ……」

ユイ「さあ、一夏はセシリアに勝てるのか！？ 乞うご期待！」

ユウ「姉さん！？」

8 / 29 改稿しました。

Shift 2-4 「一夏vsセシリア！ クラス代表決定戦開始！」（前書

皆さん大好き！ アツアツの戦闘シーンが始まるよ！

プロローグ編以来の戦闘シーン。やっぱりISは戦闘シーン。  
原作と違って一夏がやや強いです。

一応キャラ崩壊に注意して下さい。多分それほどもないと思いますが。

あと、お気に入り登録数100件突破記念の特別企画は、最近忙しいのでやらない方向性でいきます。

期待して下さった読者の皆さま、申し訳ありませんが200件突破まで……

コウ「そんなに行くとは思えませんがねえ」

……じゃあ150件で。

コウ「今ハードル落しましたね？」

本編をお楽しみください。

Shift 2-4 「一夏vsセシリア！ クラス代表決定戦開始！」

アリーナ内には既にセシリアが待機していた。

彼女が操縦するISは鮮やかな青色で、その外見は特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さが感じられる。

一夏は、白式から送られてくる情報とユウが授けた情報の再確認を行う。

戦闘待機状態のISを確認。操縦者セシリア・オルコット。

ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊装備有り

ディスプレイに表示される情報は、ユウから貰った物と全く同じだった。

（アイツ、どうやって情報集めたんだ？）

「あら、逃げずに来ましたのね」

「……………」

セシリアは腰に左手を当て言い放つ。彼女の表情からは自信や余裕といった感情が読み取れる。

しかし、一夏の関心は別の所にあった。

彼の瞳に映るのは、セシリアが左手に持つ、二メートルを超す長大な銃器 データによると、六七口径特殊レーザーライフル《スターライトmk.？》。

一夏の脳裏にユウの言葉が再生される。

「ブルー・ティアーズの主兵装であるライフルは貫通力がありますから、絶対に当たらないようにしてください。当たり所が悪ければ最悪絶対防御が発動してしまいますから」

アリーナ・ステージの直径は200メートルで、発射から目標到達までの予測時間は0.4秒。

既に試合開始のブザーは鳴っており、不意打ちを仕掛けてくる可能性は十分にある。

「最後のチャンスをおげますわ」

セシリアが左手を人差し指を立てた状態で一夏に向けながらそう提案する。

右手のライフルの銃口は未だに下がったままだ。

「チャンスって？」

一夏はライフルから気を逸らさずに、セシリアの言葉に応える。

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿をさらしたくなければ、今ここで謝ると言つのなら、許してあげない事もなくつてよ」

警戒、敵IS操縦者が射撃用スコープ展開。ライフルのセーフティロックの解除を確認。

一夏はISのアラートを冷静に受け止めつつ、ユウの策を再確認する。

「戦闘開始直前に彼女を怒らせるように挑発してください。怒りは集中力の低下を招き、集中力の低下は射撃精度に響きます。多少は攻撃の激しさが増えますが、命中精度が落ちれば回避は容易い。なに、ああいった輩は適当にあしらえば勝手に燃え上がってくれますよ」

（このタイミングだな。気は進まないが、勝つためだ……）

「なあ、イギリスには騎士道ってあったよな？」

「？ ええ、それがどうかないまして？」

「なら失望したぜ。決闘ってのは真剣勝負だ。相手をバカにするなんて論外。そんな事騎士道でも武士道でも基本だ。つまりお前は決闘だの何だの吹っ掛けておきながら、その実決闘のけの字も知らないお嬢様だったって訳だ。失望せずにいられるかよ」

「ッ!？」

「お前のそれはチャンスじゃない。決闘相手に対する侮辱だ。お前なんかと決闘なんてできるか。さっさと祖国くにに帰って紅茶でも飲んでろ」

一夏の罵倒を受けセシリアはわなわなと震えだす。どうやら効果は抜群だったらしい。

「……わたくしの厚意を踏みにじるとは」

警告！ 敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「泣いて縋り付いても許しませんわ!」

ライフルの銃口が瞬時に一夏に向き、先端を輝かせる。

(来る!)

直後、耳をつんざくような独特な音と同時に、一筋の閃光が目標へ駆け抜ける。

「くっ!」

一夏はスラスターを全力で噴かせ、閃光をかわす。

「かわした!? 偶然ですわ!」

セシリアは顔を不快に歪め、二射目、三射目と次々一夏に放つ。だがしかし、一発も一夏に当たるところか、かすりもしない。

(バカな!? わたくしは悪夢でも見ていますの!?)

セシリアの脳内は怒りと驚愕で乱れに乱れ、完全に冷静さを欠いていた。

一方、一夏はセシリアの射撃をかわす事で、集中力と冷静さをさらに増していた。



有り得ない。一夏はISを操縦した事なんてほとんど無いはず。

それがなぜ、代表候補生の射撃を避けていられるのか。

周りを見ると、山田先生は啞然とした表情で見入り、織斑先生は嬉しいですオーラをこれでもかと周囲にバラ撒いている。

唯一、ユウだけは特にこれといった反応を示していない。まるでこれが当然と言わんばかりに。

「ユウ、なぜ一夏は攻撃をかわしていられるんだ？」

ユウなら答える。そんな気がしたので尋ねてみた。

「ミス・オルコットが本調子ではないからですよ」

答えはあっさり返ってきた。しかし本調子ではないとはどういう事だろうか。

「彼女は代表候補生だぞ？ そんな都合良く失調するものなのか？」

私の問いに、ユウは行動で答えを示す。ユウはディスプレイの、ある場所をズームさせた。

ディスプレイに映し出されたのはセシリア・オルコットの顔だった。

「？ どういう事だ？」

「彼女は今、どんな顔をしていますか？」

ユウに言われるまま、セシリアの顔を凝視する。彼女は不快そうに眉を寄せていた。

この表情から読み取れる感情、それは……

「怒りと……驚き？」

「そうです。彼女は正直だ。故に感情が顔に出てしまう。彼女は今、怒りと驚愕で混乱の極致にいるんでしょうね」

ユウはリアルタイムで彼女の思考を説明する。まるで初めからこうなる事が分かっていたかのように。

私の脳裏に戦闘開始直前の光景が再生される。そして気付いた。

「まさか、あの罵倒はお前の指示か？」

「これほど上手くいくとは思ってませんでしたけどね」

私は思った。「この男を敵に回したら絶対に負ける」と。

ディスプレイを戻し、戦況を見る。どうやら一夏はまだ被弾していないようだ。

なぜだろう。一夏が負ける所を想像することができない。

「箒、君が祈っていれば一夏は絶対に勝てますよ」

ユウは私にそう言って、踵を返しピットを出ていくとする。

「待て！ どこに行く気だ？」

「次の対戦相手を祝福するつもりはありませんから」

ユウが振り返って言った言葉に、私は自分の耳を疑った。次の対戦相手だと？

まさか信じているのか？ 一夏が勝つ事を。

そう声に出して訊く事ができず、私はただ、ユウを見送ることしか

できなかった。

## Interlude out

一夏はセシリアの攻撃を避ける最中、ふと自分が武器を取り出していない事に気付いた。

(こつちも武器を出さないと……)

「武器を取り出すなら必ず近接武器を取り出してください。挑発は怠り無きよう。ただし攻撃はしない事。一撃を入れるチャンスは必ずやってきます。それまではとにかく回避に集中し、被ダメージを減らす事」

ユウの言葉を思い出し、武装欄を開く一夏。

しかし、欄を見た一夏の思考が一瞬止まる。

当然だろう。何せ白式に搭載されている武装は近接ブレード一本しか無かったのだから。

「なんつー偶然だよ……」

一夏は呆れながらも近接ブレードを呼び出し、展開する。  
すぐさま右手に光の粒子が形を成し、片刃のブレードになった。

「中距離射撃型のわたくしに近距離格闘装備で挑もうだなんて……  
笑止ですわ!」

「そのセリフは俺に一発でも当ててから言っただな!」

一夏に上手く返され、セシリアは悔しそうに齒ぎしりする。  
……が、すぐにその顔が笑みへと変わる。

「ならば、とつておきを使わせていただきますわ」

セシリアがそういった瞬間、背部のフィン・アーマーが分離し、直線機動で一夏へと向かう。

「行きなさい、『ブルー・ティアーズ』！」

セシリアの命を受けたブルー・ティアーズ（以下ビット）の先端に光が宿り、次の瞬間、B Tレーザーが一夏目掛けて打ちだされた。

「ッ！？ くそっ！」

一夏はビットから次々に放たれるレーザーを死に物狂いでかわしていく。

だが、操縦経験の少ない一夏では技量的に全てを捌く事は不可能。かわしきれなかったレーザーが命中し、シールドエネルギーを削っていく。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲<sup>ワルツ</sup>で！」

セシリアが左手をタクトのように振るう。それに合わせてビットの射撃が一夏を襲う。

一夏は射撃をかわそうとするが、やはり被弾は免れない。しかし、一夏は冷静だった。

（やっぱり、ユウの言った通りだ）

「ブルー・ティアーズ……ビットの攻撃は必ず君の反応が一番遅い所から来ます。ああいった武器は死角から狙うのが定石なので当然と言えば当然なんですが」

タネが割れた以上、時間を掛けるわけにはいかない。いくらビットの攻撃が読めていても全て回避する技量はない。速攻で一撃を与えなければ一方的にやられる。

一夏はビットの攻撃を回避しつつセシリアを見やる。彼女は余裕の笑みを浮かべ、その場に佇んでいる。素人目に見ても隙だらけだ。

（やるなら今しかない！）

回避に専念していた一夏が、突如機体を翻しセシリアに突撃する。

「なっ！？」

あまりにも突然の事に、セシリアは反応できなかった。

慌ててビットを引き戻すが間に合わない。言うまでも無く反応の遅れが致命的だった。

「隙だらけだぜ！」

「まだですわ！」

セシリアはライフルを構え、一夏に向けて撃とうとするが、

「遅い！」

一夏はセシリアの懷に飛び込むと、ブレードでライフルを弾く。  
次の瞬間、弾かれたライフルの銃口からレーザーがあらぬ方向へ飛んでいった。

一夏は勢いのままブレードを振りかぶり、

「ここは、俺の距離だ……！」

袈裟切りに振り下ろした。

和花「す、すごい……織斑君がオルコットさんと対等に戦ってる」

HAL「しかし一夏の戦闘技術は原作と全く変わっていないぞ」

ユウ「僕のアドバイスのおかげですね」

HAL「ブルー・ティアーズの情報、どこから仕入れたんだ？

学園のデータベースじゃ十分じゃなかっただろ」

ユイ「そこは私がちょっとハッキングして……」

HAL「お前か……」

ユウ「前半は一夏の優勢でしたが、はたして後半も上手く行くんでしょうか」

HAL「さあな」

和花「次回もお楽しみに！」

8 / 29 改稿しました。

Shift 2・5 「狙撃手の本気、目覚める白、決闘の行方」(前書き)

先週は忙しくて更新できませんでした。

楽しみに待っていた読者の皆さま、申し訳御座いませんでした。

別にアサシンクリード？が楽しくて徹夜で進めていたからとか、そんなやましい理由なんて物は一つもありません。

ユウ「それで執筆を怠ったと、そういう事ですか」

……一週間くらい更新しなくなっていていいじゃない。不定期連載だもの。

ユウ「開き直るのはやめなさい」

本編をお楽しみください。

ユウ「……はあ」



## Shift 2-5 「狙撃手の本気、目覚める白、決闘の行方」

一夏は両手に手応えを感じた。堅い物に刃が食い込み、断ち切っていく手応えを。

感触を堪能すること無く、ブレードを一気に振り下ろす。

「はあああああ！！！」

「きゃあっ！」

斬撃の衝撃でセシリアが吹き飛び、その後、一瞬の静寂がアリーナを包み込んだ。

セシリアはゆっくりと、緩慢な動きで体勢を立て直す。

そして自身の左腕を見て……固まった。

左腕を覆う装甲に傷が入っている。紛れもなく一夏に付けられたものだ。

「切ら、れた……？ このわたくしが？ 有り得ない、有り得ないですわ」

セシリアがぶつぶつと呟く。ハイパーセンサーによって一夏もその呟きの内容を知ることができる。

事実を受け入れたくない、認めない、そんな内容だった。

「いい加減認めろよ。その傷はお前の油断や驕りが生んだ物だ。俺を侮っていたお前の落ち度だ。これが本物の決闘だったら、お前は死んでるかもしれないぜ？」

一夏の言葉にセシリアは何の反応も返さない。

怪訝に思つ一夏だったが、セシリアの顔を見て息を呑んだ。

真一文字に鋭く結ばれた口が、怒りではない別のナニ力を灯した目が、そこにあつた。

「わたくしが敵を、ましてや殿方を懷に許すとは……一生の不覚」

今までとは全く違うプレッシャーを感じ、一夏は全身から嫌な汗が噴き出るような錯覚を覚えた。

「……ようやく本気になつたつてワケか」

「最早容赦は無用。全力で貴方を……ハチの巣にしますわ!」

「!?!」

セシリアが瞬時にライフルを構え、引き金を引く。回避さえ許されない、完璧な早撃ち。

今までの雑さを感じさせない正確な一撃は、一夏の左肩を撃ち抜いた。

「ぐあつ!?!」

撃ち抜かれた左肩の装甲が吹き飛び、衝撃で一夏の体がよろけた。絶対防御は発動しない。白式は問題無いと判断したのだろう。

（ヤバイ。正確さはともかく、なんつー速さだ。これがあいつの本気かよ）

「行きなさい! 貴方達の獲物は……あれですわ!?!」

セシリアは続けざまにビットを繰り出す。

一夏を見据えるその目はまさしく狩人。ビットは彼女の猟犬といったところか。

だが一夏とてただ食われる訳にはいかない。

「それはもう効かねえよ！」

一夏は後ろを振り返り、回転の勢いでブレードを横に薙いだ。

ブレードの軌道にビットが吸い込まれ、切断、爆散した。一機撃墜。

「!？」

セシリアは驚愕に目を見開いた。

「その武器の特性はもう分かってるんだ。そんな子犬で俺を潰せると思うなよ？」

## Interlude 織斑千冬

「はああ……すごいですねえ、織斑君」

リアルタイムモニターを見ていた山田先生がため息混じりに呟く。

頬が若干紅潮し、目がキラキラと輝いて見える様な気がするが、私の気のせいだろう。

それよりも一夏だ。とてもISの起動が二回目とは思えない。

最初はボロボロにやられるだろうと思っていた私だが、これは嬉しい誤算だ。

素直に認めたくはないが。

「ふん、あいつは私の弟だ。これくらい当然だろう」

「えっ!？」

私の言葉に山田先生は、驚いたように振り返り、私の顔を見つめてきた。

そして、意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「どうした？」

「織斑先生、本当は嬉しいんですね。口元がニヤけてますよ?」

「……なっ!？ 何を言っている! そんな事はない! 断じて無い!」

すぐさま否定して、顔を山田先生から背ける。

顔が熱を帯びるのが分かる。今、私の顔は赤くなっているのだろう。

「あー、照れてるんですかー? 照れてるんですねー?」

からかわれているのか……面白くないな。

「……………」

ぎりりりりりつ。

私は山田先生にヘッドロックを掛けた。

「いたたたたたっ!」

「私はからかわれるのが嫌いだ」

「はっ、はいっ！ わかりました！ わかりましたから、離しあうっっっ！」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ山田先生を放置し、私はモニターを見つめる。  
……勝てよ、一夏。

## Interlude out

「忌々しい、早く墜ちなさい！」

セシリアは苛立ちをぶつけるようにビットに命令を下す。

「見えてんだよ！」

彼女がビットに命令を下すと同時に、一夏はセシリアに突撃した。ビットが一夏を取り囲むように動き、レーザーを放とうとする。

一夏は回転しながらブレードを薙ぎ、上方のビットを切断する。二機目撃墜。

残り二機のビットからレーザーが放たれ直撃するが、構わずに突撃する。

セシリアは焦ってビットを呼び戻すが、

「遅いぜ！ もらった！」

一夏は振りかぶったブレードを振り下ろし右側のビットを切断。三機目撃墜。

その勢いのまま、回転蹴りを繰り出し最後のビットを叩き壊す。四機目撃墜。

これで彼女を守る物は無くなった。ここまで接近すればライフルも使い物にはならない。

今なら確実に一撃が入る。その一撃で勝てる。だが一夏はこれで終わると思えなかった。

ユウの言葉が脳裏をよぎる。

「ビットは四機ではなく六機あります。見た目に騙されないようにして下さい。おそらく、四機のビットが撃墜された後、奥の手として使ってくるでしょうね」

ユウの言葉通り、セシリアは腰部のスカート状のアーマーにある突起を外し、

「わたくしが二度も攻撃を許すと思って？」

一夏に向けて突撃させた。

五機目、六機目のビットは射撃型ではなく、『<sup>ミサイル</sup>弾道型』だ。このタイミングでは回避は間に合わない。

「!? しまつ」

爆音と閃光が二人を包み、遅れて爆発が二人を襲った。

AビットとBビットを繋ぐ通路。そこをユウは歩いていた。

先程聞こえてきた爆音からセシリアが弾道型ビットを使ったのだろ  
うと推測し、

「閉幕は近い……か。一夏、君の勝利は僕が保障しよう。だから  
」

全力で戦え。そう言って通路の奥に消えていった。

一方、Aピットでは、

「一夏っ……！」

モニターを見つめていた筈が、思わず声をあげた。

いくらISは安全性が高いからと言って、至近距離で爆発に巻き込  
まればひとたまりもない。

千冬も山田先生もモニターを注視している。

「ふん」

黒煙が晴れた時、千冬は鼻を鳴らした。しかし顔には安堵の色が窺  
える。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

「はあ、はあ……至近距離での爆発は心臓に悪いですね」

セシリアは爆発の直前、スラスターを後ろに噴かせて爆発の衝撃を和らげていた。

黒煙からいち早く脱出し、未だ漂い続ける黒煙を注視する。

「あれを受けてタダで済むとはおもえ……ッ!？」

黒煙が晴れた時、彼女は信じられない物を見るような目で空中に佇む敵を見た。

そこにあるのは純白の機体。だが、見た目は先程のそれとは全くの別物。

ダメージがリフレッシュされた装甲は、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的な、どこか中世の鎧を思わせるデザインへと変わっている。

この現象について、彼女は一つしか思い当らなかった。

「まさか……ファースト・シフト一次移行!？」

フォーマット フィットテイング  
一夏は初期化と最適化が終了した旨をディスプレイで確認すると、まるつきり別物に変わった機体を見て色々と納得していた。

（ユウの奴、最初は時間稼げってしつこく言ってたけど、こういう事か）

そして、劇的に変わったであろう武器 近接特化ブレード・《ゆきひらにがた雪片式型》を見て、一夏は薄く笑みを浮かべた。

かつて姉が振るい、自らをIS操縦者中最強の地位へと押し上げた、自分が知る限り最強の武器、雪片。

その名を冠する武器が自分の手の中にある。今の想いを声に出さずにはいられない。



「俺は世界で最高の姉さんを持つたよ」

一夏は誓う。この力で、家族を守ろうと。

（もう、守られるだけの関係は終わりにしよう。今度は　　）

「俺も、俺の家族を守る」

「……は？　貴方、何を言って　　」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るさ！」

一夏の独り言にセシリアは困惑する。一夏は苦笑し、雪片を構えなおした。

元世界最強の弟、それが不出来じゃ格好が付かない。いや、

「というか、逆に笑われるだろ」

「だからさっきから何の話を……ああもう、面倒ですわ！」

セシリアは弾道型ビットを再装填。再び一夏目掛けて撃ち出した。

一夏は慌てず、雪片に一瞬だけ視線を送り、再びビットを見据える。

（コイツの使い方ならもう分かってる。行ける！）

ガギン　　！

一夏は直感のまま、雪片を振り抜く。その直後、両断されたビットは慣性のまま一夏の横を通り過ぎ、爆発した。

一夏はその余波を背中で感じるよりも早く、セシリアに突撃を仕掛

ける。

「うおおおおー!!!」

## Interlude セシリア・オルコット

来る。白き剣士が、淡い光を纏った刀を構えて。

その姿は雄々しく、気高く、そして美しさすら感じさせる。

ビットを全て破壊され、ライフルはその長大さ故にこの間合いでは役立たず。

唯一の近接武器は展開が間に合わない。

私を守る僕達<sup>しもへ</sup>は全て蹴散らされてしまった。

回避はできるだろうが、しても無駄に試合時間を長引かせるだけだろう。

剣士との距離が縮まっていく。もう1mも無い。

目が合った。強い意志が宿った、綺麗な瞳<sup>め</sup>をしている。

ふと、両親の姿が脳裏をよぎった。

父は母の顔色を窺うばかりの情けない、弱い人だった。

ISが発表されてからは、また一段と弱々しくなった。

こんな情けない男とは絶対に結婚しないと固く誓った。

母は女尊男卑社会になる前からいくつもの会社を経営し、成功を収めていた。

厳しい人だったが、憧れの人だった。

過去形なのは、二人は三年前に、事故で他界してしまったからだ。

二人がいなくなってから、私は毎日を生きるのに必死だった。

金の亡者たちから身を守るために、あらゆる勉強をした。

ISの適性テストでA+を出してからは国から国籍保持のため、様々な好条件が出された。

両親の遺産を守るため、私は即断した。

そして、稼働データと戦闘経験値を得るために日本を訪れ、そして

出会ってしまった。強い瞳をした、強い男性に。

酷くゆつくりと、スロー再生で下段に構えられた刀が振り上げられる。

さっきまでの怒りは無い。むしろ清々しい。

これほど強い相手に負けるのならば、何も言う事は無い。

今まで張っていた意地がどうでも良くなった。

今まで心を守ってきたプライドが氷解した瞬間、

## ドクン

不意に、心臓の高鳴りを感じた。何か熱く、切ない物が込み上げて来るような感じがする。

ナニ力に取り憑かれたかのように、剣士から目を離す事ができない。それは否応なく心を縛りつける呪縛の鎖。私を締めつけていく甘美な鎖。

私は理解してしまった。これから先、この男から一生逃れる事ができないことを。

ならば認めてしまおう。私は声を出さず、口を動かすだけで言った。

私の、負けですわ

それは、心の殻を完膚なきまでに破壊する服従の言葉

I n t e r l u d e   o u t

試合終了のブザーが、アリーナ内に鳴り響いた。

『試合終了。勝者      織斑一夏』

Shift 2・5 「狙撃手の本気、目覚める白、決闘の行方」(後書き)

HAL「一夏が勝ったか……」

ユウ「セシリアは一夏に惚れたようですね。良かった良かった」

HAL「今更だけどお前ハーレム作らないのか？」

ユウ「僕には心に決めた人が居るんです。それ以外は要りません」

HAL「殊勝な事で」

ユウ「IS学園は恋愛フラグの宝庫ですから、避けるのが難しいんですよ」

HAL「それで一夏になすりつけるのか。それは友達としてどうよ？」

ユウ「一夏が幸せになるんです。良い事です」

HAL「あつそ。ところで次はお前と一夏の勝負だな」

ユウ「負ける要素など微塵もありません」

HAL「油断してたらやられるぞ？」

ユウ「これは油断ではありません。余裕です」

HAL「そういえばお前はそういう奴だったな」

ユウ「次回もお楽しみに！」

8 / 29 改稿しました。

## PV10万突破記念企画（前書き）

PVが10万を突破しました〜！（ドンドンパフパフ〜！）

今週は本編の更新はありません（オイ

## PV10万突破記念企画

HAL「ユウ！ PVが10万を突破したぞ！」

ユウ「えっ！？ そうなんですか？ おめでとうございます」

HAL「遂にここまで来たか……長かった」

ユウ「地震とかあつて大変でしたね」

HAL「今日まで暖かく見守ってくださった読者の皆様、本当にありがとうございます」

ユウ「礼ならいくらでも出来ます。もっと他に何か無いんですか？」

HAL「あるぞ」

ユウ「おお！ で、何をするんですか？」

HAL「読者の皆様に参加できる企画を考えた。

名付けて『ウルキユーレカスタムプロジェクト』！」

ユウ「ほう……で、どんな企画なんですか？」

HAL「名前の通り、読者の皆様にオリジナルの第二世代型IS、

ウルキユーレを自分色に染めてもらうプロジェクトだ」

ユウ「なかなか面白そうな企画ですね。で、そのカスタム案をどうするんですか？」



HAL「外伝の話で使わせて頂く！」

ユウ「それは投稿し甲斐がありますね」

HAL「では早速、投稿規定を発表する」

ユウ「規定違反にならないように気を付けて下さいね」

ワルキューレカスタムプロジェクト

受付期間 7月2日～切

投稿規定

指揮官機、または格闘、射撃、戦闘支援のいずれかに特化した、オリジナルの第二世代型IS『ワルキューレ』のカスタム機を募集する。

なお、ワルキューレについては『オリジナルキャラ及びオリジナルIS設定』を参考にする事。

何に特化した機体なのかを明記する事。

明記しない場合は作者が勝手に判断して使う場合があるので気を付ける事。

武装案オンリーでも可。ただしどのタイプの機体に取り付けるかを明記する事。

明記しない場合は作者が（以下略

簡単にでいいので、機体説明や武装の説明を入れる事。

入れない場合は作者が（以下略

機体名称には「ワルキューレ」を入れる事。

ワルキューレさえ入っていれば特に指定はしない。

機体性能、及び武器性能がチートの域に入っていると考えられる場合、

作者が勝手に性能を制限する場合があるので気を付ける事。

単機で何でもこなせる機体にしない事。

所謂「ぼくのかんがえたさいきょうのわるきゅーれ」にしない事。

ただし、指揮官機は例外的にある程度の汎用性を認める。

投稿数に制限は設けない。ただし受付期間を過ぎた場合、選考の対象にならない可能性があるので気を付ける事。

投稿、及び質問は感想板またはメッセージで受け付ける。

それ以外では受け付けないので気を付ける事。

作品には指揮官機、格闘機、射撃機、戦闘支援機を各一機ずつ出す予定なので、

是非参考にしてほしい。

HAL「とまあ、こんなところか。あと、受付期間はあくまで目安なので、

一日くらい遅れても問題は無いから、バンバン投稿して欲しい」

ユウ「それにしても、他作品と比べて規定が多い気がするんですが……」

HAL「要は違反してもこっちで勝手に調整して使わせてもらうという事だ。

まあ、余程の事が無い限りそうはならないと思うがな」

ユウ「だそうなので、尻込みせずには非投稿して下さいね」

HAL「皆様の素晴らしい妄想を期待している」

ユウ「ところで一機も投稿されなかった場合はどうするつもりですか？」

HAL「全部俺が考える」

ユウ「……だ、そうです」

HAL「カラーリングや形状は自由だ。規定が守られてさえいれば、どんな機体になっても構わない。

成層圏を狙い撃てる機体にしても良いし、歩く武器庫にしても良い。

金ぴかでも引いたりしないから、是非投稿してくれ。  
と言つかして下さいお願いします」

ユイ「皆さんの応募待ってまゝす」

ユウ「通常のご意見、ご感想もお待ちしております」

HAL「作品の質の向上のため、是非書いてくれ。質問にも答えられる範囲で答えるぞ」

ユウ「ところで外伝書く気なんですか？」

HAL「別枠で連載する予定だが、何か？」

ユウ「本編があまり進んでない気がするんですが……どうなさるおつもりで？」

HAL「なぜ黒い笑みを浮かべながらにじり寄ってくるんだ？」

ユウ「遅々として進まない本編を蔑ろに<sup>ないがし</sup>されては困るんですよ」

HAL「ぜ……善処しよう」

## PV10万突破記念企画（後書き）

外伝は別枠で連載……の予定。

多分本編より更新頻度は低いですorz

まだキャラクターの考案中ですので内容についてはまだ何とも……。ただ、自分は百合が好きなので多分百合になると思います。何で女の子同士ってこんなにドキドキするんだ……。

お知らせ

受付期間を延長しました。

## Shift 2-6 「決闘後の二人」(前書き)

また話の分量をミスりましたorz

PV10万突破記念企画については現在進行形でカスタム案募集中です。

受付期間を7月まで延ばしました。奮ってご参加ください。

今すぐ応募して、ISMマイスターの称号を手に入れよう！(嘘です)

## Shift 2 - 6 「決闘後の二人」

試合終了のブザーが鳴り、勝者が告げられた瞬間、アリーナの観客席は騒然となった。

当然だろう。素人が代表候補生に勝つなど前代未聞。ましてやそれを成し遂げたのが世界で二人しかいないISを扱える男なのだから。

「静かにしろ！ 連絡事項がある」

だが、その無秩序な賑わいはたった一声で、まさしく冷水を浴びせられたかの如く静まり返った。

アナウンスしたのが千冬だったので当然と言えば当然だが。千冬の言葉に生徒たちは耳を傾ける。

「奈々瀬対織斑の試合は、アリーナの使用時間の都合上、明日に延期する。繰り返す」

落胆の聲が上がらなかったのは千冬の指導の賜物だろう。顔までは落胆の色を隠せはしなかったが。

「織斑とオルコットはピットに戻れ。観客席の生徒は直ちに退場するように。以上」

アナウンスが終了するや否や、生徒たちは蜘蛛の子を散らすように散って行った。

誰だって織斑先生のお説教は受けたくないのだろう。

一夏は自分が勝ったという余韻を噛み締めていたかったが、お説教されては敵わない。

すぐにピットに戻ろうとしたが、ある事をまだしていないのに気が付き、セシリアに近づく。

「良い試合だった。ケガとか無いか？ 手加減できなくて悪かった」

一夏はそう言ってセシリアに右手を差し出した。

「……………」

だがセシリアは一夏を無視し、そのままフラフラと上の空でBピットに戻って行った。

「……………やっぱり負けた事がショックだったのか？」

一夏は自分で答えを推測し、自分で勝手に納得した。  
まさかこの試合に勝った事で自分が好かれたなど全く気付かずに。

### 第三アリーナ・Aピット

「一夏、よくやった」

「お、おう」

ピットに戻ってきた一夏を最初に出迎えたのは箒だった。  
見た感じ喜んでいいる雰囲気は無く、普段通りだ。

（あれ？ 勝ったのに喜んでない？ なんか勝って当然って感じだな。ああそうか、こういう時こそ気を抜くなって事か。さすが箒、



その姿勢には痛み入るぜ)

一夏はこんな時でも適当に解釈して納得した。  
筈に続いて山田先生と千冬が一夏に近づいてくる。

「すごいです！　すごいですよ織斑くんっ！！」

「ど、どうも……」

山田先生は目をキラキラと輝かせながらずい、と寄って来る。

一夏はISを付けているため、必然的に山田先生を見下ろす形になる訳で

(い、いかん！　む、胸が……)

急いで目を逸らす一夏。一夏の行動に首をかしげる山田先生。

その行動をハイパーセンサーで見てしまった一夏は、さらにダメージを受ける事になった。

……主に理性に。

「その、なんだ……素人にしては悪くないが、これで満足せずに精進しろ」

「……はい」

照れ隠しのためか、そっぽを向きながら言う千冬だが、肉眼でも分かるくらい嬉しいですオーラを放っていた。

それを感じ取った一夏は特に反論すること無く、素直に従った。  
せっかく気分が良いのに悪くする理由は無い。

一通り言葉を交わしたが、一夏は何か欠けているような気がして、周りを見渡した。

そしてある人物がいない事に気が付いた。

「あれ？ ユウは？」

「ああ、ユウなら試合中にここから出ていったぞ。次の対戦相手を祝福するつもりは無いと言ってたな」

「次の対戦相手？ まさか分かったのか？ 俺が勝つって」

「そうとしか思えん」

「そうか……試合の前に礼を言いたいんだけどな」

一夏の言葉に千冬は肩をすくめる。

「礼？ 応援の礼か？ お前も律儀な」

「あー、そうじゃなくて、アイツのアドバイスで勝てたから、その礼を……あれ？」

千冬に対する一夏の一言で周りの戦勝ムードが完全に消え、教師陣の一夏を見る目が残念な物になった。

「……そうですよね。当然ですよ。そうでもない限り織斑君は勝てませんよね」

「……やはりそうか。よく考えれば、策を弄するなど直情的なお前には無理だったな」

山田先生、千冬の順に心に突き刺さるような言葉を一夏に投げかける。

これらの言葉が実体ダメージを持っていれば、一夏は心臓を滅多刺しだったろう。

唯一篇が何も言わなかった事が救いか。

「まあ、それでも勝ちですから……」

「次からは自分の力で勝てるように訓練に励め。いいな？」

「……はい」

「一夏」

「ん？ どうした筈」

「今回は仕方無かったが、次からは卑怯な真似は許さんぞ」

「……分かった」

先程までの浮かれ気分はどこへやら。

決闘には見事勝利したが、男としては色々と、ズタボロに負けた一夏なのであった。

### 第三アリーナ・Bピット

セシリアはフラフラと力無くBピットに辿り着き、程なくしてIS

を解除する。

表情は未だに上の空で、先に到着して待っていたユウに気付く気配は無い。

「お疲れ様です、ミス・オルコット」

「……………あら、何故貴方がここに？」

ユウに言葉を掛けられ、ようやく反応するセシリア。

表情は先程とは一変、どこか不機嫌そうな雰囲気を出している。まるで行動の邪魔をされたかのように。

「貴女を慰めに来ました」

「必要ありませんわ」

ユウの言葉はぴしゃりと撥ね退けられた。ユウは苦笑しながら言葉を続ける。

「人の善意は素直に受け取るものですよ」

「敵の善意を受け取る気はありませんわ」

「貴女を敵だと思った事は一度もありませんが？」

ユウの言葉に、セシリアはうつ、と声を詰まらせた。表情はみるみる険しくなり、明らかに機嫌を損ねている。

「……………貴方と口論しても勝てる気がしませんわ」

「それは何より。さ、飲み物とタオルを受け取って下さい」

ユウに促され、セシリアはしぶしぶ飲み物とタオルを受け取った。そのまま飲み物を口にする。

「それより一夏はどうでしたか？ 惚れるくらい強かったでしょう？」

「ッ！？ げほっ、げほっ……いきなり何を仰いますの！？」

ユウの何気ない一言に、セシリアは驚いて咽むせながらユウを見た。ユウの目はまるで何でも見通す水晶のように澄んでいる。

「こ、今回は偶然ですわ！ 今回は偶々調子が悪かったただけで……」

そう。今回は偶々調子が悪かった。だから相手に好き勝手を許してしまった。

というのがセシリアの言い分だろう。

「確かに。顔が若干赤いですね。風邪ですか？ 熱は」

ユウは頷き、真顔で額をくつつけようとする。セシリアとしては今誰かに触れられたら色々とまずいので、適当に誤魔化す事にした。

「こっ、これは……そう！ さっきまで激しく動いてましたので、体が熱を帯びているだけですわ！」

「そうですか。じゃあ体の冷やし過ぎには気をつけて下さいね」

「……ええ、そうしますわ」

どうにか誤魔化す事ができたと思ったセシリアは、冷たい汗が背筋を伝うような錯覚を覚えつつも、とりあえず着替えに向かう事にした。

が、ピットを出る直前、背後から声を掛けられた。

「ミス・オルコット」

「……セシリア」

「え？」

「セシリアで構いませんわ。これからは『友人として』の付き合いを希望しますわ」

「……明日は血の雨でも」

「失礼な。貴方のような殿方は嫌われますわよ？」

ユウの言葉に、セシリアは不機嫌そうに返す。

だが、ユウに背を向けていたせいで、ユウの口角が一瞬上がったのを見逃してしまった。

「じゃあ一夏のような男ならどうです？」

「！？　いつ、一夏さんは関係ありませんわ！　……あ。」

セシリアは言い切ってから気付いた。今自分は何て言ったのか。

『一夏さん』と言っていたのではないか。意識してしまったら止まらない。

脳内で『一夏さん』が何度もしピートされ、繰り返す度に脈拍が早まり、顔が熱を帯びてくる。

「そうですか。ああ、僕の事はユウで構いませんよ」

「わ、わたくしは別に……って、へ？　そ、そうですか。ではユウさん、わたくしに何か？」

弄られると覚悟していたセシリアだったが、ユウは特に気にした風ではないのでほっと胸を撫で下ろした。

「明日は僕と一夏、どちらを応援するんですか？」

ユウの質問に考え込むセシリア。最初に脳裏に浮かんだのは一夏だった。できれば彼に勝ってほしい。ついでに最後にこの男に一泡吹かせてやりたい、そうセシリアは思っている、

「それは秘密ですわ」

そう答えてユウを残してピットを出た。

一方答えを受け取ったユウは、最初はニコニコ顔で、次第にニヤニヤし始め、終いにはククク、と笑い始めた。

「セシリアは演技が下手だな。バレバレだよ。やっぱり恋する乙女は見ていて飽きないな。さて、セシリアは堕ちた。次は鈴だな。彼女は最初からポイント高いから、ちょっと焚きつければあれよあれよと堕ちてくれるだろう。楽しみだ」

ユウの笑みは果てしなく黒かった。

Shift 2 - 6 「決闘後の二人」（後書き）

ユウ「ねえ、僕は悪役なんですか？ 悪役なんですね？」

HAL「何を取り乱している。別に良いじゃないか、恋のキューピットみたいで」

ユウ「結論から言えばそうなりますけど、過程が黒過ぎます！」

HAL「世の中綺麗事だけじゃ生きていけないぜ」

一夏「アンター一体どんな人生送ってきたんだよ……」

HAL「そんな事は関係ないだろう。それより次はユウvs一夏だ。

一夏、ブレード光波飛ばしてユウを驚かしてやれ」

一夏「出来るのか！？」

HAL「いや、無理だ。そういう事を言った訳ではない。

ユウに勝つためには計算外の行動を取れと言ったのだ」

一夏「アイツの計算外って、何すればいいんだよ……」

HAL「さあな。ま、精々頑張れよ」

ユウ「貴方が言う事じゃないですよそれ……」

和花「PV10万突破企画は現在進行形でやってるんで、是非参加して下さい……」



ユウ「そういえば、受付期間が延びてましたね。どういふ事ですか？」

HAL「どういふ事も何も、伸ばして悪い事は一つも無いだろう？」

ユウ「どうせ集まらなさそうだからグダグダやる気なんでしょう？  
ただでさえ今の連載だけでも厳しいのに外伝なんて始めたら  
色々almazイですよ？」

HAL「……やれるだけやってみるさ」

8 / 29 改稿しました。

S h i f t   2 - 7   「ユウvs一夏!   激突する白」(前書き)

Q・先生、前は「次はユウvs一夏だ」とかほざいておきながらこの体たらくは一体どういう事ですか？

場合によつては外伝なんて無かった事にしても良いんですよ？

A・計画性つて大事だね。勢いだけじゃこの業界やってられ……  
つてちよつと待つてそのプロット破かないでエエエ!!!!

……次こそ戦闘シーン頑張ります。そして外伝は必ず書く(キリッ  
という訳で、来週あたりに外伝の予告を短編で出そうと思います。  
皆見逃すなよ！

## Shift 2・7 「ユウvs一夏！ 激突する白」

時は進み、翌日の放課後。場所は再び第三アリーナ。

「白式や零落白夜についての必要最低限の知識は教えた。後はお前の好きなように戦え」

「ああ。行ってくるよ、千冬姉」

一夏は再びAピットで準備を整えていた。昨日と違い、この場にユウはいない。

「一夏」

「箒か、何だ？」

準備を整える一夏の背後から声が掛けられる。声の主は箒だ。

「勝てとは言わない。だが、せめて一矢は報いて見せろ」

「分かってる。ただやられるだけなんて、俺の性に合わない。絶対アイツにギャフンで言わせてやる」

「その通りですわ、一夏さん。わたくしも応援しますから、必ず一撃を入れて下さいな。あ、わたくしの事はセシリアで構いませんわ」

「うおっ!?!」

箒の背後からいきなり掛けられた声に、一夏は驚き、目を疑った。昨日敵だったはずのセシリアが何故この場にいるのか。

「おま」

「セ・シ・リ・アですわ」

（名前で呼ばないと威圧感放つとか、何処のナルシストだよ！？それになんか猿から名前に大幅ランクアップしてるし！？）

「えっと……セシリアさん、何故ここに？」

「先程も言った通り、一夏さんの応援に参りました」

一夏の恐る恐るの質問に、セシリアはそう答えて一夏に近づく。しかし、箒の隣でピタリと止まった。箒から殺気にも似た威圧感が放たれたからだ。

「生憎だが、応援の数は足りている」

「そんな事無いぜ箒。応援は多い方が助かる」

「一夏さんがいてくれと仰るのなら、仕方ありませんわね」

（ふふん　一夏さんにとって貴女だけが特別と思わない事ですわね）

「……………」

（イギリス女め、これで勝った気になるなよ……）

ふふん、とご機嫌な顔をしつつ箒を見遣るセシリアとは対照的に、

セシリアを見る箒の表情は険しい。

心なしか二人の眼から火花が飛び散っているようなエフェクトが見える。

そんな二人を苦笑しながら見ていた一夏は、徐におもむろゲートに向かい始める。

「それじゃ、行ってくる」

「お気をつけて」

「ふん、精々ボコボコにやられて来い」

「おいおい箒、それ酷くないか？」

「知るか！ さっさと行け！」

箒はそう言ってそっぽを向いてしまった。

一夏は箒の態度にあはは、と苦笑し、一通り笑うと表情を引き締めた。

「箒、どうしても伝えたい事がある」

「……どうした、改まって」

一夏の雰囲気が変わったのを感じた箒も、表情を引き締めた。

「もしこの試合、俺が勝ったら……俺が勝ったら」

## Interlude 篇

ドクン。

心拍数が跳ね上がるのを感じた。

一夏はこちらに背を向けているので表情までは分からない。  
しかし、背中から並々ならぬ強い意志を感じる。

それはまるで、死地に赴く兵士のような雰囲気。

どこかへ行ってしまうようなその雰囲気、私は心の何処かで不安を感じた。

「もしこの試合、俺が勝ったら 結婚してくれ、篇」

本来ならば紡がれる事など有り得ない言葉が脳内でリピートされる。  
こんなの都合の良い妄想だ。そう切って捨てようとしても頭から消え去らない。

胸が苦しい。組んだ腕に力が入る。こうでもしないと、一夏が続きを発すればすぐにでも抱きついてしまいそうだ。

一夏が口を開け始め、それと同時に期待が膨らんでいく。

## Interlude out

「メシ奢ってくれ」

「……………は？」

一夏の言葉に箒は呆然とした。

「いや、だから俺がこの試合勝ったらメシ奢ってくれて言ったんだ。

まあ、絶対勝てないだろうけどさ。でもこれくらいの報酬あっても良いだろ？

その方が頑張れるし」

箒は、ゆつくりと、時間を掛けて一夏の言葉を咀嚼していく。

そして言葉の真意を理解していくにつれ、箒の顔から表情が消えていく。

「……分かった」

「！ 本当か！？ 言ってみる」

「ただし、お前が負けたらお前が私に奢れ」

「ええー！？」

「それくらい当然だろう。誰が鍛えてやったと思ってるんだ」

「ああー……えっと……仰る通りです、はい」

思いもしない箒の逆襲に、一夏はがっくりと項垂れる。

しかし、男に二言は無い。やっぱり無しとは言えず、一夏は従うしか無かった。

「……こうなったら、勝つしかない」

哀れ、墓穴を掘った一夏の選択肢は『死に物狂いで戦う』だった。  
ピット・ゲートが解放される。最早考え直す余裕はない。

(……やってみるさ！)

加速の圧力を全身に感じながら心に誓う。勝てば良いと。  
しかしそれは、賭け馬は自分自身、勝率0%の、賭けとして成立しない賭けだった。

一夏がアリーナ内へ飛んで行った後、ピットに残された二人は何と無しに顔を見合わせ、ほぼ同時にため息をついた。

「残念でしたわね」

「全くだ」

「しかし、先程のやり取りでひとつ、気付いた事があるのですけれど」

「……何だ？」

「一夏さんは、実は手料理を要求していたのではなくて？」

「……………！？」



セシリアに言われて箒はハッとした。

（しまった……確かに私の手料理なら報酬に値する。一夏め……なぜハッキリと言わなかったのだ）

箒の悔しそうな反応を見て、セシリアはふふん、と鼻を鳴らした。

（一夏さんの言動を理解できるわたくしの方が、一夏さんにふさわしくてよ）

だが箒はまたもやハッとし、表情をニヤケ顔に変えた。

箒の表情の変化にセシリアは眉を顰め、箒に理由を尋ねた。

「どうかなさいまして？」

「ああ、一夏が負ければ、私が一夏に手料理を要求すれば良いではないか」

箒の一言に、今度はセシリアが衝撃を受けた。

（しまった！ その手がありましたわ！）

形勢逆転。まさしくその一言が当てはまった瞬間だった。

結局の所、一夏が勝とうが負けようが得をするのは箒という事だった。

どちらも都合のいい解釈だが、恋する乙女の思考回路は、自分に都合の良いように繋がっているのである。

一夏がアリーナに入ると、既にユウが待機していた。

「ようやくですか。待ちましたよ」

「悪い悪い、色々あつてな……」

一夏の言葉に対し、ユウは一夏を追及する事は無く、そうですかと言つてあっさりと引き下がった。

一段落ついた所で、一夏は改めてユウを観察する。

ユウが纏うISは、色は白、装甲は丸みを帯びていて威圧感を感じる事は無いが、

装甲の面積が他のISよりも広く感じられ、周囲に配置された4つの非固定式のバインダーがその印象をより一層助長している印象を受ける。

（同じ色なのに白式とは全然違うな）

しかし、一夏が最も驚いたのは、ユウの格好である。

「制服？ ISスーツじゃないのか？」

ユウはいつものようにIS学園の制服を身に着けている。

教科書にはISを身に付けるならばISスーツを着るのが最も良いと書かれていたはずだ。

ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知する事によって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはその動きに合わせて必要な動きを行う。

つまり、ISスーツを着なければISは全身に装着された鉄の塊と同じように、唯の拘束具にしかない、という事になる。

「ああ、その事ですか。僕のISは特殊ですから、ISスーツが無くてもちゃんと動かせるんです」

へえ、と感心する一夏に、ユウはもう一つ、と付け加えて、

「操縦者、僕の安全を考慮してこの制服の強度を上げてますから、安全面は問題ありません。心配しないで下さい」

「それはつまり、俺は本気を出しても良いってことだな？」

「本気を出しても君が勝つ事など有り得ませんがね」

ユウの挑発に一夏は眉を顰めた。

「後で吠え面かくなよ？」

「君こそ、ピットの二人に格好悪い所を見せないように、死に物狂いで戦う事ですね」

一夏は雪片式型を呼び出し、下段に構える。

対するユウは両手にビーム・ガトリングガンを呼び出し、銃口を一夏に向ける。

決闘前の、静寂の時間が訪れる。二人は今か今かと開戦の時を待ち、同時にその一瞬に対応すべく集中力を高めていく。

「試合開始3秒前……2……1……」

試合開始のブザーが鳴った。その瞬間、二人の体が同時に弾け飛んだ。

Shift 2・7 「ユウvs一夏！ 激突する白」（後書き）

ユウ「どうして今回は第vsセシリアな感じになったんです？」

HAL「いや、なんか二人が勝手に動いちゃって……」

ユウ「そして僕は主人公であるはずなのに影が薄くないですか？」

HAL「安心しろ。次は必ずお前が活躍できるから」

ユウ「一夏相手に勝っても全然嬉しくないです」

一夏「ちよっ……それ酷くないか？」

HAL「今回はユウが一夏を蹂躞するO H A N A S H I（笑）だ

全く……ハーレムを作れないくらいで弱い者いじめなんて、最低最悪の主人公だな、お前は」

ユウ「今の言葉の何処に真実があるのか教えてください。

……小一時間ほど」

一夏「俺はお前には負けねえ！ あいつらが応援してくれる限り！」

HAL&amp;・ユウ（無駄にイケメン面するなよりア充め……）

和花「ワルキューレカスタム案は現在進行形で募集中です。

締め切りが近いんで、駆け込むなら今ですよ」

HAL「通常の御意見、御感想も随時募集中だ！」

ユイ「ヨロシクね」

8 / 29 改稿しました。

## Shift 2・8 「レッスン」(前書き)

先週は訳あって更新できませんでした。すみません。

あと、活動報告にも書きましたが、今月は忙しいのでもしかしたらこの一話しか上げられないかもしれません。ご了承ください。

## Shift 2 - 8 「レッスン」

開始直後、一夏はユウに向けて最短軌道　　つまりは一直線にユウに突撃した。

零落白夜はシールドエネルギーを食らう。長期戦はきわめて不利。故にシールドエネルギーに最も余裕のある、試合開始直後に一撃を当てるのが定石。

一撃デカいのが当たればなし崩し的に勝てる。多少の被弾はお構いなしだ。

一夏のそんな考えは、加速直後に霧散する事になる。

「なっ!？」

ユウが開始直後、一夏と同じ方向　　後ろ向きに加速したためだ。しかもご丁寧に一夏と同じ速度で、だ。

ユウは驚く一夏などお構いなしに、両手のビーム・ガトリングガンの引き金を引く。

大量のビームが一夏目掛けて吐き出される。

「くそっ!」

一夏は突撃を諦め、回避行動に移る。とにかく距離を取り、密度の薄くなった所へ動いていく。

「随分と回避が上手くなりましたね、素人の割には」

「最後は、余計、だろッ!」

ビーム・ガトリングがバラ撒くビームは、一発の威力はそれ程でも



ない。

しかし、とにかく数が多い。一丁でさえ密度が濃いのだ。

二丁ともなると密度は倍、その激しさは集中豪雨と言えるだろう。

しかし幸いな事に、命中精度はそれほど高くない。

狙って撃っていると言つよりはバラ撒いていると言つた方が良いかもしれない。

（手加減されているのか？）

一夏の脳裏に一つの考えがよぎる。

そう、ユウがこんな無計画に弾をバラ撒くはずが無い。

「舐められてるのか、俺は！」

「それはちよつと違います。測っているんですよ、君の実力を」

「舐めた真似を！」

ユウの答えは一夏を納得させるどころか、逆に怒りを増長させる結果となった。

どちらにせよ手加減されている事に変わりはないのだから。

「挑発ですらないのにこの始末……ダメダメです」

「うつせえ！」

ユウはビーム・ガトリングを機械的に連射しながら、失望したように首を横に振る。

その行為がまた一夏の怒りを煽った。

「はあ、失望しましたよ一夏。これでは」

ユウがべらべらと話している最中、唐突にビーム・ガトリングの連射が止んだ。

ビーム・ガトリングは便利な武器だが、弱点が存在する。

それはこの武器がエネルギー充填式である事だ。

一度撃ち切れば再チャージに時間を要する。

「今だ！」

一夏はここぞとばかりにユウに向けて突撃する。

再び零落白夜を発動させ、固まって動かないユウに向けて雪片を振り下ろす。

「もらった！」

この瞬間、一夏は完全に一撃を確信し、ほくそ笑んだ。

だが、危機的状況に置かれながらも、ユウの顔に焦りは無い。

ほんの一瞬だけ、口角がほんの僅かに上がったが、一夏は気付かない。

雪片が全力で振り下ろされた。しかし一夏の手到手応えは無い。

「何ッ!？」

「敵の策にまんまと乗せられてしまいますよ？」

「があっ!？」

後ろから声が聞こえ、次の瞬間、一夏の体は背中からの衝撃と共に加速した。

ハイパーセンサーで蹴りを繰り出したユウの姿を確認したと同時に、一夏は地面に叩きつけられた。

「たかが弾切れ程度で隙が出来たと勘違いされては困りますね。

……ああ、すみません。まさかこの程度の策も見破れないような愚か者ではない、と思い込んでいた僕が悪かったみたいです」

ユウは追撃せず、一夏を見下ろして言った。否、見下して言った。

（こいつ……とことん舐めやがって！）

一夏は起き上がり、再びユウに突撃した。最早冷静さなど欠片も無い。

「安心して下さい。今度はちゃんと受け止めてあげますから」

「ざけんじゃ……ねえええええ！！！」

一夏の大上段の踏み込みに対し、ユウは両腕のビームサーベルをトンファー状に出し、交差させて一夏の攻撃を防

「え……！？」

がずに受け流した。

「怒りで我を忘れ、攻撃が単調になっている。おまけに敵の言葉を素直に信じるなんて、全くもって人が良いですね、一夏」

「ぐがッ！？」

一夏はまたもや後ろから蹴りを食らい、地面に叩き落とされた。

「なんと言つか、終始奈々瀬君ペースですね」

「しかもさつさと終わらせる訳でもなく、こんな弄ぶような真似を…… 一体何を考えているんだあいつは」

真耶は残念そうに言葉を漏らし、千冬の方を向き……凍りついた。視線はモニターの中のユウを見つめているのだが、その目が凄まじく怖い。

絶対零度、ゴルゴンの目すら生易しいと思える程の眼力。

「さ、さあ……私には何とも」

真耶はただ、ユウに同情することしかできなかった。

「紳士と思っておりましたのに、とんだ捻くれ者ですわね」

「……私の知らない間に何があったんだ？」

一方、ピットにいる篤とセシリアもまた、ユウの戦い方に啞然としていた。

勝てる実力があるのならさっさと勝ってしまえば良いのに。  
そうすれば一夏はあんなに傷つかなくても良いのに。

二人の見解は、この時ばかりは見事に一致していた。

## Interlude 織斑一夏

もう何度地面に叩きつけられたか分からない。

突撃しては攻撃をかわされ、背後から蹴られる。その繰り返し。

こんな事さっさと終わって欲しいと思った。

ただ蹴り程度じゃシールドエネルギーは全然減らない。

もう嫌だ。もうこんな惨めな思いなんてしたくない。

逃げたい。逃げたい。逃げたい。

「一夏」

不意に上から声を掛けられる。ユウの声だ。

「僕だって本当はこんな事したくないんですよ」

「……どういう、意味だよ」

俺が質問すると、ユウはふう、と憂さげに息を吐き、俺を真っ直ぐ

に見据えた。

「実際に戦って今の実力を測定しました。この際なのでハッキリと言います。君はセシリアに勝ったのが奇跡としか思えないほどの素人です」

「……否定は、しない」

ユウの言っている事は正論だ。俺がセシリアに勝てたのはユウの口添えのおかげだって事も自覚している。

「ですが、才能・資質はずば抜けている。成長速度も異常と思えるくらい速い」

「……何だつて？」

驚いた。そんな事まで見抜けるのか。

「今君に不足しているのは、知識と経験です。知識はただ覚えればいい。ですが……」

ユウは一度言葉を切り、一息ついてから再び話し始めた。

「経験は訓練だけでは不十分でしょう。何より実戦の方が効率が良い。ですから」

ユウが言わんとしている事をようやく理解できた。やっぱり俺はこいつの事、憎めない奴だと思う。

「僕が直接、君を鍛えます」

「……そうか」

なんてバカバカしい。どうして今まで気付かなかったんだ。  
俺がこいつに勝とうだなんて、最初から無理だった。

こいつがすぐに俺を倒さなかったのは、遊んでいたからじゃない。  
そもそもこいつはそんな無駄な事なんてしないだろう。

「……なあ」

「何ですか？」

こいつは本気で俺を鍛えようとしている。

「俺は本当に……強くなれるのか？」

「……それは君次第です」

なら……俺も本気で行く。絶対に強くなる。

## Interlude out

一夏は徐に立ち上がり、雪片を正眼に構える。

一夏の眼は怒りも不安も一切無く澄み切り、これ以上無い清々しさを  
感じさせている。

(やれやれ、ようやく……か)

ユウもまた、両腕のビームサーベルを構える。

「では、第2ラウンドと行きましょうか！」

「おうっ！」

一瞬の間を置いて、二人はほぼ同時に動き、相手に向かって突進した。



Shift 2 - 8 「レッスン」(後書き)

HAL「見事に蹂躪の話だったな」

和花「奈々瀬君鬼畜だね」

一夏「このドSめ」

ユウ「ちよつとちよつとちよつと!!!」

まるで僕が弱い者苛めをしている小悪党みたいじゃないですか!」

HAL「違うのか?」

ユウ「違います! ちゃんと理由があるじゃないですか!」

HAL「お前、実はツンデレなんだろう?」

ユウ「はあ!?」

一夏「さすが作者だ。俺もそう思ってた。

弾が言ってたのとぴったり当てはまるしな」

ユウ「いや、僕にそっちの趣味は」

和花「奈々瀬君、もしかしてあっちだったの!?

……そうだね。あんなに可愛いんだもん。  
誘われないほうが可笑し」

ユウ「君達、ちょっと……頭冷そうか？」

HAL「すまん、俺が悪く」

（少々お待ち下さい）

ユウ「さて、次回はいよいよ一夏の反撃です」

和花「試合の行方は如何に！？ 次回もお楽しみに！」

一夏「なあ、あれ、大丈夫なのか？」

ユウ「じゃあ一夏、君も同じくして差し上げましょうか？」

一夏「全力で遠慮させて頂く！」

8 / 29 改稿しました。

## S h i f t 2 - 9 「イレギュラー・アタック」(前書き)

えゝ、実に一カ月ぶりの更新になりました(汗)

読者の皆様、お待たせしてしまい本当に申し訳ありませんでした。

夏休みに入っただ、おそらくこれから更新速度は上がるかと……。

……すみません外伝が有ったのを忘れてましたorz

## Shift 2 - 9 「イレギュラー・アタック」

「はああああー!!!」

交錯する直前、一夏は雪片を袈裟掛けに振り下ろした。  
しかし、斬撃はユウの体をかすりもしない。

「甘い……ッ!？」

ユウはまたもや一夏の後方に回り込み攻撃を加えようとしたが、一夏の行動に目を見開いた。

「何度も……やらせるかぁ!」

一夏は袈裟切りが空を切ったと見るや否や、その体を回転させ強引に横薙ぎを繰り出してきた。

雪片とビームサーベルがぶつかり合い、刀身が火花を散らす。

「ッ!? 蹴りじゃないのかよ!」

「まだ蹴って欲しかったんですか? とんだMですね、君は!」

「うつせえ!」

お互い力を込め、鏑迫り合いの状態から距離を取る。

（もう合わせてくるとは……スイッチが入ると凄まじいな）

（まさかサーベルで来るなんて……絶対に入ると思ったのに）

距離を置いて先程のやり取りの感触を確かめつつ、次の動きに入る。

「俺は迷わないぜ!」

先に動いたのは一夏。雪片しか攻撃手段を持たない故に行動パターンはいたってシンプル。

『近付いて斬る』

ただそれだけ。しかし、そのシンプルさゆえに迷いは一切見当たらない。

対するユウはサーベルを仕舞い、ビーム・ガトリングを再び取り出した。

「充填の時間なんていくらでも有りましたからね」

そう言って後退しつつ、一夏にビームの弾幕を浴びせる。

「うおおおお!!!!」

一夏は減速する事無く、出来る限り被弾面積を減らし、ユウに近づいていく。

しかし、ユウもまた一夏と同じ速度で後退を開始し、一夏とユウの距離は一向に縮まらない。

（まだだ! まだ進める!）

一夏は多少の被弾などお構いなしに、ユウに向けて突進する。

ユウは一夏と同じ速度を保ったまま後退を続ける。

普通の空ならば無限に続くであろうこの状態は、しかし長くは続かなかった。

ここはアリーナなのだから。

（まずい……後退できない）

ユウの背後に壁が迫り、ユウは後退を止めざるを得なくなった。  
ユウと一夏の距離が詰まる。

「はあああああ！！」

（来る！）

一夏が大上段に雪片を構え、全力で突進してくる。

一夏の攻撃を受け流すため、ユウは右へよけ

「今度は逃がさねえ！」

一夏は雪片を大上段から逆胴へ構えなおし、横へ薙いだ。

（しまった！？）

ようとしたが出来ず、バインダーでの防御を余儀なくされた。  
バインダーのビームバリアが展開されるが、一夏はそれに応じて零落白夜を発動させる。

ビームバリアと零落白夜の刃が激突し、一瞬拮抗した。

次の瞬間、零落白夜がビームバリアを切り裂き、続いてユウをも切り裂かんと刃を進めるが、結局刃がユウを完全に捉える事は出来ず、浅く装甲を切り裂くに留まった。

ユウは一夏から飛び退き、一夏は壁を背にユウと向き合った。

Interlude 織斑一夏

ダメだ。あと一步の所で届かない。

せつかくユウが鍛えてくれてるのに、何も出来ずに終わっちゃ申し訳が無い。

どうする……どうすれば一撃を入れられる？

今は結構良かった。でもユウに二度通じる保証は無い。

それにそろそろシールドエネルギーも危なくなってきた。

零落白夜が二回使えるかどうかって所か。もう一か八か……だな。

……白式、頼む。ほんのちょっとで良い、俺に力を貸してくれ。もうお前しか頼れないんだ。

眼を瞑って白式に頼み込む。我ながら情けないと思うが、もうこれくらいしか手は無い。

『……………』

白式からの返事はない。はは……そんな都合のいい事が

『いいよ』

「……………え!？」

驚いて目を見開いた。目の前には白いロングの髪を靡かせた、白いワンピース姿の小さな女の子が立っていた。

そして驚くべき事に、周囲の空間が完全に停止している様なのだ。

まるで意識だけ完全に別次元にいるような感じだ。

『ほんのちよつとだけ、力を貸してあげる。上手に使ってね』

女の子は後ろ姿のまま、振り返りもしない。けれどこの声はあの女の子の物だと理解できる。

女の子は言うべき事を言ったのか、すぐに姿を消し、次の瞬間

「う、あ……なんだこれ？」

頭の中に何かのイメージが流れ込んできた。

これは……零落白夜……？　しかし決定的に何かが違う。

流れ込んできたイメージを理解した瞬間、俺は戦慄した。

まさか零落白夜にそんな使い方があるとは思わなかった。

俺が知っている限り、千冬姉はこんな技一度も使った事が無い。

……これならユウと互角に戦える。

## Interlude out

### Interlude 奈々瀬ユウ

一夏の雰囲気が変わった……。何か掴んだのか？

そろそろ終わらせようかと思っていたから、これは好都合だ。見せてもらっぞ、今日の集大成を。

「そろそろ終わりにしましょう」



僕はそう言つて前二つのバンダーに格納されているビームソードを両手に構えた。

「ああ、いいぜ」

一夏も雪片を下段に構える。そしてお互い集中力を高めていく。

先に動いたのは僕だ。もうビーム・ガトリングなんてちゃんな物を  
使う気は無い。

一夏が突撃してきた所をいなして一撃を与える。それで終わりだ。だが、いつまで経つても一夏が動く気配が無い。迎撃か、賢明だな。しかし、武器の数はこちらが有利。

こっちは二本、あつち是一本。たとえ一本防がれても二本目がある。こっちが負ける要素など有りはしない。……少なくとも僕が知っている限りは。

一夏との距離が詰まる。一夏はまだ動かない。20メートル、15メートル、まだ動かない。

……おかしい。なぜ動かない？ 何を待っているんだ？

あと10メートル程の距離まで来た時、一夏が動いた。下段の構えで零落白夜を発動させた。

「当たれええええ！！！」

一夏は下段に構えた雪片を上段の構えに変えて振りかぶり、袈裟掛けに振り下ろした。

まだ僕との距離が10メートル程離れている状況で、そんな攻撃は

無意味だ。

そもそも届かない攻撃など攻撃ですら無い。

「失望したよ、いち……ッ!？」

いや、違う! 今回ののはただの零落白夜じゃない!?

雪片によって振り出された光の刃が唸りを上げながら近づいて来ている。

「刃が……飛ぶだつて!？」

バカな!?! 刃が飛ぶなんて聞いてないぞ!?

ビームソードじゃ分が悪すぎる! とにかく回避だ!

体を捻って右に回避する。ちつ、少し掠ったか。

慣性で回転しながら体勢を整えると、目の前には雪片を上段に構える一夏の姿が……あれ?

「うおおおおお!?!」

一夏は雪片を遠慮なく、躊躇なく振り下ろしてきた。くつ、こんなタイミングで回避なんて出来る訳が

i n t e r l u d e o u t

雪片の刃がユウの体に触れる寸前、試合終了のブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者 奈々瀬ユウ』

「…………あれ？」

一夏はユウに雪片を突き付けたまま、呆然と固まった。ギャラリーも皆口を開けたまま呆然としている。

「エネルギー…………切れ？」

ユウは目を白黒させ、ボソリと呟いた。

「…………あ。」

一夏が確認すると、案の定シールドエネルギーが尽きていた。

「…………エネルギー管理もロクに出来ないなんて、やっぱり素人ですね」

ユウがやれやれといった感じで棘のある言葉を放つ。

「ぐっ…………しっ、仕方ないだろ！ その…………俺だって」

一夏はユウの言葉に対し反論しようとするが、ユウはでも、とそれを制止し、言葉を続けた。

「惜しかったですけど、最後のあの攻撃は見事でした」

ユウはそう言って右手を差し出した。

「…………あ、ああ。次は絶対一撃入れてやるからな！」

そう言って一夏はユウと握手し、互いの健闘を讃え合った。

翌日、朝のSHR。ショートホームルーム

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね!」

「……………どうしてこうなった?」

山田先生が心底嬉しそうに話している一方で、一夏は頭を抱え、机に突っ伏して現実逃避していた。

Shift 2・9 「イレギュラー・アタック」(後書き)

千冬「なん……だと!？」

HAL「いいねえ、その表情。それが見たかったのよ」

ユウ「言い方が変態染みてますよ？」

HAL「んんっ！ 失礼した」

千冬「一夏のあれは一体何だ!？」

HAL「ふっふっふ。アレが一夏の必殺技、名付けて『零落白夜・飛刃』だッ！」

ユウ「元ネタがB EACHの月 天衝でしたっけ？」

HAL「思いつきで入れてみた。後悔はしてない」

ユウ「絶対コレ他の人もやってますって！ 二番煎じ臭しかしません！」

HAL「案外原作でこんな技が使われるかもな」

千冬「私でさえこんなのが使えろとは知らなかったぞ……」

一夏「よっしゃ！ コレで中距離も恐くないぜッ！」

HAL「そう都合良く行くと思っなよ？」

一同「!?!」

8/29 改稿しました。

Shift 3-1 「日常の授業風……景？」（前書き）

今回の話は長めになっちゃいました。しかもそれほど進まないという。

進行速度を速めると話が薄っぺらくなっちゃう気がしないでもないので、初心者としては難しい所です。  
いや、言い訳だな、これは。

どうぞ本編をお楽しみください。

## Shift 3-1 「日常の授業風景……景？」

Interlude 奈々瀬ユウ

一夏がクラス代表になる15時間前。

僕は自室へ戻る最中、頭を駆け巡る一つの疑問について考えていた。

そう、一夏の零落白夜についてだ。

最後の最後で一夏が放った、斬撃を飛ばす零落白夜。

一夏があんな攻撃できるなど露ほども思っていなかった。

「いや、思い込んでいたのか？」

僕は零落白夜を刃状にして飛ばす事が出来るという情報を持っていない。

この世界で千冬が用いた話は聞いてないし、前の世界でも一夏が用いたという表現は何一つ無かった。

しかし、前の世界ではISは完結していなかった。

もしかしたらいずれ使えるようになるのかもしれない。それが早まっただけでも考えられる。

「しかし……情報の信頼性に欠ける。決め付けるのは早計か？」

ふと顔を上げると、目の前には1036という数字が書かれたプレートがあった。

あれこれと考え事をしている内に部屋に着いてしまったようだ。



「まあ、これは追々調べていくしかないな」

僕は思考を切り替え、目の前のドアをノックした。  
そして15時間後、一夏がクラス代表に選ばれる事になる。

## Interlude out

織斑一夏は現在の状況を理解できないでいた。何故自分がクラス代表なんていう面倒な役になってしまったのか。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合でユウに負けたんですが、何でクラス代表になっているんでしょうか？」

とりあえず先生に訊くしか情報を得る手段が無いので、一夏は手を上げて質問した。

「それは」

「僕が辞退したからですよ」

山田先生が答えるよりも早く、ユウが一夏の質問に答えた。  
ユウはそのまま話を続ける。

「昨日も言ったように、君は他のIS操縦者に比べて経験が圧倒的

に不足しています。経験を早く積むためには実戦が一番だとも言いました。クラス代表者は何かと試合が多いですから、君にはぴったりだと思いますよ?」

「だけど」

「そ・れ・に、君には親友を売ろうとした前科がありますよねえ?」

「うぐっ!?!」

「これでおあいこです。後腐れが無くて良いじゃないですか」

すごく言い包められた感があるが、メリットづくめなため一夏は何も言い返せなかった。

この後セシリアがしゃしゃり出てきてさらに箒もぶー言っきてて紆余曲折あったが、結局千冬が一喝して満場一致でクラス代表は一夏に決まったのだった。

一夏だけ最後まで不満そうだったが、所詮民主主義などそんな物である。少数派は圧倒的多数派に淘汰される運命なのである。以上。

時間は進み、もうすぐ4月のカレンダーが仕事を終える頃。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらつ。織斑、オルコット、奈々瀬。試しに飛んでみせろ」

IS学園の授業は本格化し、ISを用いて授業する機会も増えた。当然専用機持ちの実践も増え、ユウ、一夏、セシリアの三人はフル稼働している。

ただ、一夏はまだISに扱い慣れていないため、ISの展開にすら時間が掛かっている。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで1秒とかからないぞ」

コイツのようにな、と千冬はユウを指さしながら一夏を急かした。一夏は右腕を突き出し、左手でガントレット状になった白式を掴み、集中する。

（来い、白式）

次の瞬間、一夏の体が光に包まれ、白式の展開が完了した。

「よし、飛べ」

全ての専用機持ちがISを展開させたのを確認した千冬は、改めて飛行の指示を出した。

それを聞いたユウとセシリアの行動は早かった。セシリアを先頭にユウが続き、その遙か後ろを一夏が追いかけるという形になった。

「何をやっている。スペック上の出力ではブルー・ティアーズが一番低いんだぞ。織斑はともかく、奈々瀬はわざとセーブしてるだろう?」

「でも本気出したらすぐ天井にぶつかりますよ?」

「お前の頭の中には急制動という言葉は無いのか? 次に手を抜い

たらグラウンド10周だ」

「うっ……分かりました」

千冬にお叱りを受け、ユウは不満顔で頭を掻いた。

やがて一定の高度まで上がり、三人は上昇を止めた。

「なあユウ、『前方に角錐を展開させるイメージ』って、どんなイメージなんだ？ イマイチ感覚が掴めないんだが……」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

答える前にセシリアに割り込まれたユウだが、特に気にする訳でもなく考え込む。

「やはりセシリアさんの言い分をお勧めしますね。ISは割とイメージに頼る部分が多いですから。それでもダメなら……ロボットアニメを見て下さい。多少は勉強になります」

「分かった」

ユウは苦笑しながら答えたが、一夏は真剣な表情で頷いた。

## Interlude 奈々瀬ユウ

目の前では一夏が通信回線で早く降りて来いと篤に怒鳴られ何とも言えない表情をしている。

そう言えばこの後一夏は地面にクレーターを作る事になるが……どうするかな。

結局一夏一人でも穴を埋める事が出来たんだから、別に一夏をフォローする義理はない。

……でも本気でやれって言われたしなあ。

ちよつと凄い所を見せつけければ”あの”織斑先生でもきつとチャラにしてくれるだろう。よし、フォローしよう。

「織斑、オルコット、奈々瀬、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から10センチだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

セシリアは一夏にウインクしながら地上に向かっていった。

そして完全停止も難なくクリアしたらしい。さすがに代表候補生ともなればこれくらいお茶の子さいさいだろう。

「うまいもんだなあ」

一夏が感心したようにつぶやいている。

「違います一夏、君が下手なだけです」

……なんて口に出しては言わない。それが大人のルールゆえに。

「一夏、先にどうぞ」

「分かった。ふう……よし！」

一夏が地上に向かって急降下、もとい突進していった。

急降下と完全停止のポイントは、どこでブレーキを掛けるかだ。スピードが上がれば上がるほど、ブレーキポイントの見極めはシビアになっていく。

今の一夏はスピードを出す事に集中するあまり、ブレーキポイントを完全に無視している。

これじゃ衝突するのは当たり前だ。

僕はすぐに一夏を超えるスピードで急降下する。ちなみに僕の飛行イメージはやっぱりスラスタールやバーニアだったりする。だって一番イメージ掴みやすいし。

さすがガダム。日本が誇るロボットアニメだ。

すぐに一夏に追いつき、横に並ぶ。ブレーキポイントまであと少し

……ここだ！

「ストップ!!」

「ッ!？」

僕の声に一夏は驚き、反射的にスピードを緩めた。けどそれだけでは不十分だ。

慣性を殺しきれず、激突の運命をなぞるだろう。

「暴れないで下さいねっ!」

「うおっ!？」

僕は一夏を抱きかかえ、4つのバインダー全てを使って逆噴射する。まだ不十分か？　なら縦のベクトルを横に変換するか。

機体各所のスラスタをフル稼働させ、緩やかな曲線を描くよう軌道を修正する。

速さは殺しきれなかったが、少なくとも地面に激突する事は無くなつた。

そのまま地面に滑るように着地し、機体を回転させて安定させる。着地点から6メートルほど地面を滑り、機体が三回転した所でようやく止まった。

一夏を抱きかかえてから5秒間の出来事だ。うん、良く出来ました。

『……………』

あれえ？ 何で誰も何も言わないのかな？

山田先生は言うに及ばず、織斑先生すら固まっている。

「あ、あの……終わりましたけど？」

『……………きゅ』

……………きゅ？

『きゃあああああああ！！！！』

ぐうつ！？ 久しぶりに聞いたぞ、この超音波ヴォイス。相変わらず耳に優しくないな。

「奈々瀬くんカッコいいー！」

「ステキ！ 王子様みたい！」

「さすが織斑君の本妻！　これは結婚も近いわね！」

「え！？」

待て待て待て！　最後のは何だ！？　いつ僕が一夏の本妻になったって言うんだ！？

それから第とセシリア！　なんで僕に向けて殺気を放ってるんだ！？　僕にも一夏にもそんな気なんて無いに決まってるだろう！？

「……墜落するISを抱えて完全停止、しかも多少ズレはしたが地表にピタリ……か。ピタリ賞は出せんが、褒めるくらいはしてやろう。ただ……」

おお、織斑先生がデレた！　ただ……何か？

「王子様を気取りたい気持ちは分からないでもないが……早く織斑を下ろしてやれ。その内恥死するぞ？」

何だそんな事……何イ！？　恥死だと！？　そんなバカな！？

僕はすぐに視線を下ろし、一夏の方を見る。

「頼む……早く下ろしてくれ。色々と恥ずかし過ぎて死ぬ」

一夏は顔を真っ赤にし、目をあらぬ方向に向けてしかも目尻からキラリと光る物が見えた。

うん、お姫様抱っこして悪かった。でもその顔は……男としてどうかと思うぞ？

「すみません。でも地面とキスするよりはマシでしょう？」



「……何も言えないのが恨めしいぜ」

一夏、小さい事は気にするな。女々しいと思われるぞ？

# Interlude out

「じゃあ次は織斑くんが奈々瀬くんをお姫様抱っ  
」

「よし、続いて武装の展開に移る。織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし、では始める」

織斑先生のナイスカットインにより、一人の女子生徒の野望は密かに潰えたのだった。

一夏は集中し、雪片を展開させた。一夏は満足げだが、織斑先生とは求めているレベルが違う。  
つまり

「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

もつと早く出せとダメ出しされた。まあ、こればかりは仕方が無い。

「セシリア、武装を展開しろ」

「はい」

セシリアは一夏よりも早く、スターライトmk?を展開させた。射撃準備すら完了させている。さすが代表候補生だけある。

「さすがだな、代表候補生。ただし、奈々瀬を撃ちたい気持ちとは分からんでもないがそのポーズはやめろ。ちゃんと銃身を正面に展開出来るようにしろ」

セシリアが展開させたスターライトmk?の銃身はユウの眉間にピタリと合わせられ、かつロックオンまで完了していた。

「申し訳ありません。次は注意される前に引き金を引きますわ」

「直せ。いいな?」

「……はい」

さらっとセシリアが怖い事を言った気がするが……何かの冗談だろう。そう信じたユウなのであった。

「ではセシリア、近接用の武装を展開しろ」

「えっ。あ、はいっ」

織斑先生は続いてセシリアに近接武装の展開を要求した。

いきなりでビックリしたセシリアだが、すぐさまスターライトmk  
?を収納し、近接用の武装を展開させる。  
しかしなかなか武装が現れない。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。」

ああ、もうっ！ 《インターセプター》！

セシリアは武器の名前をヤケクソ気味に叫んだ。すると小型のブレードがセシリアの手に現れた。

武装の名前を呼ぶという手法は初心者用だ。代表候補生が使<sup>つたな</sup>うには拙すぎる。

「……何秒かかっている。お前は実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ ですから、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑との対戦で初心者に簡単に懷を許していたように見えただが？」

「あ、あれは、その……」

墓穴を掘ったセシリアは織斑先生に指摘され、一夏を睨みつけた。

（ユウ！ 何とかしてくれ！）

（僕は戦い方を指定したりなどしませんでしたか？）

元はと言えばユウの作戦のせいなのだが……と言わんばかりに一夏はユウに視線を送るが、ユウはアフターケアなど知らんとばかりに顔を逸らした。

「さて、最後は奈々瀬だな。武装を展開しろ」

「はい」

ユウはぐずる一夏を無視し、すぐさま武装を展開させた。させたのだが……

（どうしてまた固まるんだ！？）

またもや織斑先生を含む全員が呆然としている。

「あの……展開終わりましたけど……」

ユウの声に織斑先生がいち早く復活し、続いてやれやれとため息をついた。

「さすがだ奈々瀬。お前の技量には心底驚かされる。だが……」

「……だが？」

（またもや織斑先生がデレた！？ まさか一日に二度も拝めるとはな……）

ユウの心の声に、それは違う！ と普段の織斑先生なら言っていた

だろう。ただ、今回は動揺して調子が狂っていた。仕方があるまい。

「誰が武装をフルオープンしろと言った!？」

コウが右手にビーム・マグナム、左手にビーム・ガトリングガン、さらに両腕のビームサーベルをトンファー状に展開させ、拳句の果てに4つのバインダーに一本ずつ収められている2本のビームソードと同じく2本のビームサーベルを隠し腕を使って展開させていたのだから。

「文脈から察するに射撃武装を展開した後近接武装も展開しろとか言われそうだったんで、纏めて展開しました」

「普通のISはそんなに多くの武装を一片に展開出来るはずが無いんだが……」

織斑先生は眉間に指を当て、うんうん唸っている。

確かにこの光景は異常だな、とコウは苦笑した。

「なんて言うか……色々とやり過ぎました。すみません」

「……もういい。今日の授業はここまでだ。頭が痛い。山田先生、後は頼む」

「は、はい……大丈夫ですか？」

「大丈夫だと言っている。……後でアイツを問い詰めねば……」

何やらブツブツ呟き、織斑先生は頭を押さえながらふらふらと校舎の方に去っていった。

「え、えーと……これで授業を終わります」

山田先生の合図で、生徒たちは呆然としたまま解散を始めたのだっ  
た。

Shift 3-1 「日常の授業風……景？」（後書き）

一夏「どうも今回は最後の方のキレがユウらしくないな」

和花「たまにはそういう日もあるって事ですな」

ユイ「ユウはね、女の子の日が近付くとあんな風になるんだよ？」

一夏& amp・和花「女の子の日!？」

ユウ「冗談はよして下さいよ姉さん！

それと二人は簡単に信じ込まないでください！」

HAL「さて、次回はいよいよあの娘が登場するぞ！」

ユウ「次回のタイトルは『月夜の出会い』です。

久々にタイトル復活ですね」

一夏& amp・和花「次回も見逃すな！」

8 / 29 改稿しました。

## Shift 3-2 「月夜の出会い」(前書き)

えーと、前話の投稿は別に間違っただけでボタン押したとか、そういう訳じゃないんです。

ちょっと調子が良かったんで投稿したんですけど、なんか全然気付かなくてビックリしました。

今は夏休みなんで、週末の22時の他、調子が良ければ火曜か水曜の22時にも投稿出来そうです。

連絡遅れてすみません。

では、本編をお楽しみ下さい。



## Shift 3 - 2 「月夜の出会い」

夜。とある一人の少女が、IS学園の正面ゲートの前に立っていた。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

左右それぞれを高い位置で結んだ、肩に掛かるか掛からないかくらいの艶やかな黒髪が夜風に靡いている。

彼女が持つボストンバッグと比べて、彼女の体は不釣り合いなほど小柄だ。

顔立ちは日本人に似ているがよく見ると違く、鋭角的でありながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は、中国人のそれだった。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

そう言つて少女は上着のポケットから一枚の紙切れを取り出す。

くしゃくしゃになったそれは彼女の大雑把かつ活発な性格を如実に示していると言えるだろう。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよ」

何とも不親切な事に、紙切れに詳細地図は載っていなかった。

少女は紙切れを不満と共に上着のポケットにねじ込んだ。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

ぶつくさ言いながらも、足は動き続けている。どうやら行動派らしい。

（誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人）

地図を持っていないが、とりあえず敷地内を歩きながらきよろきよると人影を探す。

しかし、現在の時刻は午後八時過ぎ、どの校舎も灯りが落ちているし、当然生徒は寮にいる時間だった。

（せめて到着時間くらい配慮しなさいよ。これだから政府の連中は……）

少女の我慢が限界に達し、本気でISを用いて空を飛ばうと考えた矢先、10メートル程前方のベンチに座っている人影を確認した。

月は雲に隠れ、暗がりのためシルエットしか分らないが、IS学園の白い制服は夜でもよく見える。

しかも良く目を凝らしてみると、下はスカートではなくズボンだ。すぐ少女の頭の中に図式が現れる。

スカートではなくズボン    II    IS学園に一人しかいない男子生徒

II    織斑一夏

（まさかこんな所で会えるなんて……ラッキー！）

少女は予期せぬ再会の予感に、胸の鼓動が速まっていくなを感じた。

（あたしってわかるかな。わかるよね。一年ちよっと会わなかっただけだし）

久々の再開を前に、少女の心は期待と不安で入り混じる。

（大丈夫。大丈夫！ それにわからなかったら、あたしが美人になつたからだし！）

しかし少女は持ち前の超ポジティブ思考にスイッチを入れ、止まっていた歩みを再開する。

同時に、幼馴染との感動の再会が脳内で組み立てられる。

「いち」

1メートルの距離まで詰まった時、少女は幼馴染の名前を呼ぼうとした。

緊張のため声が裏返ってしまったがそんな事は些末事だ。もっと大きな問題が少女の心を塗りつぶした。

「……何か？」

ベンチに座っていた少年が彼女の方に顔を向けた。声は彼女が知る幼馴染とは似ても似つかない。

雲が晴れ、月明かりが二人を照らす。

「アンタ……誰？」

月明かりに照らされた少年は、銀髪のショートカットにスカイブルの瞳、体型はスマートで、声と同じく少女の知る幼馴染とは似ても似つかない。

（え、えっと……何コレ？ 何で一夏じゃないの？）

少女はただひたすら困惑した。一夏以外に男子がいるなど聞いてい

ない。

対する少年は少女を一瞥し、少し考えた後、声を発した。

「こんばんは」

「へ？ あ、こんばんは……じゃなくて！」

「じゃ、行きましようか」

「え？ 行きましようか？」

「本校舎一階総合事務受付……で合ってますよね？」

少年は勝手に歩いていく。少年の話の進め方に置いてけぼり感を感じた少女は、少年の後を追いつながら問いかける。

「え？ う、うん……っていつか何勝手に話進めてんのよ！」

「それじゃ順を追って説明しましょうか。まずそのポストンバッグ、今の時期そんな物を持ち歩いているのはIS学園への転入生か……誰かの頭を入れて持ち歩くような変質者くらいです」

「前者で当たりだけど……後者は絶対有り得ないから」

もはや少女の緊張感は吹き飛んでいる。ツツコミが冴えるのも当たり前だ。

「あはは、そうですね。次に時間帯ですけど、今の時間帯に出歩く寮生はそういませんから、ポストンバッグの件と合わせて転入者と考えられます」

「アンタはどうなのよ？　なんでこんな時間にあんな場所にいたの？」

「クッキーが焼き上がるまで時間がありましたし、今日は月が綺麗なので夜の散歩を……ね。それにここは男の居場所がほとんど無いですから」

「そう！　それよ！　アンタ本当に男なの！？　IS学園に入学した男は織斑一夏ただ一人って聞いてたんだけど！」

少女は声量が自然と上がるのを感じた。人違いなんていつ以来だろう。

今更ながら恥ずかしさが込み上げてくる。まさか赤の他人を幼馴染の名前で呼ばうだなんて。

これでさらに抱きつこうものなら恥ずかし過ぎて死ぬ所だった。

少年はあちゃー、とぼつの悪い顔をして頭を掻いた。

「あー……、僕の場合は秘密裏だったものですから。メディアにも取り上げられませんでしたし」

「本当は男装趣味の女じゃなくて？」

「違います！　僕は男です！」

少年は”女”の部分にやけに反応してきた。どうにもあからさまな気がしてならないが……。

「それより、貴女はその織斑一夏と因縁浅からぬ関係、とお見受け

しますが？」

「……………」

少女は口をつぐみ、話を続けるよう促す。別に因縁という程深い関係では無いというツツコミは心の中だけですることにした。

「先程一夏の名前を口にしようとした。それだけで親しい間柄だと察しがつきます。それに、この時期の転入……貴女は最初はIS学園に入学する気は無かった。しかしメディアで織斑一夏の名が取り上げられ、かつIS学園に転入するという情報も入ってきた。だから政府に無理を言ってIS学園に転入させてもらった……こんな所ですかね。どうやら貴女は一途で健気な人らしい」

「……そうよ」

全て合っている。転入までの経緯も、少女の心情も。

「ねえ、アンタも一夏の事を名前で呼ぶからには、それなりに親しいんでしょね？」

「一夏とは小学校の頃ちよつとだけクラスが一緒だったんです。すぐに離れ離れになりましたけど」

成程、と少女は思った。少女は一夏と小学校高学年から一緒だった。少年と入れ違いになったのかもしれない。

「アイツ……一夏は元気？」

「ええ。それに、女子たちとも仲良くやってますよ」

「ッ!？」

少年の一言で少女の心は凍りついた。そう、IS学園に男子は目の前の少年を含めて二人しかないのだ。

一夏は鼻屑目に見てもカッコイイ。性格も良い。そしてISを扱える。女子からすればこんな優良物件そうは無いだろう。

「……一夏は、誰かと……付き合ってるの？」

「傍目から見た感じですけど、アタックを掛けている女子が数名。

……ただ、一夏本人は恋に関する自覚が無いですから。進展はほとんど無いみたいです」

「……そう」

少女の意を決した質問に対する答えは、彼女が思った程深刻ではないようだ。まだ望みはある。

「そうそう、一夏は一組のクラス代表になりましたから、貴女もクラス代表になれば何かと接する機会が増えるかもしれないですよ？」

「え!？」

少年からもたらされた情報は意外な物だった。クラス代表になれば一夏と接する機会が増える。しかし

「この時期にクラス代表を譲ってもらえると思う？」

弱気な少女の問いに、少年は歩みを止めた。

少女が怪訝に思い、少年の前方を確認すると、灯りの点いたカウ  
ンターが見える。

どうやらあそこが総合事務受付らしい。

少年は振り返り、少女を見た。目が合う。スカイブルーの瞳は全て  
を受け容れるような深さを持っており、吸い込まれそうな錯覚を覚  
える。

「何弱気な事を言ってるんですか？ 貴女程の実力者、今の一年生  
にはそういませんですよ。中国の代表候補生、ファン・リンイン 鳳鈴音さん？」

少年の口から出た名前に、少女、鳳鈴音は目を見開いた。

「なんであたしの事、知ってんのよ」

「一夏と別れてからは手紙のやり取りをしてたんです。貴女の事も  
書いてあったんで、もしかしたらと思ひまして」

「代表候補生だつて事は？」

「僕は一夏のようにESに疎くはありません。各国の代表、及び候  
補生の名前等は把握しています」

鈴音の直感はある。この男、出来る。

「アンタは知ってても、あたしはアンタの名前も知らないんだけど」

「……そうですね。失礼しました。僕の名前は奈々瀬ユウです。こ  
れからどうぞよろしく願ひします」



少年、奈々瀬ユウは思い出したように自分の名前を口にし、右手を差し出した。

「良い名前ね。案内してくれてありがとう」

鈴音は礼を言いながらユウの握手に応じた。

「ただ案内しただけです。それよりも……これから落とすターゲットは手強いですよ？ 勿論恋敵も」

「分かってるわ。でもあたしに手を貸した以上、もちろん今後協力してくれるわよね？」

鈴音の提案にユウは苦笑し、それでも「期待に添えられるかわかりませんが」と言って承諾した。

「ではこれで。また明日」

「ええ、おやすみ」

鈴音は総合事務受付に、ユウは寮に、互いに背を向けて歩き始める。二人の出会いを知る者はまだいない

Shift 3・2 「月夜の出会い」(後書き)

HAL「さて、今回ご登場頂くのは凰鈴音嬢だ！」

鈴「よろしくね！」

ユウ「ちょちょちょ、ちょっと待って下さい作者！」

HAL「なんだ？」

ユウ「なんて言うか……この出会いは後々影響がありそうな気が……」

鈴「何？ 何の話？」

HAL「お前は何を言っているんだ？」

ユウ「僕が凰さんにフラグを立てたんじゃないかって事ですよ！」

鈴「フラグ？ 何それおいしいの？」

HAL「ユウもち着け！ 安心しろ。」

男としてのお前に一夏ほどの魅力は無い」

ユウ「もち着けじゃなくて落ち着けですよ。」

あと『男として』の部分がすごく気になるんですが……」

鈴「おーい」

HAL「いずれわかる」

ユウ「何ですかその意味あり気な「ちょっと待ちなさい！」

……何ですか鳳さん」

鈴「あたしゲストよね！？ 何で放置プレイされてんのよ！」

HAL「すまん、小さくて気が」

鈴「今何て言おうとした？」

HAL「……何でもない。ユウ、どうやらゲストは

既に少し錯乱しているようだ。控え室へお連れしなさい」

ユウ「分かりました。では鳳さん、こちらへ」

鈴「ちよっ、あたしの出番ってこれだけ！？

待って！ まだ何も言って」

HAL「現実残酷だ。レギュラーの座を奪うのは厳しいぞ、鈴」

和花「テレビ番組じゃないんですけどこれ……」

ユウ「次回は……あれ？ タイトル決まってるじゃないんですか？」

HAL「大人の事情だ」

ユウ「これテレビ番組じゃないんですけど……」

和花「次回もお楽しみに！」

8 / 29 改稿しました。

S h i f t   3 - 3   「騒乱の夜」(前書き)

更新予告始めました。

詳しくはH A L - H A Lの活動報告ページをご覧ください。

### Shift 3-3 「騒乱の夜」

「というわけです！ 織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう！」

クラッカーが破裂音と共に乱射され、紙テープが一夏の頭に乘っていく。

今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた。

各自飲み物を手にわいわい騒いでいる。

「……………」

「良かったじゃないですか一夏、こんな盛大に祝ってもらえて」

ユウはこう言うが、一夏にとっては小指の爪ほどもめでたくない。

（何なんだこのパーティーは）

一夏が壁を見ると、そこにはデカデカと『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれた紙が掛けてある。

どうしようもない事実にただ心の中でため息をつく事しか、今の一夏には出来なかった。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

誤解を与えぬよう言うておくが、さつきから相槌を打っている女子は一組ではない。

辺りを見回すと、会場には一組の人数以上の女子がひしめいている。

「ん？　ねえねえ、このクッキーって誰が持ってきたの？」

女子の一人がテーブルの上に置かれたクッキーに気付いた。

あまりに自然に置かれていたので今まで気が付かなかったらしい。

「あ、それ僕が作ったんです。お口に合えば良いんですけど……」

手作りだと言うユウの言葉に女子の九割が目光らせる。

「本妻の手料理……織斑くんに相応しいか味見しなきゃね」

女子の一人がそう言うて一人の女子を引っ張って来る。

いや、本妻じゃないから、っていうかそのネタ引っ張るのやめて欲しいんだけど。

というユウの主張は女子たちに黙殺された。

「グルメクイン、のほほんさん！　よろしくお願いします」

「あいあいさ」

（のほほんさんってグルメクインだったの！？）

全員が心の中で突っ込んだが、ただのノリだ。気にはしていない。のほほんさんはクッキーを手に取り、まずは香りを堪能する。

「うーん、香ばしいココアの香りがグー」

「丁度ココアが目についたんで、ココア味にしてみました」

（ふむふむ）

何故か全員がメモ帳とペンを取り出し筆記体勢に入っているのは気にしてはいけない。

何故か新聞部副部長までメモしているが、やはり気にはしていないのだろう。

のほほんさんは一通り香りを堪能した後、クッキーを口に運び……

「あむっ」

『ああっ！！』

ちょっと齧ったりとかせずに一口で一気に食べてしまった。

いや、だからそうやって毎回アクション取らなくて良いから、っ  
て言うか大袈裟過ぎるでしょたかがクッキー1枚で。

というユウのツッコミはやはり黙殺された。

「むぐむぐ……」

クッキーを咀嚼するのほほんさんを、女子たちは固唾を吞んで見守る。

「1じくく」



どうやら咀嚼を終えたらしい。のほほんさんの感想に注目が集まる。

「……………うまうま」

『全軍ツ！ 突撃イイイ！！！！』

のほほんさんが感想を述べた直後、女子たちがクッキー目掛けて突撃した。

「美味しい！ まるで専門店のクッキーみたい！」

「外はサククリ、中はしつとり……………凄い！」

「ココアの香りも甘さも上品だね」

「紅茶欲しくなるなあ」

成す術も無く蹂躪へしされていくクッキー達。だが彼らは歓喜の声を上げて逝った。

サクサクと、食される歓びの声を上げて逝った。

（作った甲斐はあったかな）

ユウが感傷に浸かっている間に、クッキーは女子たちによって殲滅されていた。

そんなに美味しかったのかと、ユウは目尻に熱い物が溜まっていくのを感じた。

クッキー達は満足して逝った。それは喜ばしい事だ。

たとえば作った本人が全く食べられなかったとしても、それは喜ばし

いことなのだ。

（味見で食べたけどさ……せめて一枚くらい残してくれても良かったのに）

『奈々瀬くん！ いや、奈々瀬先生！』

なんとなくセンチな気分になっているユウに、女子たちから声が掛けられた。

何事かと振り返ると、そこには両手を握って合わせながら頭を垂れる女子女子女子

（僕はいつから新興宗教の教祖になったんだ！？）

心の中で突っ込むユウをよそに、女子たちは己の願いを口にする。

『作り方を教えて下さい！』

「はあ！？ ……わ、分かり、ました……？」

ユウは女子たちの気迫に気圧され、目を白黒させながら首を縦に振ってしまった。

『じゃあ今度の週末！ 是非お料理教室を！』

「いや、僕にも時間の都合が……」

『是非お願いします！ 奈々瀬先生！』

「……分かりました。何とかしてみます」

押しに弱いユウ。否、女子の押しが強過ぎたのだ。

どんなに空気の読めない男でも、イエスと頷くより他は無いだろう。

「まあ、なんて言うか……頑張れよ」

「今更現れて何を言っているんですか一夏……」

今更ながら現れてユウを慰める一夏。だがユウは知っている。

一夏は明日からまた女難に苦しむ事になるという事を……。

「こんばんは〜！ 新聞部です。話題の新生、織斑一夏君と奈々瀬ユウ君に特別インタビューをしに来ました〜！」

どうやら今までクッキーに夢中になっていた新聞部が仕事を始めたらしい。

会場のボルテージがより一層高まる。

「私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

一夏とユウは薫子から名刺をもらう。

「あ、奈々瀬くん、クッキー美味しかったよ。御馳走様。それと週末のお料理教室も参加するからね」

「あ、あはは……お手柔らかに」

また一人厄介なのが来る……ユウはそう思って冷や汗を流した。薫子はユウから離れ、一夏へのインタビューを開始する。

「ではずばり織斑君！ クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと……まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もつといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的！ ……じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして」

薫子は啞然とする一夏を放って、一夏に向けていたボイスレコーダーを今度はユウに向けてきた。

「じゃ、ユウ君のコメントもちょうだい」

「あ、はい。一夏はシャイなだけで女の子にはすっごく興味がありますから、そこは履き違えないで下さい」

「さすが本妻。夫を庇う発言、流石だわ」

「今の言葉のどこにそんな要素が含まれているんですか……」

「これは捏造じゃないわね」

「そう言われると余計不安なんですけど！？」

そんな事無いわよー。と、子供みtainな無邪気な笑顔で薫子は答え

た。

そして今度はセシリアにインタビューを始めた。  
インタビューを受けているセシリアはコロコロと表情が変わって、  
見ていて飽きないな、とユウは思った。

「じゃあ、最後に三人の写真ちょうだい。ささ、並んで並んで」

そう言われて、右からセシリア、一夏、ユウの順に並んだ。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

いきなり出された問題に一夏は目を白黒させる。

「え？ えつと……に」

「37・375」

「わお、ユウ君正解！」

カメラのシャッターが切られる。だが……

「なんで全員入ってるんだ？」

何故か一組の全メンバーが、青いハリネズミもかくやという速さで一夏の周りに集まっていた。

そのせいかセシリアと一組のメンバーがワイワイと言い争い、一夏がそれに巻き込まれる。

「やれやれ」

ユウは騒ぎから少し離れた場所で、壁に背をもたれて一息つく。そこへ薫子がやってきた。

「お疲れ様〜」

「お疲れ様です。良い写真撮れましたか？」

「モチロン。あ、そうそう。たっちゃんから伝言」

たっちゃん。その単語を聞いたユウの雰囲気は一瞬で切り替わる。無論悪い方に、だが。

「『いずれスカウトする事になるから、その時はヨロシク』だって」

「そんな……もう少し平和でいられると思ったんですが……」

「あはは……少しは同情するよ。じゃ、頑張つてね」

薫子はそう言って去っていった。冗談じゃない、もう目を付けられたって言うのか。

頭を抱えるユウを傍目に、夜は騒がしく更けていった。

Shift 3-3 「騒乱の夜」(後書き)

ユウ「今回は散々でした……」

HAL「御愁傷様でいゝす(笑)」

ユウ「いきなり何ですかその言い草は!？」

HAL「字面通りの意味だ」

ユウ「意味が」

??「ふっふっふ、私から逃れる術など有りはしないわ」

ユウ「うつ、背筋に寒気が……それに誰かに見られている気が……」

8/29 改稿しました。

S h i f t    3 - 4    「人の話はちゃんと聴け    b y 千冬」 (前書き)

外伝の執筆があまりにも進まなくて泣きたいよo r z



Shift 3 - 4 「人の話はちゃんと聴け by 千冬」

「織斑くん、奈々瀬くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝、ユウと一夏が席に着くなりクラスメイトが話しかけてきた。無論女子の、だ。

「転校生？ 今の時期に？」

一夏は怪訝な顔をする。四月のカレンダーはまだ役目を終えていない。

なぜ入学ではなく転入という形になったのか。一夏が気になるのはそこらしい。

それより一夏は女子と話す事に対して少しずつ慣れてきているようだ。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

代表候補生という単語に敏感に反応する女子が約一名。

「あら、わたくしの存在を今更」

「ふーん。ユウ、何か知らないか？」

「一夏、せめてセシリアさんが言い切ってから質問して下さい」

「あつ、悪い」

「一夏、人の話は最後まで聞けと小学校で習っただろう……」

「……今の篠ノ之さんの言葉には全面的に賛成ですわ」

何時の間にかやってきて言い放った篝の言葉にセシリアは何度も頷き、一夏は「悪かった」と数分間平謝りさせられた。  
良い子はちゃんと人の話を聞こう。

「で、ユウは何か知ってるか？」

「知ってるも何も、昨日会いましたよ」

「……何っ（ですって）！？」「」

がたたたつ。三人がユウを問い詰めんとばかりにユウに詰め寄る。  
ユウはまあまあ、と三人を落ち着かせた。

「で、どんな奴なんだ？」

一夏の質問に、ユウは一旦空を見やり、口を開いた。

「それはそうと一夏、クラス対抗戦の準備は進んでいるんですか？」

「おい、今露骨に話題変えただろ」

「いずれその意味が分かりますよ」

ユウに邪険にあしらわれ、一夏は不満気だ。そこへセシリアが割り込んだ。

「そう！　そうですわ一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦

的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持っているのはまだクラスでわたくしと一夏さん、そしてユウさんだけなのですから」

セシリアは『だけ』の部分をえらく強調して言った。

セシリアの言葉に対し一夏は思い出したように再びユウに詰め寄る。

「ユウ」。今回ばかりは手伝ってくれないか？」

一夏の言葉に、箒とセシリアの殺気の籠もった視線がユウを貫く。

（（これだからユウ（さん）は……））

（またか……）

ユウは二人の視線にため息をついた。

「確かに、そろそろ僕も手伝わねばと思います。零落白夜の件もありますし。しかし今回も時間的に……」

「時間って……ああ、お料理教室か」

ユウの、「料理は前準備が大切なんです」という補足に一夏は納得して苦笑した。

一夏がクラス対抗戦に勝てば学食デザートの半年プリパスが配られるというのに、ユウのお料理教室に参加しようとは。

女子はなんて現金なんだ、とユウは苦笑せずにはいられない。

「奈々瀬先生！ お題は何ですか？ 私ケーキが良いんですけど」

「あつ、私はプリンが良いー！」

お料理教室という単語を聞きつけたクラスメイト達が好き勝手に希望のお題を言っていく。

「織斑くん、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

クラスメイト達はさらに一夏にエールを送ってくる。

二兎を追う者は一兎も得ず、ということわざがユウの頭の中をよぎった。

いや、お料理教室は確実に得られるか。

「今のところ専用機を持つてるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

クラスメイトの一人がそんな事を言った。だが、その情報が通用するのは昨日までだ。なぜなら

「その情報、古いよ」

教室の入り口から声がした。ユウが昨夜聞いた声となんら変わり無い。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン 鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

昨夜出会った鳳鈴音がドアにもたれ、意味も無く格好付けていた。

（もういいや。お料理教室の事だけ考えよう。どうせ一夏目当てなんだし）

最早ユウに話題についていく気は無かった。

教室の喧騒をどこか遠くの事のように聞き流しながら、ユウは今週末のお料理教室をどう乗り切るか、ただそれだけをひたすら考えた。

## Interlude 奈々瀬ユウ

お料理教室の料理、何にするべきか。出来れば時間も手間も掛からない方がよい。

やはりシンプルにクッキーで行くか？

しかしクッキーでは少しシンプル過ぎないだろうか？

昨日のココアクッキーは盛況だったし、そんな事は無いと思うが……。

## パシーン

そもそも『お料理』教室なんだから、お菓子に限定する必要性はない。

だがやはりココアクッキーが盛況だったわけで、文脈からしてクッ

キーの類を教えて欲しいと見るのが妥当だろう。

パシーン

とりあえずクッキーで行こう。全ての条件にマッチするのは今のところこれしかないし。

となると、後はどんな味で行くか。こっちも

「奈々瀬」

「あ、はい」

ん？ 今誰かに呼ばれたか？ 反射的に返事を返してしまったが……確認するとどうやら織斑先生らしい。

「この答えは？」

「クッキーです」

パンツ！ 出席簿アタックの一撃で完全に意識が外に向いた。無意識に口をついて出てきた言葉が答えと捉えられたらしい。ガッデム。やってしまった。

「まだ昼には早いぞ。お前らしくない。何を考えていたんだ？」

「……すみません。以後気を付けます」

言えるわけ無いだろ、週末のお料理教室の事を考えてましたとか。言ったら「下らん」って一蹴されるに決まっている。

というか千冬さん、見た目も実績も世界でトップクラスなのにどう

して家事が

パンツ！

「下らん事を考えるな。授業に集中しろ」

「……はい。すみません」

自分に非があれば素直に謝る。たとえ心を込めなくても建前上は。単純だがとても大切な事だ。

# Interlude out

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ！」

昼休みに入り、開口一番箒とセシリアが一夏に文句を言ってきた。

「なんでだよ……」

箒とセシリアは、午前中だけで山田先生に注意5回、織斑先生に3回叩かれている。

意中の男性にもう一人女がいたのだ。集中できなくなるのも仕方が無い。

「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

「そ、そうですね。行つて差し上げないこともなくつてよ」

と、ここで一夏はユウがいない事に気付いた。

「あれ、ユウは？」

「奈々瀬くんなら、なんかブツブツ言いながら教室を出ていったみたいだよ」

「ふうん……珍しいこともあるもんだな。じゃ、俺たちは学食行くか」

この後学食でまた一騒動あるのだが、簡潔にまとめると

『一夏の女性関係は面倒な事この上ない』

という事だ。一夏、面倒でも事情くらいちゃんと説明しておこう。

教室を出て単独行動をしていたユウは、家庭科室に来ていた。



「あつたんだ……家庭科室」

そりゃ学校なんだから、あるに決まってるだろ。と、一夏がいれば答えるだろう。

ちなみに料理部の拠点もおそらくここだと考えられるが、昼休みに入っても人気は無い。

「場所は……ここでもいいか。2クラス分入れば充分なんだし」

家庭科室の広さは、元々複数クラスでの授業を想定されていたのか、結構広い。

ユウは入口から教室の広さを測ると、続いて調理器具の確認に移る。

「やっぱり国立だけあつて器具は豊富だな。IHのコンロに食器洗濯機、備え付けのオープンである。こんなの普通の学校にある訳無いじゃないか……」

さすがIS学園。如何なる面においても普通の学校を遥かに凌駕するクオリティだ。

これなら問題などあるはずが無い。

「十分十分。さて、あとは材料だな……」

「あつ、な〜ゆんはっけ〜ん!」

いきなり声を掛けられ、ユウは声のした方を向いた。

「……驚かさないで下さいよ、のほほんさん」

家庭科室の入り口にのほほんさんが立っている。

その他に女子が数名、のほほんさんの後ろから室内を見回している。

「ごめんごめん。それでそれで、なにしてるの〜？」

「下見です。……お料理教室の」

「先生！　ここでやるんですか？」

のほほんさんの後ろにいる女子の一人が手を挙げて質問した。別にウソをつく理由は無いので、ユウは正直に答える。

「そうなりますね。でも、材料の調達が……」

「先生！　私手伝います！」

また同じ女子が手を挙げて言った。その後、私も、私も、と、全員が手を挙げた。

どうやら手伝ってくれるらしい。

「じゃあ、お言葉に甘えさせて頂きます。お料理教室のお題はクッキーで行こうと思ってるんですが」

一通り説明すると、全員「わかりましたー」と言って去っていった。頼んでおいてなんだけど、本当に大丈夫かと、少し不安になるユウなのであった。

Shift 3-4 「人の話はちゃんと聴け by 千冬」(後書き)

一夏「おい作者！ 何で俺と鈴の絡みがごとくカットされてるんだ！？」

HAL「え？ だって尺足りなかったんだモン」

一夏「アニメじゃないんだぞ！？ 読者が混乱するだろうが！」

HAL「大丈夫大丈夫、きっとみんなアニメくらい見てくれてるSA」

ユウ「それに、この作品の主人公は僕であって君ではありません。

最初の前書きにも僕主体で行くと確かに」

一夏「だからってこんな横ぼ」

HAL「さつさと先に進めたいんだ。無駄口叩いてないでさつさと行け」

一夏「これは30分アニメか！？」

鈴「……………あたしの出番は？」

ユイ「むしろ私の出番は？」

HAL「DA MA RE」

鈴&amp;pp:ユイ「ハイ、黙ッテマス……………」

8 / 29 改稿しました。

S h i f t    3 - 5    「複雑過ぎる乙女心」 （前書き）

昨日はエヴァの日だったんで、多分皆も生で見たかったんじゃないかな〜と思って更新しませんでした（笑）

久しぶりの河井さん暴走回です（笑）

では、本編をお楽しみください。

## Shift 3・5 「複雑過ぎる乙女心」

### Interlude 奈々瀬ユウ

現在は夕食後、就寝までの自由時間。場所は寮の自室。

「ねえねえ、奈々瀬くん！ 見て見て！ この娘、可愛いよね〜。  
これが男だなんて信じられないよね〜」

備え付けのパソコンでR・18なゲームをしながら目を輝かせているのは、ルームメイトの河井和花さんだ。

当然ながら彼女は女で、かつ18に満たないはずなのだが……何故平然とやってるんだ？

キラキラした目をこちらに向ける河井さん。うん、何を言いたいの  
が良く分かるよ。

「また女装しろなんて言われてもしませんからね」

「ちえっ、ケチ」

「女の子がそんな言い方する物じゃありませんよ」

「奈々瀬くんのいけず」

「だからといって言い方を変えれば良いという物でもありません」

「いいもんいいもん！ 私だってお料理教室参加するもん！ 奈々瀬くんにとびつきり可愛いエプロン着せちゃうもん！」

「どうぞご自由に。ただ、エプロンは自前があるので結構です」

邪険にあしらわれたせいか、河井さんが押し黙る。

ちなみに僕はベッドに座ってお料理教室のレシピを作成中だ。

河井さんの方に背中を向けているので河井さんの表情を知る事はできない。

「なあゝなせくゝん」

突然背中から河井さんの声が聞こえた。

ちなみに今のイントネーションはルンが「ふうゝじこちゃゝん」と、ベッドにダイブする時の物と同じだ。

……ダイブする時の！？

慌てて振り返ると、目の前には某怪盗よろしくニヤケ顔でダイブする河井さんの姿が。

さすがに服は脱いでないのであしからず。

「な！？ ……わぶっ！」

僕は勢いのまま河井さんに押し倒された。あれ？ 似たような状況が前にもあったような……。

「邪険にあしらわれるとは……ならば！ キミの視線を釘付けにするッ！」

そう言っていきなり服を脱ぎ出す河井さん。  
待て、セリフが色々可笑しい。それからそんな方法じゃ目を釘付けにするどころか思いつきり逸らされるぞ。

しかし今の僕にこの状況から逃れる術は無い。だって河井さんの足が僕の腰をホールドしてるんだよ？

しかも何故か外れないし。何コレ、強制イベント？

「とっ」

河井さんが服を脱ぎ捨てた。下着の上から見え隠れする果実はそれなりの大きさだった。だいたいこんなくらい？

というか花も恥じらう乙女がそんなこととして良いのか？ 良いのか！？

「あつ、奈々瀬くん顔赤いよ」

「もう気が済みましたか？ 済んだのなら早く退いて下さい」

さすがにずっと直視していると誤解されそうなので顔を逸らして両手をホールドアップの形にする。

だがしかし、僕は河井さんの思考を見誤っていた。

「……これで終わりだと思う？」

「……へ？」

河井さんの目が妖しく光った。はっ！ 今脳裏にひらめきの光が奔った。

この状況はものすごくマズイ。そして時既に遅し。敵の謀略に嵌められた僕は成す術も無く陥落するのだ。

「花も恥じらう乙女の柔肌を見た以上、タダで逃がすと思う？」



「……………」

いや、別に見たいなんて一言も言っていないし、むしろそっちが勝手に見せてきたんじゃないか。

とは言えず。しかし沈黙をどう捉えたのか、河井さんは顔を近づけてきた。

「……………あの、一体何を」

「え？ 何も言わないからオーケーだと思って……………」

「何が？」

「キス。」

「はぁ！？」

どうしてそうなる！？ 思考パターンがちょっとずれてると前々から思ってたけど、まさかここまでとは……………。

「待って下さい！ そんな軽々しくしないで下さいよ！ ……………それに僕初めてだし」

「初めて！？ なら奪うしかないじゃないか！」

最後の方の呟きを目ざとく聞きつけた河井さんは、今まで以上に強引に唇を奪いに来た。

マズイ！ これは非常にマズイ！

僕は必死に河井さんのホールドから逃れようとするが動けない。

くっ、どうして僕は河井さんのホールドから逃れられないんだ！？

呪いか何かか！？

「大丈夫、痛くしないから」

痛いキスって何なんだよ！？ ヤバ、ロックオンされたし！  
河井さんの顔がだんだんと近付いてくる。  
くっ……このままじゃ犯られるッ！

ドンドンドン！

突如部屋のドアが叩かれた。突然の出来事に河井さんの動きが止まる。

「……………どうやら来客みたいですよ？」

僕の言葉に河井さんはしばし考えた後、再び僕に顔を近付け始める。  
何故に？

「きつと間違いか何かだよ。こんな下品なノックする人なんて知らないもん」

下品って……音だけで決め付けるのはよ

ドンドンドン！

「奈々瀬ユウ！ 居るんでしょ！？」

ドアが再び叩かれ、外から声が聞こえた。この声は確か

「……鳳さん？」

「何？　もしかして奈々瀬くん……女がいるの！？」

「違います。どうやら僕のお客さんみたいです。……退いてくれませんか？　あと服もちゃんと着て下さい。誤解されたら面倒ですから」

はいはいと言って河井さんはあっさりと退いてくれた。

「はぁ……興がさめたわ」

あんた一体どこの武士だよ。

河井さんが服を着たのを確認してからドアを開ける。

「遅い。いつまで女の子待たせんのよ」

「……すみません」

ドアの前にはボストンバッグを抱え、目尻に涙を浮かべた鳳鈴音が立っていた。

## Interlude out

現在ユウは自分のベッドに腰掛け、和花のベッドに座る鈴から話を

聞いていた。

「つまり、約束を違えた一夏に失望して怒り、そんな自分に嫌気が差してどうすればいいか迷った拳句、僕の所に来た、という事ですね」

「……………」

ユウの確認に鈴は無言で頷く。その顔にはいつもの自信や明るさは微塵も感じられない。

「別に鳳さんは悪くないと思いますよ？」

「でも……アイツ、私の事嫌いになったかも」

鈴から弱気な言葉が漏れる。重症だ。ユウはそう感じ取った。

「まだ幼馴染の域を出ませんから、致命的なミスだとは思えません  
が……………」

「え？」

「まだ仲直りのチャンスは残っている、という事です」

鈴の顔から翳りが消えた。機会を逃さずにユウは続ける。

「クラス対抗戦なら、仲直りをするには絶好のチャンスです。もしかしたら、トクベツになるチャンスも巡って来るかも知れませんか？」

トクベツ。その単語を聞いた瞬間、鈴はベッドからすくつ、と立ち上がった。

「相談に乗ってくれてありがとう。後は自分で何とかする」

そう言つて鈴はさつさと部屋を出て行つた。さすがは行動派、とユウは苦笑した。

「ねえねえ、奈々瀬くんは恋のキューピッドでもやってるの？」

和花がさっきまで鈴が腰掛けていた所に腰掛け聞いてきた。

「否定はしません」

ユウの答えに和花はふうん、と何度も頷く。そしてとんでもない事を言つた。

「でもそれじゃ、奈々瀬くんの命を狙う人がまた一人増える訳だね」

「……………？ それは一体どういふ……………！？」

少し考えてユウは気付いた。気付いてしまった。一夏に女を押し付ける事が、自分の首を絞める事に繋がってしまうという事を。しかしユウは諦めない。

（いや、誤解を解く機会はずる来る）

まだユウには起死回生の一手が残っているのだから。

「……………もう寝ましようか」

「……そうだね。もう遅いし」

ユウの提案に和花が乗り、二人は同時に床についた。  
未だに和花が夜這いをかけてくるのではないかと心配なユウだが、  
今日も和花が夜這いをかけてくる事は無かった。

そして時間は過ぎ去り、金曜の放課後。家庭科室。

「じ、これは……」

ユウはとんでもないものを目にする。

### Shift 3-5 「複雑過ぎる乙女心」(後書き)

HAL「今回はアンケートを取ろうと思う」

ユウ「いきなりですね。で、どんな内容なんですか？」

HAL「クラス対抗戦の乱入者についてだ。詳細は以下を見て欲しい」

Q・クラス対抗戦の乱入者はどれが良いと思う？

1・原作通りでok。

2・せっかく原作にガンダムシリーズ載せてるんだから、設定はともかく有効に使うぜ！

3・1とか2とか、片方だけなんてどんなイージーゲーだよ！  
両方出しちまえ！

HAL「回答は感想かメッセージで送って欲しい。

回答期限は9月2日までだ」

ユイ「2と3については、一応参考までにどんなのが良いか、言ってくれると助かるなあ」

HAL「なんだユイ、いたのか？」

ユイ「作者が本編で使ってくれないからね。こっちに出るしかないの」

8 / 29 一部改稿しました。



### Shift 3-6 「平和とは長く続かない物である」(前書き)

前回のアンケート締め切りました。2で行きます。

外伝始めました。場所はこちら。

<http://ncode.syosetu.com/n2667w/>

来週は大学の講義があるので更新できそうもありません。

Shift 3 - 6 「平和とは長く続かない物である」

金曜日の放課後、家庭科室。

ユウは授業終了後、すぐに隣の準備室で準備を始めた。  
時間が経つにつれ、女子のざわめきが大きくなってくる。

手伝いをしてくれた女子たちは優秀だったので、準備に時間は掛からなかった。

コンコン、と家庭科室へのドアがノックされ、和花がドアを開けて覗き込んでくる。

「せんせ、そろそろお時間ですよ」

「はいはい、今行きます」

ユウは和花に続いて家庭科室へ足を踏み入れようとして

「……ッ!？」

すぐさまドアを閉めた。

Interlude 奈々瀬ユウ

はあ、はあ……落ち着け、落ち着くんた。とりあえず状況を整理しよう。

僕は一夏のクラス代表就任パーティーで間違つてクッキーなんか作つて来たせいで、その味に惚れ込んだ女子（という皮をかぶった狂徒、もとい教徒）にお料理教室を開いて欲しいと頼まれ、仕方なく嫌々ながら（それでも準備に怠り無く）引き受けた。生徒数はおよそ2クラス分60人くらい。およそ2クラス分60人くらい。（大事な事なので2回言いました）

さて、改めて人数を確認してみよう。

僕は再びドアを開けた。明らかに60対以上の視線が僕を貫く。こつち見んな。

パツと見、当初予定していた数の倍くらいはいる。

よく見るとリボンの色が違う。2、3年生も結構参加しているようだ。

よく若造の料理教室に生徒として参加できるな。恥は無いのか？

プライドは無いのか？

そういえば一夏と箒、セシリア、鈴は見当たらない。どうやら参加していないようだ。

「……どうしてこんなに？」

「奈々瀬くんゴメン」

手を合わせながら申し訳なさそうに前に出てきたのは黛先輩だった。アンター一体何したんだ。

「ちよつと話したら何故かこんなに集まっちゃって」

「ちよつと？　これがちよつとで集まる数とは思えませんか？」

そつ、ちよつと話ただけで集まる数ではない。噂話がよほど広ま

らない限り……ん？ 噂話？ ……あ。

「……しまった。ここはIS学園だった」

そう、ここはIS学園。情報の流通速度は電脳世界でさえ遠く及ばない。

たとえわずかでも情報が漏洩すれば瞬く間に学園全域に広まる。それがIS学園。

「どうかした？」

「何でもありません。それよりも、材料が足りるかが問題です」

材料は確か60人分しか無いはず。足りるはずが無い。

どう工面しようか悩んでいると、後ろから肩を叩かれた。振り返るとのほほんさんが心配するなって顔をしている。

「なぐゆん、大丈夫。こんな事もあるうかと材料は多めに用意しておいたから」

「え！？」

よく確認すると、100人分くらいの材料が用意されている。

うん、何とかなりそうだな。それよりこんなに用意して、余ったかどうかどうする気だったんだろう？

「よ、良かったわね。それじゃ」

がしっ。

「ま ゆ ず み せ ん ば い ？」

「 ! ？ 」

そそくさと立ち去ろうとする黨先輩の両肩をホールドする。  
逃げる気かい？ ダメだダメだ、全っ然ダメだ。

「どうぞ存分に取材なさってください。大好きなんでしょう？ 取材」

（生かして帰すと思ったたら大間違いです。埋め合わせをして頂かなくて……ね）

「……………（コクコク）」

どうやら理解して頂けたようだ。黨先輩は無言で首を縦に振ってくれた。

「時間が押しています。始めましょうか」

僕が振り返って言うと、後ろののほほんさんと河井さんが頷いた。  
この二人は今日、僕のお手伝いをしてくれる。こういう時はありがたい。

「えー、今日はお集まり頂きありがとうございます。講師を務めさせて頂きます、奈々瀬ユウと言います。今日はよろしく願いします」

僕が挨拶をするとパチパチと拍手が起こる。別に要らないのに……。

「今日皆さんに作って頂くのは、シンプルでお手軽なバタークッキ

ーです。意外に思う方が居るかもしれませんが、シンプルな分応用が利き、アイデア次第で

青年講義中。

結論。特筆すべき事は起こらなかった。女子が暴走する事が無ければ、クッキーが爆発する事も無かった。

黛先輩が意外な統率力を発揮してくれたおかげで、人数の多さはあまり問題にはならなかった。

今となつては問題が起こらない方が色々と不安だが、問題が無いに越した事は無い。

お料理教室は無事終了し、僕は晴れてお役御免に

『先生！ 次回も楽しみに待ってます！』

ならないようだ。……はあ。

I n t e r l u d e o u t

「……で、目的の物は手に入らなかった、と」

「うん。予想外に人が多くて」

「それでは材料を多めに用意した意味が」

「まあまあ、責めてもクッキーは出てこないわ」

「……しかしおじよ」

「その呼び方は止めてっていつも言ってるでしょ」

「申し訳ありません」

「話を聞く限り、2、3年生を呼んだのは薫子みたいね。あの子がそんな浅慮せんりょな事するかしら？」

「……と、言いますと？」

「薫子は私たちの計画に気付いていたのかもしれない。そう、ラクして美味しいと評判のクッキーを手に入れようという計画に……」

「まさか……妨害、ですか？」

「可能性は否定できないわ。薫子がそこまでするからには、余程美味いんでしょうね……奈々瀬ユウの手作りクッキー。口惜しいわ」

「もぐもぐ うまうま」

「……本音？ そのクッキーは？」

「余ったから持ってきた」

「あるなら早く出さない！」

「本音でさえ隠そうとする……どうやら余程美味しいわね。  
本音、一枚頂戴」

「これ？ わたしの手作りだけど？」

「……………」

時の流れという物は遠慮なる言葉を知らないらしい。

四月のカレンダーはお役御免となり、今は五月。

既にクラス対抗戦<sup>リーグマッチ</sup>当日まで歩を進めている。

第二アリーナ第一試合は、原作通り一夏と鈴という形になっている。  
現在、ピットで一夏がこれまでにあった事をユウに話している。

「……という訳なんだが……」

「……最悪じゃないですか。どうして君はこう、痛い男になったんですか？」

「知るか！」

鈴と仲直りしていない拳句、また怒らせて試合に臨む一夏。  
もはや救いようが無い。

「やれやれ。一回痛めつけられた方が良いんじゃないですか？」



「マジで?」

「真劍<sup>マジ</sup>で」

ユウの言葉が死刑宣告のように一夏にのしかかる。

じゃあ、頑張つて下さいと言って立ち去るユウだが、去り際に、

「勝つても謝らないとダメですよ」

とトドメを刺し、一夏はハハハ、と乾いた笑いを浮かべた。

「いよいよ始まりましたね」

ピットでリアルタイムモニターを眺めながら、真耶が誰にという訳でもなく言った。

「うむ」

傍に控える千冬が真耶に返事を返した。

現在リアルタイムモニターには、鈴と激しい近接戦闘を繰り広げる一夏の姿が映し出されている。

「せっかくだ。奈々瀬、凰のIS、『甲龍<sup>シエンロン</sup>』について説明しろ」

「何故僕が やります。是非やらせて下さい」

最初は渋ったユウだったが、千冬に一睨みされ仕方なく説明を始めた。

「甲龍は中国の第三世代ISです。何らかの性能が著しく高いという訳ではなく、派手な武装も持っていないせん。

しかし、その性能バランスによる安定性と武装のエネルギー効率には目を瞠る物があり、操縦者次第ではオールラウンドに戦えるだけの戦闘力があると考えられます。

また、甲龍の第三世代型兵器は

」

ユウの説明の途中で観客からどよめきが奔った。

モニターには何らかの攻撃を食らって地面に叩きつけられる一夏の姿が映し出されている。

まるで見えない拳で殴ったかのような攻撃が、甲龍から発せられている。

「なんだあれは……？」

モニターを無言で見つめていた箒がつぶやく。

その呟きに答えたのはユウではなく、同じくモニターを見つめていたセシリアだった。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す、ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

律義に説明したセシリアだが、途中から箒はその言葉を聞いてはいない。

モニターの中で一夏がダメージを受ける度、箒は表情を不安で歪め

ていく。

「……厳しいですね」

「いや……」

「勝負はこれからですね」

「え？」

真耶のつぶやきを千冬とユウが否定した。

「一夏の目はまだ諦めている様には見えません」

「何かを狙っている……という事か？」

ユウの言葉の意味を箒が尋ね、ええ、とユウが返す。

「おそらく、『瞬間加速<sup>イグニッション・ブースト</sup>』だろう。出し所さえ間違わなければ、代表候補生クラスとも互角に渡り合える」

ユウの代わりに千冬が箒の質問に答えた。いまいち理解できない箒にユウが補足を付け加える。

「ちなみに瞬間加速とは、その名の通り、一瞬でトップスピードを出す事によって相手との間合いを詰める技能です。ただし軌道は直線的で、それゆえ奇襲という形で用いられる事が多く、しかし一度使えば見切られてしまうという欠点があります」

「なるほど……」

モニターの中の一夏が瞬間加速で鈴との距離を詰め、零落白夜も用いて斬撃を放とうとする。

だが、一夏の斬撃が繰り出される直前、真耶が異変に気付いた。

「これは！？ 上空に熱源反応！ 大出力ビーム、来ます！！」

「何っ！？」

次の瞬間、強烈な音と衝撃がアリーナ全体に走った。

（……来たか）

ユウは心の中でつぶやき、モニター越しにまだ見ぬ相手を見据えた。

Shift 3 - 6 「平和とは長く続かない物である」(後書き)

鈴「なんでまたあたし達の話がカットされてるのよ!!

あたしの努力はどこ行つたの!? ねえ!!!」

一夏「それになんで戦闘シーンがダイジェストみたいになってんだよ!

俺の活躍は!? 今回結構頑張つたんだぞ!」

HAL「そんな物一々書いてたら話が進まなくなるだろう?

俺だつて早く先に進めたいんだ。我慢しなさい」

鈴「我慢しろつて!? そもそもあたしの登場シーン自体少ないじゃない!」

HAL「まあ落ち着け。次良い所見せれば、

もしかしたら一夏と良い関係になれるかもしれんぞ?」

鈴「えっ!? (赤面)」

第& amp;セシリア「!?!? 待つた! 納得行かん(行きませんわ)!!!」

一夏「俺は仲直りできるなら万々歳だぜ」

一同(ダメだコイツ、早く何とかしないと……)

ユウ「……そういえば、主人公、僕ですよ?

まさか説明キャラになったりしませんよね?」

HAL「安心しろ。お前は不動の主人公だ」

和花「次回もお楽しみに」

Shift 3・7 「最強の盾、最強の矛（前編）」（前書き）

この前の金曜日は外伝の更新をしたのでこちらは更新しませんでした。

是非外伝も見てくださいね

それはさておき。今回のお話の乱入者については、アンケート通りガンダムシリーズから出しました。

そうです。題名が既にネタバレです（笑）

知ってる人は知っている、あの超有名な風神雷神です（笑）

無論弱点も原作通りです（笑）

Shift 3・7 「最強の盾、最強の矛（前編）」

「「！？」」

突如アリーナ内に走った爆音と衝撃に、一夏と鈴の動きがピタリと止まる。

ステージ中央からは、何らかの衝撃で巻き上げられた砂煙が上がっている。

「お、おい！ 一体何が起こったんだ！？」

状況が分からず混乱する一夏に、鈴からプライベート・チャネルが飛んできた。

『一夏、試合は中止よ！ すぐにピットに戻って！』

一夏はその言葉に尋常ならざる空気を感じ、すぐにピットに戻ろうとするが……

ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

「なっ」

敵は見逃す気など無いようだ。しかも乱入者は、ISと同じ物で作られていると言うアリーナの遮断シールドを貫通させる事ができる程の攻撃力を持っており、しかもこちらをロックしている。

つまり、背中を見せれば後ろから刺される、と言う事である。



『一夏、早く!』

「タイミングを逃した! 今背中を見せれば後ろから撃たれる!」

一夏はまだ初めての相手との回線の開き方がわからないため、普通にオープン・チャネルで鈴に言った。

「ならあたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ!」

「女を置いて逃げるなんて、そんなの男のする事じゃねえ! 俺も戦う!」

「馬鹿! アンタの方が弱いんだからしょうがないでしょうが!」

鈴の言葉が一夏の胸にグサリと突き刺さる。そんな遠慮無く言わなくても良いだろと一夏は思った。

ちなみに、一夏がプライベート・チャネルで返さなかったので、鈴も普通に喋っている。

「別に、あたしも最後までやり合うつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生達がやってきて事態を収拾」

「あぶねえっ!」

一夏は視界の端に浮かぶ光を見て本能的に鈴の体を抱きかかえてさう。その直後、極太のビームがさっきまでいた空間を灼きながら通り過ぎた。

「ビーム兵器かよ……。しかもセシリアやユウのISより火力が上

だ」

ハイパーセンサーの簡易解析でその熱量を知った一夏は戦慄した。まともに当たれば火傷では済まないだろう。

「ちよつ、ちよつと、馬鹿！ 放しなさいよ！」

「お、おい、暴れるな。        って馬鹿！ 殴るな！」

「う、うるさいうるさいうるさいっ！」

鈴は顔を真つ赤にしながら一夏の顔にグーパンチを連打する。お姫様抱っこされてたらそれはそれは恥ずかしい事なのだが、一夏は本当に女心に疎い男である。

「だ、大体、どこ触って        」

「！ 来るぞ！」

砂煙の中から再びビームが一夏たちを襲う。その一射で吹き飛ぶように砂煙が晴れていく。

次第に人型のシルエットが浮かび上がり、色と形が明確になっていく。

砂煙が完全に晴れた時、一夏と鈴は目を見開いた。

「一……機……だと！？」

「何なのよ、こいつら……」

一夏たちが見据える先には、二機のISが一夏たちを見据えていた。片方のISは青色で、右腕に長大なビームキャノンを引っ提げて射撃体勢を取っている。

どうやら先程の砲撃はあの青いISから放たれたものだろう。

もう一方のISは赤色で、右腕に円形のシールド、左手に小型のビームガンを持ち、何とも奇妙な事に、背中に円盤がいくつかくっついていてる。

そして両方のISに共通する点、それは『全身装甲』フル・スキンだ。

通常のISは部分的にしか装甲を用いない。何故か。必要無いからだ。防御ならばシールドエネルギーだけで事足りる。それに装甲が増えれば可動域が狭まり、近接戦闘では致命的だ。防御特化型IS等が物理シールドを搭載する事は珍しい事ではないが、まるで全身が機械で出来ているかのように肌の露出が1ミリも無いというのは、一夏たちは聞いた事は勿論、見た事も無い。

そして何より、あの二機のISからは感情という物が一切感じられない。

頭部にただ一つしかない四角いセンサーレンズは、まるでこれから排除する敵の品定めをするような、そんな冷たい視線を一夏たちに送っている。

「お前ら、何者だよ」

「.....」

当然のごとく、謎の乱入者達は一夏の呼びかけに応じる気配すら見せない。

『織斑くん！ 凰<sup>ファン</sup>さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！  
すぐに先生たちがISで制圧に行きます！』

山田先生が割り込んできて一夏たちに言った。いつもよりずっと凛々しさが増している……気がする。

「いや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます」

一夏は確信している。あの二機から逃れる可能性は、限りなくゼロに等しいという事を。

何より、遮断シールドを突破するほどの攻撃力を持つ青色のISを誰かが抑えなければ、観客席にいる人間に被害が及ぶ可能性がある。それだけは何としても阻止しなければならない。

「いいな、鈴」

「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいってば！ 動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

一夏が解放すると、鈴は自分の体を抱くような格好で離れた。

（おいおい、そんなにイヤだったのか……）

あまりの行動の速さに一夏は心の中で頂垂れた。

『織斑くん！？ だ、ダメですよ！ 生徒さんにもしもの事があつたら』

途中で青いISがビームを撃ってきたため、山田先生の言葉は途中で  
までしか聞けなかった。

しかし極太とはいえ、単発のビームを避ける事はそれほど難しい事  
ではない。

一夏と鈴は散開して回避した。

「ふん、向こうはやる気満々みたいね」

「みたいだな」

一夏と鈴は横並びになってそれぞれの得物を構える。

「あたしが青いのをやるわ。一夏は赤いのを。それでいいでしょ？」

「そうだな。多分ユウもそう言うだろうしな」

二人はお互い武器の切っ先を軽く当て、それを合図に自分が担当す  
る敵に向かって突っ込んだ。

「もしもし！？ 織斑くん聞いてます！？ 鳳さんも！ 聞いてま  
すー！？」

ISのプライベート・チャネルは声に出す必要は全く無いのだが、  
そんなことを失念するほど真耶は焦っていた。凜々しさなど欠片も  
無い。

周囲から見た時の痛さ具合がまた残念な感じになっている。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！ 何をのんきな事を言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

千冬はそう言って箱から白い粒子をスプーンですくってコーヒーに入れていく。

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

真耶に指摘され、千冬はピタリとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、塩と書かれた容器に戻す。

「なぜ塩があるんだ？」

「さ、さあ……？ でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど……」

「……………」

「あつ！ やっぱり弟さんの事が心配なんですネ！？ だからそんなミスを」

「……………」

真耶は直感で感じ取っていた。これは嵐の前の静けさ。良くない事が起こる前兆だという事を。

真耶はすぐさま話を逸らそうと試みる。

「あ、あのですねっ  
」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

遠慮なく、躊躇なく押しつけられるコーヒー（微塩）。もはや回避は叶わないようだ。

真耶は涙目でコーヒー（微塩）を受け取った。

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むといい」

さすが天下のブリュンヒルデ様。我々に出来ない事を平然とやっているのける。そこに（以下略

「先生、暢気<sup>のんき</sup>にコントをやっている場合ではないと思いますが？  
あと塩を用意したのは僕です」

コウがクスクス笑いながらカミングアウトした。コイツこそが真の悪魔である。

「奈々瀬、あとで職員室に来い」

目もくれずにそう言い放つ千冬。体から立ち上るオーラが彼女の怒りを顕著に示していると言えよう。

「先生！ わたくしにISの使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが、       これを見る」

千冬はブック型端末を操作し、第二アリーナのステータスチェックを表示させる。そこには

「遮断シールドがレベル4に設定……？ しかも、扉がすべてロックされて       あのISの仕業ですの！？」

「そのようだ。これでは避難する事も救援に向かう事もできないな」  
落ち着いた様子でセシリアの要求を受け流す千冬だが、よく見るとその手は苛立ちを抑えきれないとばかりにせわしなく画面を叩いている。

「で、でしたら！       緊急事態として政府に助勢を       」

「やっている。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

目に見えて不機嫌になっていく千冬を見て危険だと悟ったセシリアは、頭を押さえながらベンチに座った。

「はああ……。結局、待っている事しかできないのですね……」



「何、どちらにしてもお前は突入隊に入れないから安心しろ」

「な、なんですって!？」

「セシリアさん、口調口調」

ユウに指摘されセシリアはハッと我に戻った。千冬は咎めもせず続ける。

「お前のISは一对多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

「そんな事はありませんわ! このわたくしが邪魔などと」

「では連携訓練はしたか? その時のお前の役割は? ビットをど  
ういう風に使う? 味方の構成は? 敵はどのレベルを想定してあ  
る? 連続稼働時間」

「わ、わかりました! もう結構です!」

「ふん。わかればいい」

セシリアは千冬の指導を、両手を揺らして止めた。所謂『いわゆる降参』の  
ポーズである。

「はあ……。言い返せない自分が悔しいですわ……」

さつき以上に深いため息をつきながら、セシリアは頂垂れた。

「織斑先生。これは私見なんですが……」

「今度は奈々瀬か。何だ？」

セシリアに代わって、今度はユウが千冬に意見を出す。

「敵の狙いは一夏と凰さんとの『決闘』だと考えられます」

ユウの言葉に千冬が怪訝な顔をする。

「それはどういう事だ？」

「確かに、避難も救援もできないこの状況は、中で戦っている二人にとって危険極まりない事です。ですが、逆に考えれば、我々外野の人間に余計な行動をして欲しくない、と見る事もできます」

「なるほど。確かにそう考える事もできるだろう。つまり、我々が無闇に動かなければ織斑と凰以外に危険はない、という事か？」

「一夏たちがおかしい戦い方をしなければ、まず問題無いかと。それと、敵はこんな大規模な施設を一瞬でシステムハックするほどの手練れです。いかに精鋭とは言え、学生如きのシステムクラックで容易に開くとは思えませんね」

「先程からのお前の発言を鑑みるに、織斑と凰を見捨てるのが前提のように聞こえるが？」

「そうは言ってません。ただ、このままの状況が続けば、間違いく一夏たちはやられるでしょうね」

千冬が忌々しそうに舌打ちする。そろそろ我慢の限界が近付いてい

るらしい。

「……手があるならさっさとええ」

「僕が救援に向かいます」

「……バカかお前は。さっきから救援には行けんと何度も」

「1分で戦闘に介入します。さ、行きますよオルコットさん」

「……は？」

頭を抱える千冬を余所<sup>よそ</sup>に、ユウはセシリアに付いて来るよう促した。セシリアは話についていく事ができず、呆然と立ち尽くしている。

「最初に行きたいって言ったのは貴女でしょう？ なんなら待ってても」

「行きますわ」

「待て！」

ピットに備え付けられたモニタールームから出て行こうとする二人を千冬が止めた。

「仮に救援に行く手段があるとして、だ。お前たちが行くべきではない。お前たちでは連携の錬度も、戦闘経験も不足している。大人しく教師たちに任せて」

千冬の呼びかけに真耶は何度も頷いているが、ユウは振り返って千

冬に告げる。

「失礼ですが、突入隊の武装構成は？」

「何？ ……通常のラファールと打鉄、ワルキューレだが？」

「その程度の火力ではあの二機に傷を付けることすら難しいですね」

「それはどういう事だ？ お前たちなら戦えらとでも言うのか？」

「セシリアさんがいなければ厳しい。あれらはそういう奴らです」

「……チツ、さっさと行け」

「ありがとうございます」

千冬は悩んだが、結局二人を行かせる事にした。これ以上の上策が無い以上は仕方が無い。

ユウとセシリアは一礼してモニタールームから走って出ていった。

（子供に頼るしか無いとは……何をやっているんだ私は……）

千冬は己の不甲斐なさに、苦虫を噛み潰したかのような顔をしてモニターのコンスールを叩いた。

真耶も千冬と同じく、悔しそうな表情を浮かべている。

だからこそ気付かなかった。このモニタールームから、ユウとセシリア以外にもう一人、姿を消した人物がいる事に……。

Shift 3・7 「最強の盾、最強の矛（前編）」（後書き）

一夏「原作より増えてる！？」

鈴「あんなのが出るなんて聞いてないわよ！？」

HAL「言ったらお前ら速攻で逃げるだろうが」

ユウ「大丈夫です。死にはしませんから」

HAL「そうそう、一夏には主人公補正（弱）があるから、なんとかなるだろ」

一夏「（弱）ってなんだよ（弱）って！！」

HAL「サブ以上主人公以下の主人公補正（笑）の事だ」

一夏「ワケわかんねえよ！！」

ユウ「一夏、どさくさに紛れて凰さんのお尻とか……」

一夏「触んねえよ！？」

鈴「そこ、なんで胸じゃないの？」

一夏「突っ込む所そこ！？」

HAL「お前ら喋くってないでさっさと戦え」

S h i f t   3 - 8   「最強の盾、最強の矛（中編）」（前書き）

やっぱりプラネイトディフェンサーって強いと思うんだ。  
……常識的な相手になら。

Shift 3 - 8 「最強の盾、最強の矛（中編）」

「うおおおおお！！！！」

ガギン！

雪片と円形のシールドが音を立ててぶつかり合う。

シールドは実体を持っているため、零落白夜を用いても効果はない。赤いISはすぐさま左手のビームガンを連射して反撃してきた。

「くっ！」

一夏はビームの雨を掻い潜り、距離を取りながら相手を観察する。

（相手の武装は攻撃重視……とは言えないよな）

ビームガンは小型ゆえに威力・射程があまり無く、どうにも決め手に欠ける武装構成となっている。

一夏が頭を回転させている中、赤いISはビームガンを連射しながら突進してきた。

「その程度、なんとも無いぜ！」

ユウとの試合がフラッシュバックする。あの集中豪雨のような弾丸の雨を経験した一夏にとって、この程度の弾幕など慣れっこだ。

「もう一度だ！」

再び雪片とシールドがぶつかり合う。だが今度は先程のようにはな

らない。

シールドの中心に光が灯る。そして次の瞬間

「なッ!？」

一夏の視界のすぐ左を光が駆け抜けた。

それが何なのか確認する間もなく、光が自分の方に寄ってくるのを感じた一夏は慌てて下方に回避した。

「つぶねえ!」

再び距離を取った一夏が見遣ると、シールドからビームサーベルのような光の刃　　正確にはビームスパイクと言う　　が伸びていた。

「あんな物までついてるのかよ……!？」

意外な隠し武器に驚く一夏だが、赤いISの次の行動に一夏は再び驚愕した。

赤いISが背中中の円盤を切り離したのだ。  
いくつかの円盤が青いISに向かっていく。

「何だよ、あれ……」

この後一夏だけでなく、鈴もまた円盤の恐ろしさを知る事になる。



「ちょこまかと……いい加減当たりなさいよ！」

鈴は青龍刀を振り回して青いISに突撃する。

……が、青いISは苦も無く回避し、距離を取る。

そしてビームキャノンを撃ってくる。

このやり取りを幾度となく繰り返していた。

（何なのよこいつ……逃げてばかりで……）

絶え間なく襲い来るビームを回避しながら鈴は舌打ちした。

先ほどの砲撃のような威力は無い。が、代わりに連射性能が上がっている。

どうやら出力を調整する事で性能を変えているらしい。

「近付けないなら……近付かなくてもいい攻撃をするまでよ！」

そう言っただけ鈴は衝撃砲を展開し、見えない弾丸を発射する。

別に近接攻撃ができなくとも、結果として倒せばいいのだ。手段は問わない。

「これなら……！？」

だが次の瞬間、鈴の目論見は脆くも崩れ去った。

見えない弾丸が当たる直前、青いISの前に3基の円盤が三角形の形で滑り込み、電磁波を発生させて弾丸を弾いたためだ。

「ッ……まだよ！」

鈴は衝撃砲を連射する。が、その<sup>じやうげん</sup>尽くが円盤が発生させるバリアによって弾かれる。

「何なのよ……あれ……」

しかも青いISにとってその効果は関係無いらしく、再びビームキヤノンを連射してくる。

「あああもうっ！！ 何なのよあのチートは！！」

鈴は泣きたい衝動に駆られたが、一夏の手前、抑え込んでビームを回避し続ける。

近接戦闘は取り合ってもらえず、衝撃砲はあのチートなバリアで防がれる。

どちらか片方ならばまだやりようはあったものの、今の鈴に成す術は無い。

「鈴！」

そんな鈴の惨状を知ってか知らずしてか、一夏が近づいてくる。

「一夏！？ 何してんのよ！ さっさと赤いの潰しなさいよ！」

「交代だ。青いのは俺がやる。お前じゃ攻撃効かないだろ？」

一夏の言ってる事はもっともだ。このままではジリ貧は確実だろう。

「……勝算は？」

「ある。だから鈴は赤いのと相手してくれ。近付かなければまず負けないはずだ」

「わかった。青いのは距離を取るのを優先してるみたいだから、もしかしたら近接武器を持ってないのかもしれない。とにかく気を付けて」

「わかった。サンキュ、鈴」

そう言つて一夏は青いISに向かっていった。  
代わりに赤いISが近付いてくる。

鈴は気持ちを入れ替えて赤いISと対峙した。

「こつから先は私が相手よ」

一夏はビームを回避しながら、青いISに近付いていく。

「はあああああ!!!!」

十分に近付き雪片を振るう。

ジジジ……バシン!

「ッ!?!」

だが円盤が作る摩訶不思議なバリアによって、その刃は呆気無く止められてしまう。

「やっぱりそのままじゃダメか……なら!」

再び肉薄し、今度は零落白夜を発生させて雪片を振るう。

雪片は再びバリアに接触するが、今度はまるでバリアを焼き切るようにその刃が青色のISに向けて直進する。

「……………」

だが、青色のISは寸での所でそれを回避した。  
さらに、お返しとばかりにビームの雨を降らせる。

（ダメだ。普通のスピードじゃ逃げ切られる。『イグニッション・ブースト瞬間加速』なら……）

一夏はエネルギーの残量を確認する。幸い、あと一回零落白夜と瞬間加速を併用できるだけのエネルギーが残っている。

（よし、行ける。あとはタイミングだ）

一夏が決行準備を整え、タイミングを計っていたその時だった。

「一夏あつー！」

アリーナのスピーカー大声が響いた。キーン、とハウリングが響くその声は、簞の物だった。

「簞！？ 何してんだお前……」

一夏が中継室の方を見やると、簞がマイクを握って立っていた。審判とナレーターは気絶している。  
どうやら簞の伸されたようだ。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

またもやキーン、とハウリングが起こる。一夏がハイパーセンサーで箒を見ると、彼女は肩で息をし、その表情は怒っているような、焦っているような、そんな不思議な様相をしていた。

「……………」

突然の館内放送に青いISは興味を持ったようで、一夏から目を逸らし、じっと箒の方を見ている。

（今しかない！）

一夏は瞬時に突撃姿勢へと移行し、瞬時に加速する。  
青いISは一夏の突撃に気付いたようだが、もう遅い。

「もらった！」

一夏は、零落白夜を発生させた雪片を袈裟掛けに振り下ろした。  
円盤のバリアによる防御は意味を成さず、回避は間に合わない。必  
中の一撃だ。

「……………」

だが、青いISに狼狽した様子は見受けられない。  
むしろ、ごく自然な流れで、最善の手を打ってきた。

（なっ！？）

その一手に、逆に一夏がうろたえた。青いISが打った手。それは……

ザシュン！

青いISの左腕が宙に舞い、ドスンと重そうな音を立てて地面に転がる。

（コイツ……躊躇なく左腕を出しやがった！）

青いISは咄嗟に左腕を出してガードしたのだ。左腕は失ってしまったが、それによって雪片の威力は減衰し、一夏が急所に刃を突き立てる事は適わなかった。

（バカな！？　こんな事、普通の人間にできる訳がない！　こんな事ができるのは、よっぽどイカれた人間かロボットぐらいしか……！？）

「がつ！？」

咄然とする一夏に対して、青いISは容赦なく蹴りを繰り出した。一夏はそれをもろに食らい、地面に叩きつけられた。

青いISはそのままトメとばかりにビームキャノンの砲口を一夏に向ける。

砲口が光を灯し、熱量を蓄えていく。

一夏には、その光景がひどくゆっくりと感じられた。

「一夏あー！！」

箒と鈴の声が重なる。そして次の瞬間、砲口から破壊の光が放たれ

た。

（ゴメン、箒、鈴、ユウ、千冬姉……俺じゃ勝てなかったよ）

一夏は覚悟を決め、ゆつくりと迫りくる光の壁を直視する。

だが、その光が一夏を蒸発させる事は無かった。

何故か。それは光が道半ばで爆発したからだ。

大きな音と閃光が一夏だけでなく、鈴や箒、そしてアリーナ中を襲う。

「ぐっ……一体何が……」

音と閃光が止んだのを確認すると、一夏は青いISを見た。

一方、青いISはあらぬ方向に視線を向けている。

一夏も青いISが向いている方向を見ると、そこには……

天使が、居た。

Shift 3・8 「最強の盾、最強の矛（中編）」（後書き）

HAL「チツ、あとちよつとで消し飛んだのに」

一夏「俺を殺す気だったのか!？」

ユウ「良かったですね、主人公補正（弱）が付いていて」

鈴「ちよつと、あたしまるつきり役立たずじゃない!」

HAL「今回はすこぶる相性が悪かったって事で……」

ユウ「というかもういない子確て」

鈴「チートのバカー!……!」

ユウ「……行っちゃいましたよ?」

HAL「次回はユウとセシリアのターンだからな……。

鈴の見せ場終了のお知らせだ。

セカン党の皆さま、本当に申し訳ありません」

ユウ「凰さん……不憫な子……」



Shift 3・9 「最強の盾、最強の矛（後編）」（前書き）

長かったクラス対抗戦もいよいよ終わりです。

え？ 戦闘が呆気無い？ 弱点突けば大抵そんな物です。

ポケモンだって弱点突けば一撃でしょ？ それと一緒にSA

そしてビーム・マグナムの威力……（汗）

『初登場時は強力に見える』補正が存分に掛かった結果である。

Shift 3・9 「最強の盾、最強の矛（後編）」

一夏と鈴が正体不明のISと戦っている頃、ユウとセシリアはピットにいた。

どうやら敵は観客席やアリーナの扉はすべてロックしていたが、ピット周辺のロックは怠ったらしい。

ロックされたドアに阻まれる事無くここまで来れた。

扉一枚隔てた向こう側に、戦場がある。

扉一枚。されどその扉は厚く、名をピット・ゲートと言う。

「1分で戦闘に介入できると仰ってましたわね。何をなさるおつもりですか、まさか、お一人でシステムクラックを行う気では

」

セシリアの質問に首を横に振るだけでユウは応え、懐から白いカードを取り出した。  
ふっしん

否、白いカードに見えるそれは、待機形態となっている、ユウが持つ専用機、アルテミスだ。

次の瞬間、ユウの体を包み込むように光が発生し、光が収まると、そこにはアルテミスを装着したユウが立っていた。

「セシリアさんもISを展開してください」

「それはなぜ わかりましたわ」

要領を得ないユウの言葉だが、直感的にセシリアはユウの言葉に従った。

体を包み込む光を発した後、一瞬前まで制服だったセシリアの全身

にはブルー・ティアーズの装甲が装着された。  
それを確認したユウが口を開く。

「さて、介入する前に作戦を伝えます」

作戦。そう聞いたセシリアの顔に翳りが出る。

「しかし私たちでは上手く連携できるかどうか」

「連携？ そんな物は必要ありません。一対一タイムで十分です」

「……え？ それはどういう事ですか？」

セシリアの脳内にはクエスチョンマークがいくつも並べられる。

「セシリアさんは赤い方のISを相手してください。青い方は僕が抑えます」

「いえ、あの……ユウさんはあの映像を見て何とも思わないのですか？」

セシリアが指さす先には、円盤から発生するバリアによって衝撃砲を防がれている鈴の姿を映した、リアルタイム・モニターがある。  
不安な顔をするセシリアとは対照的に、ユウの顔に動揺は無い。

「貴女一人でも十分に戦えます。ビットとライフルを連射しているだけで結構です。僕が保証します」

「いえ、ですからブルー・ティアーズにあのバリアを抜くほどの火力は」

「セシリアさん。僕の言っている事はそんな次元の話ではないんです。やるか、やらないか。やらないのであれば、僕一人で行きます」

「~~~~っ、やります！ やればいいのでしょうか！？ それより、この扉をどうにかしませんと、介入も何もありませんわよ！？」

ユウに急かされ、セシリアは半ばヤケクソ気味に叫んだ。

セシリアの問いに対し、ユウはニヤリと（見る人が見れば黒い）笑みを浮かべた。

「ではセシリアさん。ここで質問です。アリーナの遮断シールドは何で出来ているでしょうか」

「何って……確かISのシールドと同じものだと言った授業で習いましたわ」

「ええ、そうです。ならば、ISのシールドと同じ感覚で処理することができる。そう思いませんか？」

「……一体何をなさる気ですか？」

セシリアは背筋を嫌な汗が流れるような錯覚を感じ、ユウに尋ねた。ユウはまるで新しい玩具を買ってもらった子供が、その玩具を使って初めて遊ぶ時のような、そんなキラキラした眼をしながらセシリアの質問に答えた。

「ISのシールドを抜く代表的な手段の一つ、それは……圧倒的な力という名の暴力。そしてISのシールドと遮断シールドの相違点は……貫通させても直接的に人を傷つける心配が無いという事で

す」

そう言つてユウは右手にビーム・マグナムを呼び出し、ピット・ゲートに銃口を向けた。

「……！？ まさか……」

「対人戦では怖くて使えませんでした……対象がモノなら遠慮は要りませんよね？ ……行きます！」

ユウの額にひらめきの光が走り、直感の赴くまま、ユウはビーム・マグナムの引き金を引いた。

圧倒的な熱量を持つて解き放たれたビームは、ピット・ゲートを溶解、貫通し、その先の対象に当たつて爆発を引き起こした。

爆発の光が収まり、ピット・ゲートを見たセシリアは衝撃の光景を目の当たりにした。

「そんな……有り得ない……なんて威力……」

ゲートには先程のビームによつて開いたと思しき孔があり、その孔は余熱によつてISが通れるくらいの大きさまで広がっている。

「うわ……やっぱり威力有り過ぎだな。後でリミッター掛けなきゃ……セシリアさん、行きますよ」

「……！？ わ、わかりましたわ」

セシリアはユウの後に従い、アリーナに躍り出た。

アリーナに舞い降り、介入に成功したユウとセシリアは、それぞれ一夏と鈴の元へ向かう。

「一夏、大丈夫ですか？」

「鈴さん、加勢しますわ」

二人はそれぞれ敵と味方の中間に身体を滑り込ませ、敵と相對する。

「……………」

「……………」

赤と青のISは動じる事無く、新たな乱入者を見る。その視線にはやはり感情らしい感情は無い。

「ユウ……………俺、生きてるのか？」

一夏はユウの背中を見ながらそう聞いた。

「……………ええ、まだ生きてます。君は悪運が強いですね」

「そうか、俺は……………」

「一夏。泣いてないでさっさと退いて下さい。今度こそ死んでも知りませんよ？」

「え？」

一夏は無意識に流していた涙に気付き、慌ててそれを拭う。

「ユウ……あいつら、多分無人機だ」

拭い終えてから、一夏はそうユウに言った。

「左腕を見る限りそうとしか思えませんね」

「……遠慮なくやってくれ」

一夏はユウにそう告げると、後退を開始した。

「鈴さん、わたくしが来たからには、もう心配ありませんわ。ささ、退いて下さいな」

セシリアは優雅に腰に手を当てながらそう言い放った。

「はぁ？ 何バカな事言ってるのよ」

しかし鈴はジト目でセシリアの提案を蹴った。

「バカとは何ですのバカとは！？」

「赤いのは近接戦闘主体で来るわ。アンタ取りつかれたらボロクソじゃない。あたしが壁になるから、さっさと潰しなさいよ」

「身も蓋も無い事を      わかりましたわ。くれぐれも流れ弾に突

っ込んで自滅なさないよう」

セシリアは背後にいる鈴の雰囲気を感じ取り、顔を引き締めた。

「そっちこそ、フレンドリーファイアは勘弁してよね」

鈴がセシリアの横に並んだ。セシリア同様、その顔は真剣さで引き締められている。

「それじゃあ……」

「第二ラウンドの……」

「スタートです！」

鈴、セシリア、ユウの順にそう言って、敵に向かってその身を躍らせた。

「ああああああ……！」

鈴が青龍刀を振り回しながら赤いISに突撃する。

赤いISはシールドを掲げ、鈴の青龍刀を巧みに弾いていく。

「セシリア！」

「行きなさい！ ブルー・ティアーズ！」



鈴がタイミングを計って赤いISから離れると同時に、セシリアがビットを射出する。

ビットは後退する鈴を援護するようにレーザーを撃ち出していく。

赤いISはレーザーに反応して円盤を射出し、それらは赤いISを守るように形を成して電磁波を放出する。

「チツ、あんな細かいレーザーじゃ通るワケが……!？」

悪態をつく鈴だったが、次の瞬間驚愕に目を見開いた。

ヒュンヒュン、ビシンビシン！

何故か。それはレーザーが円盤のバリアを素通りして赤いISにダメージを与えたためだ。

「素……通……り？」

セシリアも驚くべき現実を目を瞬いた。脳裏に先程のユウの言葉がリピートされる。

「貴女一人でも十分に戦えます。ビットとライフルを連射しているだけで結構です」

「まさか、こういう意味でしたの……」

セシリアはここに至って、初めてユウが言わんとしていた事に気付いた。

非常に単純な話だ。ユウは知っていたのだ。あの摩訶不思議なバリ

アの弱点を。

あのバリアはレーザーに対する防御力が皆無なのだ。

あのバリアは一見強力な物だ。実体武装も、強力なビームもおそらく通しはしまい。

しかし、セシリアの武装は、一部を除きそのほとんどがレーザーである。

あの赤いISは右腕のシールドを除けば丸裸同然、という事になる。

だからユウはセシリアの参戦を強く望んだのだ。

なぜなら、セシリアはあの赤いISに対して武装の相性が最高だから。

セシリアがあの赤いISに対しての天敵となる事を知っていたから。

だとすれば、セシリアの役割は自ずと決まってくる。

（わたくしを活かして下さるユウさんのためにも……なんとしてもアレを撃ち果たして御覧に入れますわ！）

己の役割を自覚したセシリアにとって、赤いISはもはや敵ではない。ただの獲物に成り下がった。

ビットが猟犬のように獲物の周りを駆け回り、不意を突いて獲物に噛みついていく。

セシリア自身が猟師となって獲物に弾丸を撃ち込んでいく。

セシリアが参戦して、10分経つか経たないか。

鈴の存在が危うい物になるほど、セシリアは圧倒的だった。

ボロボロになった赤いISは呆気無く動きを止め、地面に倒れ伏した。

「わたくしの手に掛ければ、こんなものですわ」

「何この理不尽。あたしの苦勞は何だったのよ……」

上機嫌なセシリアとは対照的に、鈴は頭を抱えて悪態をついた。

何とも呆気無く消化不良な戦闘だったが、ユウの戦術がハマった結果である。

喜びこそすれ、嘆く事では決していない……はずである。

（ユウさん。あとはお任せしますわ）

セシリアはユウにプライベート・チャンネルでそう伝え、未だ戦い続けるユウの方を見やった。

青いISと対峙するユウは、ビーム・ガトリングガンを両手に持つて連射している。

しかし、その<sup>くま</sup>尽くが円盤から発せられるバリアによって防がれていた。

（ホントチートだよねえ……プラネイトディフェンサー。セシリアがいなければ敵しかったよ）

どうやら円盤を用いたバリアはプラネイトディフェンサーと言っらしい。

しかもユウはその弱点まで見抜いている。

何故かはさておき、その知識が役に立った事は言うまでも無い。

今、ユウは攻撃よりも回避に重きを置いている。  
プラネイトディフェンサーを突破できる火力が無いわけではないが、  
どうせすぐに赤いISは機能停止に追い込まれ、それに伴い円盤は  
力を失い落ちるだろう。

今青いISにとって、三枚の円盤は最後の砦に等しい。  
無くなれば、比喻でも何でも無く、丸裸なのだ。

そうなれば、あとはビーム・マグナムの一射で事足りる。  
労が少なく済むなら、それに越した事は無い。

10分後、当然のように、その時はやってきた。  
セシリアからプライベート・チャネルを受け取ると、青いISの正  
面を覆っていた電磁波が止まり、円盤が浮力を失い地面に落ちてい  
く。

後に残ったのは、ただ攻撃する事しかできない機械人形ただ一体……。

「最強の盾、最強の矛と言えど、所詮は機械。この程度ですね」

ユウの言葉に憐みの情など一切、有りはしない。  
ただ無感情に、ビーム・マグナムの銃口を敵に向ける。

「これで……終わりです」

ビーム・マグナムから破壊の奔流が撃ち出される。

狙いは頭部と右腕の間。ビームは寸分違わぬ軌道で青いISを撃  
ち抜いた。

唯一の武器であるビームキャノン、加えて右腕、頭部が蒸発し、も

はや鉄屑同然となった青いIS”であったモノ”は完全に機能を停止し、地面に墜落した。

「終わった……のか？」

赤と青のISが動きを止めた後、一夏は三人のもとにゆっくりと近付いてきた。

「ええ。弱点を突けば呆気無いものです」

「そうですね」

「今日は散々だったわ……」

三人は三者三様に一夏の言葉に反応したが、皆安堵の表情を浮かべている。

「あ、ああ………！？」

一夏は三人の奥で何かが動くのを感じた。

ハイパーセンサーで確認すると、赤いISがぎこちなく動いているのが見える。

そして赤いISはゆっくり立ち上がると、なんとシールドを構え、突進してきた。

三人はそれに気付かない。

「危ねえ!!!」

「「「え!?!」」」

一夏は三人を左右に掻き分け、雪片を正眼に構えて赤いISの突進を受け止めた。

しかしそれで赤いISの突進を止められるはずが無い。

勢いに負けてズルズルと後退を強要される。

白式のシールドエネルギーがガリガリと削られ、一夏の視界が赤に染まる。

「再起動!? そんなバカな!?!」

ユウがそんな事を言った気がしたが、一夏は目の前で悪足掻きを続ける敵に集中する。

「こ、のおおおおお!!!」

赤く染まる意識の中で、一夏は両手が何か堅い物を両断するような手応えを感じ、その直後、意識を完全に手放した。

Shift 3・9 「最強の盾、最強の矛（後編）」（後書き）

HAL「風神雷神ってこんなに弱かったっけ？」

ユウ「弱点突けばこんなものです」

セシリア「これでわたくしの株がまた上がったというワケですわね」

鈴「なによ！ セシリアばかり！ こんな不公平よ！」

HAL「だってお前のIS、第三世代型のくせに大して強くないんだもん」

鈴「あたしの甲龍は安定性がウリなの！」

HAL「中国って全然安定性無いよな。事故多発するし」

鈴「ぐっ……ぐう……」

ユウ「作者、あまり虐めると可哀想ですよ」

HAL「ま、良いじゃないか。漫画版の3巻のカバー絵は鈴なんだから」

鈴（コイツら……（怒））

第「あまりムキになるな。私のようにばづられていないだけマシだ」

HAL&amp;・ユウ&amp;・セシリア&amp;・鈴「」「」……

……あ。「」「」

一夏「箒。俺はちゃんと気付いてたぜ」

箒「一夏あ（照）」

セシリア「ぐぐぐ……」

鈴「ぎぎぎ……」

HAL「やれやれ……してやられたな」



S h i f t 3 - 1 0 「浮かび上がる影」(前書き)

最も大切なシーンを飛ばしたような気がするが……ま、いつか飛ばして困るシーンなど一つもなかったからな(笑)

あと、PVが20万突破しました。

読者の皆さま、本当にありがとうございます。

これから拙作をよろしく願います。

# Shift 3-10 「浮かび上がる影」

「う……？」

全身の強い痛みに呼び起され、一夏は目を覚ました。

視線を周囲に這わせると、どうやら保健室らしい。

一夏はベッドの上に寝かされていた。

目覚めたばかりでまだ十分に動かない頭を働かせ、一夏は情報の整理を始めた。

（ええと、どうなったんだ……？ 確か俺は赤いISに突進されて、それから ）

「気がついたか」

そんな声が聞こえるのと同時にカーテンが音を立てて引かれた。

一夏は確認するまでも無く、来客は千冬だと確信した。  
改めて確認しても、やはり千冬である。

「体に致命的な損傷は無いが、全身に軽い打撲はある。数日は地獄だろうが、まあ慣れろ」

「はあ……」

一夏は何故自分の容態がそんな状況になったのか理解できず、ふと窓の外に視線をやった。

空はもうあかね色に染まっている。どうやら今は放課後らしい。

「全く、絶対防御をカットしてあの突進を受け止めるとは……結果として途中で白式がエネルギー切れになる事は無かったが、よく死ななかった物だ」

千冬の話聞きながら、一夏は首を傾げる。絶対防御は普通カットできないシステム根茎だったはずだが……。

「まあ、何にせよ無事でよかった。家族に死なれては寝覚めが悪い」そう。千冬にとって一夏は世界でたった二人だけの”家族”である。だからだろうか。千冬が一夏に向ける顔は、いつもよりずっと柔らかかった。

ちいゆねえ  
「千冬姉」

「うん？　なんだ？」

「いや、その……心配かけて、ごめん」

一夏の言葉に、千冬はきょとした後、小さく笑った。

「心配などしていないさ。お前はそう簡単に死なない。なにせ、私の弟だからな」

変な信頼の置かれ方だが、一夏はそれが千冬の照れ隠しの一種だとわかっていたので、別段気にしなかった。

「では、私は後片付けがあるので仕事に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

千冬は一夏にそう告げると、すたすたと保健室を出ていった。

「……………奈々瀬か。盗み聞きとは悪趣味だな」

保健室のドアを閉めてすぐ、千冬は見向きもせずになんか言った。  
ドアの近くには、ユウが腕を組み、壁に背をもたれながら立っている。

「盗み聞きだなんて人が悪い。今丁度来ただけですよ」

「ふん、どうか。……………一夏に会ってなくていいのか？」

「どうせ死ぬ訳ではないですし、見舞客なんて他にも沢山居ますし。  
……………そうでしょう？」

ユウがそう尋ねたのは千冬ではない。千冬が振り向くと、ユウの先に  
箒が歩いてくるのが見える。

箒は千冬に一礼し、自然な流れでドアに手を掛け、ふと動きを止めた。

「ユウ、お前は入らないのか？」

「お二人の逢瀬を邪魔する訳にはいきませんから。ささ、行きましようか織斑先生」

「う……………む。そうだな……………」

箒は顔を真っ赤にし、その顔を見た千冬は非常に不安そうな顔をするが、ユウに引き摺られるようにして保健室から離れていった。

そしてユウは……

（鈴が堕ちるのを見る事が出来ないのは残念だが……確定だからいいや）

千冬を引き摺りながらそんな事を考えていた。

この後、原作通り鈴が堕ちたのは言うまでも無い。

学園の地下50メートル。レベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間。

そこに二人の人間が居る。

織斑千冬と、奈々瀬ユウである。

機能停止した二機のISはすぐさまこの空間に運び込まれ、解析が開始された。

それから二時間、千冬とユウは何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ている。

「……………」

室内は薄暗く、お互い沈黙のまま映像に見入っていた。

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みでウィンドウが開く。ドアのカメラから送られて来たそれには、ブック型端末を持った山田真耶が映っていた。

「どうぞ」

許可をもらってドアが開くと、真耶はいつもより幾分きびきびとした動作で入室した。

「二機のISの解析結果が出ました」

「ああ。どうだった？」

「はい。あれらは 無人機です」

リモート・コントローラ・スタンド・アローン  
遠隔操作と独立稼働。世界中を駆けずり回っても決して見つかる事の無いであろうそれらの技術のどちらか、あるいは両方の技術がある二機のISに使われている。その事實は、すぐさま学園関係者全員に箱口令かんこうれいが敷かれるほど衝撃的なものだった。

「どのような方法で動いていたかは不明です。赤い方は織斑くんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切れていましたし、青い方は奈々瀬くんの攻撃で蒸発してました。どちらも修復はおそらく無理かと」

「コアはどうだった？」

「赤い方はこれまた織斑くんの攻撃で両断されて解析不可。青い方

は無事でしたが……登録されていないコアでした」

千冬はうむ、と頷くと、ユウに顔を向けた。

「奈々瀬。お前を連れてきたのは解析結果を教えるためではない事くらい解っているな？」

「動作方法とコアについてでしたら、僕をゆすつても何も出ませんよ？」

千冬は首を横に振った。

「聞きたいのはそっちじゃない。あの二機について、知っている事を話せ」

千冬の質問に、ユウは怪訝な顔をした。

「あの二機について……ですか？」

「知っているんだろう？ でなければ独断でオルコットを戦場に連れ出すなんて真似、お前はしないからな」

なるほど、とユウは頷いた。

「……確かに。では知っている事をお話ししましょう。まずあの二機の名称ですが、赤い方はメリクリウス、青い方はヴァイエイトと言います。開発コンセプトは『最強の盾と最強の矛』。この二機はそれぞれ対で運用される事を前提に考えられ開発された、第三世代型ISです。メリクリウスに装備されている円盤、これはプラネイトディフェンサーと言って」

「ちょ、ちょっと待って下さい！　どうして奈々瀬くんがそんなに詳しく知ってるんですか？」

真耶がユウの話に割り込み、疑問を口にした。

「当然じゃないですか。これらは元々アナハイムで開発されていたモノなんですから」

「ええっ！？」

「奈々瀬、何故この二機が無人機としてここに現れたのか、心当たりはあるか？」

驚く真耶を余所に、千冬はユウに話を促した。

ユウは目を閉じて考える仕草をした後、それではと言って話し始めた。

「実はですね……数ヶ月前、この二機のデータが何者かによって盗まれたのです」

「ええっ！？」

「……山田先生、一々驚くな。奈々瀬、盗んだ者に心当たりは？」

再び驚く真耶に辟易しながら、千冬はユウに話を促した。

「風潰しに探すのも嫌になるほど多いに決まっているでしょう？  
最新鋭ISの機体データですよ？　喉から手が出るほど欲しいと思  
っている輩などいくらでも居ます」



「……そうか」

千冬は端から期待などしていなかったのか、その顔に落胆の色は見られない。

「ただ、犯人を絞り込む事は不可能ではありません」

「なに？」

「盗まれた時の二機の機体データの完成度は7割でした。プラネイトディフェンサーが動くかどうかといった所です。しかし今日現れた二機を観察したところ、おそらくほぼ完成していたように思えます。だとすれば、データを盗んだ人物の近くに相当優秀な技術者が居ると考えられます」

「ふむ……そうか。ご苦労だった。もういいぞ」

「わかりました。ではこれで失礼します」

そう言ってユウは二人に一礼して部屋を出ていった。

部屋を出た後、ユウはしばらく歩いてぼそりと呟いた。

「まさかここまで完璧に完成させてくるなんて……。こんな事をする科学者なんて、この世界には一人しかいない。貴女なんでしょう？」

たばね  
束さん。

Shift 3 - 10 「浮かび上がる影」(後書き)

鈴「だからどうしてわたしのシーンばかり(以下略)」

HAL「だってこの物語の主人公は(以下略)」

一夏「次は引っ越しの話だと。そっぴゃあれからひと月経ったな」

和花「なん……だと……？」

Shift 3-11 「これは呪いですか？ いいえ、ただの強制イベントで

はい。いつものイベントです。河井さん暴走回（笑）  
多分暴走イベント（仮）はこれで最後だと思います。

……………需要があれば続けるヨ？

大事なお知らせ

最近大学の方が忙しくてしばらく更新速度が大幅に落ちたりしますが、まあ元々不定期連載と散々謳っているものでいつもの事だと思って笑って水に流して下せえお代官様ア（土下座）

クラス対抗戦の乱入者事件から数時間後。

「ねえねえ、本当に出ていくの？」

「仕方ないでしょう。元々1ヶ月の約束でしたし」

IS学園寮の1036号室で二人の男女が問答をしている。

男はさつさと部屋から出ていきたいと言わんばかりに自分の荷物を纏めており、女はそれを手伝いながらも口では別れを惜しんでいるように見える。

「奈々瀬くんとはいい感じに波長が合ってたんだけどなあ……」

「それは貴女の思いこみです。その思い込みで僕がどんな思いをしたか……」

「あ、あれは奈々瀬くんが可愛いから……ちょっとムラム」

「女の子がそんな事言うんじゃないありません！！！」

「……はい」

男の名は奈々瀬ユウ。女の名は河井和花と言う。

この二人はルームメイト……否。”元”ルームメイトである。

『元』と言うのは、ユウが引越す事になり、和花と別れる事になったからだ。

誤解しないよう言うておくが、別に二人は付き合っている訳ではな

いい、ただ部屋が別になるだけである。

和花が不安そうにユウに尋ねる。

「次のルームメイトとはうまくやってけるかなあ……」

「貴女が欲望剥き出しに襲いかかったりしなければ、まあ何とかするでしょう」

手を動かしながら平然と毒を放つ元・ルームメイトに、和花はあはは、ときこちない笑みで応えた。

「……もう少しオブラートに包んで言ってくれないかなあ……」

「では訂正します。１日経って貴女の下から逃げ出さなければ、そのルームメイトとはきっと友達以上の関係になれるでしょう」

「それはわたしが襲う前提で言ってるの!？」

「え？ 違うんですか？」

「違うよ!」

目に涙を浮かべながら抗議する和花だが、ユウは全く意に介さず淡々と引越しの準備を進めている。

しかしそもそも、何故ユウが急に引越す事になったのかと言うと

20分前

ユウは部屋に戻るなりベッドに倒れ伏した。

千冬に散々引つ張り回されたのだから仕方ないと言えは仕方ないのだが。

「……今日は疲れた」

「奈々瀬くん、お疲れ様。マッサージしようか」

「……遠慮します」

ルームメイトである和花が、男がたわわな果実を揉むかのように指を妖しく動かしながらにじり寄ってくる。

その姿に本能的な危機感を感じたユウはとりあえず断ってみたが……

「答えは聞いてないよ」

どうやらマッサージは確定事項らしい。和花は、疲れて動けずうつ伏せのままベッドに倒れ伏すユウの上に馬乗りになり、和むような微笑みを浮かべる。

……しかし惜しいかな。笑顔を浮かべて両手をウネウネキキといやらしくくねらせながら浮かべる和花の微笑みは、ユウにとっては捕食者がニンマリと浮かべる狂喜の微笑みにしか見えなかった。

体力も気力もほとんど残っていないユウに、自力で脱出する手段は無い。

つまり、今回ばかりは和花を阻む物など無い訳で……。

「それじゃあいっただっきま」

コンコン。

訂正。一つ、強力なやつがありました。

二度ある事は三度ある、とは誰の言葉だったか。諺ことわざだったか。

とにかく三度目の奇跡が訪れたのは紛れもない事実なので、ユウはオートでそれに乗っかる以外道は無い。

「はい。どちら様ですか？」

「すみません。わたしです」

ユウがノックに対して返答すると、ドアの向こうから山田先生の声が聞こえてきた。

室内の二人は顔を見合わせ、すぐさま居住まいを正して来客を迎え入れた。

「山田先生、どうかなさったんですか？」

「はい。部屋割りの件なんですけど、そろそろ1ヶ月経つので……」

「ああ、そうですね。この時期なら丁度いいですし」

山田先生が全て言い終える前に、何の話題なのかおおよそ見当がついたユウは即答した。

ユウの後ろで和花が目を丸くする。

「え？ 何の事？」



「元々は一夏の所に変更する予定だったんですけど、変えるのは1ヶ月後にするって事にしてたんですよ」

「そうなんですか？」

「はい」

和花は山田先生にも尋ねてみたが、山田先生からも同じ答えが返ってきたので、ユウを引っ掛けて部屋の奥に連れ込み、両手をユウの両肩に置いて問い質した。

「わたし何も聞いてないんだけど？」

「そういえば言うのをすっかり忘れてました。1ヶ月って早いですねえ」

へらへらと答えるユウに、和花はため息をついた。

「もう……やっと慣れてきた所なのに。すぐに引越すんですか？」

「奈々瀬さんと河井さん、織斑さんと篠ノ之さん次第ですけど……」

和花が山田先生に尋ねると、山田先生はうーんと唸って答えた。

「なら先に向こうの二人に聞いてきたらどうです？」

「それもそうですね」

ユウの提案に山田先生は得心し、また後で、と言って部屋を去っていった。

その10分後、山田先生が戻ってきて、

「織斑ちゃんと篠ノ之さんは今日中で良いそうです」

との事なので、ユウも今日中で問題無いと即答し、残るは和花の意見聞くのみとなった。

「どうしますか河井さん。わたしとしては一日でも早く健全な生活をして欲しいんですけど」

山田先生がそんな事を言う。つまりは言外に「今日中に引越させてくれ」と誘導しているようなものだが……本人は自覚しているのだろうか。

和花はというと、腕を組みながら唸っている。

（ここでわたし一人が駄々をこねると皆に迷惑がかかる。でも認めたら認めたで逸材が……）

周囲から見ればくだらない事だが、本人にとっては真剣に考えるべき問題だ。……前者と後者が社会的につり合うかは別として、だが、悩む和花に、ユウが助け船を出した。

「心配しなくとも、しばらくはちよくちよく見に来ますよ。ほ

」

「先生、私も引越しは今日で良いです」

他の人が代わりに襲われたら申し訳ないですし、とユウが続ける前に和花が山田先生にそう伝えていた。

まさしく手の平返し。本当に欲望に忠実である。

「それじゃあ決まりですね。わたしは篠ノ之さんを手伝ってきますから、準備をしておいて下さいね」

山田先生はそう言って再び部屋から出ていった。そして話は冒頭に  
戻る

「これで全部ですね」

どうやら片付けは終わったらしい。ベッドにはいくつかのバッグが置いてあり、それ以外のユウの私物は綺麗さっぱり片付いている。片付けを終え、ベッドでくつろぐユウに、和花がそういえばと手を合わせて言った。

「奈々瀬くん。一生のお願いがあるんだけど」

「……何ですか？」

「女装して」

「全力でお断りします」

ユウは当然の如く即答で拒否したが、和花はユウの答えを予測していたのか、ニヤリと口元を歪め、自分のベッドの下をゴソゴソし始めた。

「いいのかなあ〜そんな事言つて」

「……………どういう意味ですか？」

和花の自信過剰ぶりに、ユウは背筋に悪寒を感じた。

以前言つたと思うが、ユウはニュータイプである。厨二がよく自慢する偽ニュータイプではなく、本物のニュータイプである。

つまりどういう事かと言うと、ユウの直感は大抵的中する。それも嫌な物ほど。

和花はベッドの下からある物を取りだした。

「じゃん」

「！？　そ、それは！？」

出てきた物を見て、ユウは心臓を鷲掴みにされたかのような衝撃を受けた。

「なんで……………なんでそれがあるんですか！？」

「んふふ〜、なんででしょ〜」

ベッドの下から出てきた物。それはいつぞやのユイお手製の超改造女子用制服だった。

「そんな……………塵一つ残さず処分したはずなのに」

「でも確かにここにあるよ？」

そう。確かに存在しているのだ。ユウの手によって、塵一つ残さな  
いようイオン分解機を用いて確かに無に帰されたはずの代物が。  
ユウが驚愕に目を見開く中、和花がにじり寄りながら問いかけてく  
る。

「ねえ奈々瀬くん？ わたしがこれを皆に見せながらあの事の顛末  
を話したら……どうなるかなあ？」

「ッ!？」

ユウはたじろぎ、一步後退する。それに合わせて和花が一步前進す  
る。

繰り返す事五歩。ユウは部屋の隅に追いやられていた。

逃げ場？ そんな物があっても逃げられるはずなど無い。

手錠なんかよりも遥かに強い拘束力をユウに与えているソレが、和  
花の手に収まっている限りは。

「ホラホラ、早くしないと山田先生が戻ってきちゃうよ？」

和花はユウを壁に押しつけながら耳元で囁いた。

時間とは残酷な物である。ユウに思考の暇すら与えず、選択肢を極  
限まですり潰すのである。

ユウの選択肢は三つ。

1、素直に女装する。

2、ISを使って証拠を消し飛ばす。

3、何らかの手段で和花を気絶させ、記憶を消す。無論証拠は残さない。

選択肢が出そろった時点でコンマ3秒。すぐさま選択肢の吟味に移る。

まず、1は選んだ時点でゲームオーバー。

2はその場凌ぎにしなければならず、始末書を書かされる上、和花が誰かに言うつリスクも考えると上策とは言えない。むしろ下策。

3は一番手っ取り早く、かつ最も安全な策である。……が、命を取られそうな状況でもないのに女性を傷つけるようなマネはユウとしてはできる限りしたくないことである。

「奈々瀬くうくん。実はあ……隠しカメラ付けといたんだよねえく、この部屋に……」

「!？」

それはもうネットリと、ウザったいくらい甘い猫撫で声で和花が秘密を吐露する。

和花の突然の告白に、ユウは慌てて周囲を見回した。が、それらしい物は見当たらない。

「場所わかるう？ わからないよねえ？」

ドヤ顔をこれでもかとユウに見せつけながら詰め寄る和花。この女、欲望の為なら情け容赦なく獲物を追いたてるようだ。

ユウは新しくもたらされた情報を整理し始める。

まず、和花がウソをついている、つまり隠しカメラが無い場合。心苦しくはあるが単純にプラン3を実行すればいい。それで苦痛から解放される。

逆に和花が真実を言っている、つまり隠しカメラがある場合。

プラン3を実行したとして、短時間でカメラを探し出すのは難しい。しかも何かの拍子に和花の記憶が戻れば、それでジ・エンドである。選択肢は二つ。間違えればバッド・エンド。判断材料はいくつかあるが……

視覚……カメラ発見できず。見落としの可能性大。

和花の表情からはカメラ発見への不安を見出せず。

記憶……和花の行動を全て把握できてはならず、隠しカメラ設置の可能性を否定できず。

直感……判断不能。役立たず。

ユウの直感は大事な所で役に立たない。だって大事な所なんだもの。オモシロイトコロさて、この判断材料からユウが出した答えは

「……………これっきりですよ？ 後には何も残さないで下さいよ？」

すっと腰を下ろし、小動物のように丸まり、目尻に涙を浮かべながら、ユウは和花を睨みつけた。  
はい、堕ちました。ワロスワロス。

和花は口元を喜びに歪め、ユウに制服を渡した。

さて、読者の諸君には真実をお伝えしよう。

和花が出した制服、これは実は和花の手作りなのだ。言っておくが和花に瞬間記憶能力なんて物は無い。

和花の純粋な欲望がこの奇跡を体現したのだ。

そして監視カメラだが、そんな物は一つも無い。ただのハッターである。

だがしかし、和花の純粋な欲望が（以下略

欲望の為なら何だってする和花。<sup>あくじょ</sup>ユウにとっては悪夢の権化（笑）である。

5分後。

いつぞやのように、和花の目の前には女ですら目を輝かせて飛び付くような超絶美少女が、全身をモジモジとさせ、顔を赤らめながら立っている。

だがしかし驚く事無かれ。この美少女、男である。……一応……  
May be。

「相変わらず着替え早いね」

「もう良いでしょう？ 山田先生が戻ってこない内に」

ユウの全身を舐め回すように鑑賞する和花に対して、ユウはそわそわとドアの方に気を遣っている。  
そのせいで和花の行動に気付くのが遅れてしまった。



「えいつ」

「ぐがつ！？」

和花はユウをベッドに押し倒した。ユウは成す術も無くベッドに組み敷かれる。

「……女装だけの約束では？」

「そう。ここからは私の勝手。だから奈々瀬くんに、わたしに付き合う義理は無いね。別にあしらってくれていいんだよ？」

ジト目で訊くユウに対し、和花はユウの虚乳を鷲掴みにしながら答えた。

別にラッキースケベとか、そういう場面では決して無い。

ふと、和花が何かに気付いたようにユウに尋ねた。

「ねえ、女の子同士のキスはノーカンだと思う？」

「そんなの知りませんし、キスする気なんて毛頭ありませんし、そもそも僕は男です」

「もし仮に、万が一奈々瀬くんが男だとしても。もしそうだとしても、わたしはこんなに可愛い男の娘ならキスの一つや二つ、してもいいかなって思う。というかしたいね。よししよう」

「勝手に納得して話を強制的に進められるのは、僕としては非常に不本意なんです。というか婿に行けなくなるんで止めて下さい僕

には心に決めた人がつてこつちくんなあああ！！！！」

本日二度めの貞操の危機。神の気まぐれで出血大サービス。誤解しないように言うておくが別に血が出る訳ではない。そしていつもいい所で都合の良い奇跡が

がちやり。

「奈々瀬くん、河井さん、引越しの準備は終わ　　！？」

ドアを開け、室内の惨状？　を見た山田先生がピタリと動きを止めた。

惜しいかな。神は三度までしか奇跡を融通してくれないらしい。仏の顔はこの場合通用しないのであしからず。

「「や、山田先生！？　これは　　」」

「すすすす、すみません！　部屋を間違えました！」

弁明しようとする二人に対し、山田先生はある意味正しい判断でドアを閉め立ち去ろうとするが……

（（あの人を逃がすのは不味い！！））

極限の状況下で研ぎ澄まされた二人の直感が、山田先生の逃亡を阻んだ。

二人の非常に息の合った連係プレーによって山田先生はあえなく部屋に引き摺りこまれ、ドアが閉まり鍵が掛けられる。

「わ、わたしは女の子同士に興味なんてありません！！」

「山田先生落ち着いて下さい！ 僕です！ 奈々瀬ユウです！」

「……………え？」

目の前の超絶美少女から放たれる聞き覚えのある声に、山田先生は動きを止める。

考える事たつぷり10秒。山田先生が出した結論は、

「奈々瀬くんって、女の子だったんですね……………」

「酷い！ 山田先生ならこんな女装、見破ってくれと思ってたのに……！」

そう言つてユウはかつらを取るが、山田先生はまだ気付かない。

「あ、ああ。そういう事ですか。髪が短くても十分魅力的だとわたしは思いますよ」

「山田先生もそう思います？」

「はい」

「いえ、あの……………そうじゃなくて……………」

不運な事に、むしろ勘違いは悪化している。  
そしてユウにとって最も不運な事、それは……

「そつだ山田先生！ 私服着せましょうよ私服！」

「それいいですね河井さん！　そうすればきっと自分の可愛さに気付いてくれますよ！」

この二人が暴走スキル持ちであるという事だ。

「ちよつと……二人とも何を　」

「何って、制服脱これがないと他の服に着替えられないよ？」

「ちゃんと素材を確かめないと、どんな服が合うかわかりませんから」

即興でファッションショーでもやるつもりなのだろうか。  
和花と山田先生がユウの服を剥ぎ取りに掛かる。

「待って！　止めて！　本当に嬬に行けなくなるから！」

「女の子同士なんだから、恥はずかしくないよ」

「それに、女の子がお嬬さんに行く訳が無いじゃないですか」

もはや留まる事を知らない女二人。

上から下から手を掛けられ、制服があつさりと剥ぎ取られる。

「次はブラウスだね」

「短パンを穿いてたんですか。女の子らしくないですね」

続いて二人はそれぞれブラウスと短パンに手を掛け、剥いだ瞬間

『なんて言うか、今まで聞いた事が無いような、」女の子の悲鳴をマーベラスに表したようなナイス悲鳴でしたね。』（後日、某寮生談）』

「なあユウ。何があったんだ？」

「……………」

一夏は隣のベッドに乗っかっている、団子のように丸まった掛け布団に尋ねた。

正確には本日付で一夏のルームメイトになったユウに尋ねた。しかし返事は無い。だが彼は屍ではない。

「しっかしビックリだぜ。悲鳴が聞こえて駆けつけてみたら、河井さんと山田先生が倒れてて、お前が部屋の隅でガタガタ震えながら命乞いしてたんだからな。男物の制服姿で」

「……………」

「二人は記憶が飛んでるみたいで何があったのかわからないって言うてたし。なあユウ、何があったんだ？」

「……………」

「……まあ、言いたくないなら無理に聞かない。話したくなったら話してくれればいいさ」

そう言って一夏は追及を止めた。

ユウは一夏の親切心に感謝し、疲れのために襲い来る睡魔に意識を蝕まれる中、篝の「付き合ってもらっ」だか何だかの声を聞いたのを最後に、完全に意識を手放した。

Shift 3-11 「これは呪いですか？ いいえ、ただの強制イベントで

一夏&amp;・第「あの悲鳴は一体何だったのか。」

HAL「敢えて詳しくは語るまい。想像にお任せするよ」

ユウ「だいたい同じような想像に行きつくような気が……」

ユイ「これで学園七不思議のひとつが出来上がったわけだね！」

ユウ「やめてよ姉さん!!」

HAL「そして次からやつと二巻の内容に入るわけだな」

一夏「また新たな悩みの種が増えるわけだな」

第「お前が言っな」

## Shift 4-1 「三人目の男子」(前書き)

皆さんお久しぶりです。学祭終わって一息付いたと思ったら、最終投稿日から一カ月くらい経っててビックリしたHAL-HALです。唐突ですが、バトルスピリッツ(と言うかカードゲーム)にハマりました。

23日に発売されるヴァイスシュヴァルツポータブルとか買おうかな〜とか思ってたります。

とどのつまり何が言いたいのかと言うとですね……「また更新速度(以下略)

ごめんなさい。やっぱり執筆頑張ります(泣)



## Shift 4-1 「三人目の男子」

六月上旬。

あの悪夢のような引越してから半月ほどが経過した。

結局和花と山田先生の記憶は戻らず、単なる二人の衝突事故（発見当時のユウの行動に疑問が残るが）として寮生たちに認識された。真実を知っているのはユウただ一人なのだが、ユウは今も沈黙を保っている。

多くの女子がユウに真相を尋ねに行ったが、その都度、ユウは光の無い瞳をしながら、

「その真相をお伝えする事はできません。僕が地獄まで持って逝きます」

の一点張りであった。

ユウに話す気が無い以上、事件の真相が迷宮入りという形で収束を迎えるのは当然の帰結である。

今となってはただの衝突事故に目を向ける人間などいない。

何故か。衝撃的な話題が飛び込んで来たからである。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名です！」

ホームルーム開始時に山田先生が放った一言は、ここ最近の『ダブルマヤマヤ衝突事件』を吹き飛ばすには十分だったようだ。クラス中が一気にざわつき始める。

だが、間を置かずしてそのざわめきは不意に中断される。  
当然と言えば当然だろう。なにせ教室に入ってきた転校生の片方は、  
”三人目”だったのだから……。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしく願います」

そう言つて転校生の一人、シャルルは純度100パーセント、嫌みの欠片も無い笑顔を振り撒きながら一礼した。

動作の一つ一つが洗練されており、それでいて仕草にウザさが全くない。女たらしで有名なフランスから来たとはとても思えないような紳士の動きである。

「お、男……？」

誰かがそう呟いた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

」

礼儀正しい立ち居振る舞いに、男性とも女性とも取れるような中性的な顔立ち。髪は濃い金髪で、それを首の後ろで丁寧に束ねている。体つきは男性にしては細く、華奢と言ってもいいくらいスマートで、細い脚が相対的に長く見え、その格好良さを強調している。

第一印象は誇張でも何でもなく『貴公子』といった感じた。

『きゃ……』

「はい？」

『きゃあああああーっ！！！』

無論、男子に飢えた女子が鮮度の良い男子に食いつくのは自明の理  
と言えよう。

女子共の歡喜の咆哮が教室を震わせる。

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美系！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった～～！」

「バラ園が……バラ園が見えるッ！！！」

最後のやつはもう分かり切っていた事なのでスルーの方向で。  
女子一同がうんうんと深く頷いているのもスルーで。

このクラス本当に腐女子しか居ないんじゃない？ なんてツッコミは  
ご容赦下さい。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

千冬が何とも面倒臭そうな感じでぼやく。一般的な女子はまだいい  
として、腐女子の相手など御免被ると言わんばかりに。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

山田先生に言われ、はたと気づいた腐女子共。女に興味は無いがとりあえず聞いというてやるよといった感じで席についていき、ようやく教室にあるべき静けさが戻ってきた。

そしてもう片方の転校生に視線が集中する。

もう一人の転校生はシャルルと比べて小柄で、容姿だけなら綺麗と言うより可愛いの種類に入るであろう美少女だ。

ユウと同じような銀の髪を腰近くまで長くおろしているが、整えられた感はなく、切るのが面倒で放っておいたらこんな感じになりましてと説明されるとしつくりくるかもしれない。

しかし、トータルではかなりハイレベルな容姿を持っていると言えよう。

……ある一点を除けば、だが。

「黒……眼帯……」

誰かがそう呟いた。そう、左目に付けられた黒眼帯である。医療用の白くて四角いそれならまだ救いようはある。だが、彼女が身に付けているのは、蛇と呼ばれた傭兵が付けていたような、あの黒眼帯である。

一同の視線がその黒眼帯に釘付けになっている。中には目を輝かせている者が若干一名ほどいるが、そんなマニアックな人種、そうはいまい。

だが、ガチな黒眼帯を付けているからと言って、彼女がそっち関係者とは限らない。

たとえ今開かれている真紅の右目から感情が一切読み取れないとし

ても、ただの軍事オタクだと言われれば強引にでも納得できるかもしれない。

「……………」

しかし、当の本人からは未だに何の挨拶も無い。

腕組みをして教室の女子達を下らなさそうに見下した態度に何かしらの悪意を感じる女子は少なくないだろう。しかし、彼女から放たれる威圧感が女子達に口を噤ませている。

しかしそれはほんの数瞬の出来事で、今、彼女の視線はある一点……千冬にのみ向けられていた。

「…………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

まるで軍人がするように背筋を伸ばし、直立不動の姿勢をとって素直に返事をする転校生      ラウラの行動に、一同は呆然とした。

返事をされた千冬の方はというと、シャルルの時とはまた違った面倒臭そうな顔をしている。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう言ってラウラは再び直立不動の姿勢を取っている。  
そして女子達に顔を向けた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

『……………』

クラスを重苦しい沈黙が襲う。続きを言えと無言のプレッシャーが女子達によってラウラに掛けられるが、ラウラにそれを気にする様子は全く無い。

ユウはその光景に目もくれず、小型端末に目を遣っている。

ディスプレイには、とある個人      ラウラ・ボーデヴィツヒ  
の情報が映し出されている。

ラウラ・ボーデヴィツヒ少佐

ドイツ軍IS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ黒ウサギ隊」隊長

詳しい経歴や個人の内面に関わる情報は得られないが、少なくとも今、教壇に立っているラウラ・ボーデヴィツヒなる女子は軍人で間違いないようだ。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

山田先生が精一杯の笑顔でラウラに訊くが、ラウラから返されたのは無慈悲な即答だけだった。

一夏は心の中で泣きそうな山田先生を気遣うが、その時、何の偶然かラウラと目が合った。合ってしまった。

「！ 貴様が      」

ラウラはつかつかと一夏の前まで歩いていき、一夏が認識する暇いとまを与えずに右手を振り上げる。

「……………!?」

そのまま右手を振ろうと力を込めた瞬間、自分の右腕がピタリと固定された感触をラウラは感じ、驚いて振り返った。

振り返ったラウラの視線の先には、右手首を掴んでいるユウの姿。

ユウの瞬間移動染みた動きに、一同は驚愕に目を見開いた。

ラウラはユウを睨みつけた。

「……………離せ」

「その提案には承服しかねます。一夏を殴りたければ、まずはその行為に見合う理由を言って下さい。何も知らずに殴られる一夏が可哀そうですから」

ユウの言い分は尤もだ。ラウラは舌打ちして一夏に視線を移す。

「私は認めない。貴様があの人ひとの弟であるなど、認めるものか。それが貴様を殴る理由だ。さあ言ってやったぞ。殴らせろ」

ラウラは再び右腕に力を込める。しかし腕は動かない。

ユウがまだ手を離さない。ラウラは再びユウに顔を向ける。

「貴様……………」

「気に入らないから殴るとか、そんな小学生みたいな幼稚な理由で他人を殴りつけるのは止めて下さい。……………教官を失望させる気です

か？」

「ッ！？」

ユウの口から教官という単語が出た瞬間、ラウラの顔が困惑に歪んだ。

ラウラの視線が千冬に移る。

千冬は何の感情も出さず、ただラウラを見ている。

不意にラウラの右腕から力が抜けた。ユウが掴んでいた手を離すと、ラウラの右腕がだらんと下ろされた。

「……ふん」

まるで興が削がれたと言わんばかりに、ラウラは一夏の前から立ち去り、空いている席に向かって行った。



Shift 4・1 「三人目の男子」(後書き)

ユウ「遂に出ましたね……」

HAL「遂に出ましたよ……」

ユウ&amp;「HAL」「ヒ・ロ・イ・ンがッ……!」

ユウ「この時をどれほど心待ちにしたか……」

HAL「ここからが本当のスタートだな」

一夏「お前ら何の話してんだ?」

ユウ&amp;「HAL」「お前は黙ってるリア充」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3751r/>

---

IS&lt;インフィニット・ストラトス&gt; 月明の守護者

2011年11月20日09時04分発行